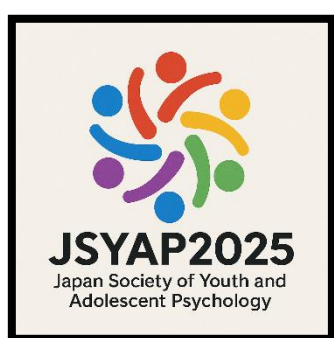


日本青年心理学会第 33 回大会

発表論文集

Proceedings of Annual Meeting of
JAPAN SOCIETY OF YOUTH AND ADOLESCENT PSYCHOLOGY
6th and 7th December 2025
The National Olympics Memorial Youth Center



2025 年 12 月 6 日・7 日

国立オリンピック記念青少年総合センター

日本青年心理学会第 33 回大会 発表論文集

目次

ご挨拶	1
プログラム	2
会期および会場のご案内	5
大会参加者へのご案内	9
発表者および自主シンポジウム企画者へのご案内	11
招待講演	16
シンポジウム	17
口頭発表	25
ポスター発表	55

【巻末】日本青年心理学会第 33 回大会ハラスメント防止のための基本方針

ようこそ、日本青年心理学会第 33 回大会へ

ここは、研究の話も、思いつきも、ちょっとした迷いも、
安心して語り合える場でありたいと思います。

- だれもが気持ちよく参加できるように、
相手の立場や考えにちょっと想像力を。
- 性別、年齢、職位、国籍、障がい、性的指向などの違いを尊重し、
互いの価値観を押しつけない対話を大切にしましょう。
- セクシュアル、パワー、アカデミック、マタニティ／パタニティ（出産・育児に関する）ハラスメントはもちろん NG です。
- 議論は歓迎。でも、攻撃はナシ。

学問の自由を大切にしながら、ユーモアと敬意を忘れずに。

この大会が、「語り合うことの楽しさ」と

「人と人とが支え合うあたたかさ」に満ちた場になりますように。

*発表論文集末尾に、本大会での「ハラスメント防止のための基本方針」を掲載しています。ぜひご参照ください。



ご挨拶

日本青年心理学会第 33 回大会は、2025 年 12 月 6 日(土)・7 日(日)に、東京代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターにて対面開催されます。

会場となる国立オリンピック記念青少年総合センターは、東京駅から新宿駅に出て小田急線に乗り換えると、小田急線の新宿駅から参宮橋駅までは 2 駅、3 分ほどの立地にあります。参宮橋駅の西口から降りますと、ちょっとすてきな参宮橋商店街を楽しむこともできます。

前回の札幌学院大学・北海道大学開催の第 32 回大会からの流れを受けまして、本大会のテーマには「多様性のその先へ」を掲げています。前回大会を踏まえつつ、日本青年心理学会としてのあり方や進むべき青年研究の方向性を模索していきたいと考えています。社会は多様化し、多様性への理解が進みつつあります。青年心理学が見つめる青年も、学校に来て教室で質問紙に回答できる青年だけではなく、いろいろな状況にある青年を幅広く対象として注視するようになっていきます。それにつれて、研究の方法と技術も拡張し、多様な方法論が展開されてきています。青年心理学の研究は、対象と方法を多様に広げながら、ひとつの目的を大切にしながら進んでいるように思います。“私たちの学会”だと思って会員が大会に集い、参加者同士の質疑を通して意見交換する理由は、そのあたりにあるのかもしれませんが。

第 33 回大会運営の特徴は、大会運営改革 WG と協働して準備を進めている点にあります。大会運営の運用面のポイントが明確になり継承されていくことで省力化が進み、効率的に大会を運営できるようになれば、より多くの会員が大会開催を引き受けやすくなるはずです。この先の青年心理学会の持続可能性を高めることにも、青年心理学会の大会の多様化にもつながっていくものと期待しています。

12 月第1週の週末は公私どちらもお忙しい時期とは思いますが、交通の便の良い東京での開催となります。東京は、筑波大学の前身の東京教育大学のあった場所でもありますし、記念すべき日本青年心理学会の第1回大会が開催された地でもあります。ここを込めて準備し、多くの方々のご参加をお待ちしております。

大会準備委員長 佐藤有耕(筑波大学心理学類)

【1日目】12月6日(土)

プログラム

9:30	受付開始		
10:00	口頭発表 A(センター棟 402)	口頭発表 B(センター棟 405)	口頭発表 C(センター棟 409)
	座長:中尾達馬	座長:天谷祐子	座長:山本誠一
	10:50	10:50	10:50
11:00	座長:中尾達馬	座長:天谷祐子	座長:山本誠一
	11:50	11:50	11:50
	11:50	11:50	11:50
昼食休憩(13:00 まで) 高校生向け企画(12:00~12:50 センター棟 416)			
	準備委員会企画(センター棟 417)		
13:00	【招待講演】 子どもの「体験格差」の実態, その解消に向けた実践		
14:30	講演者:今井悠介(公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン代表理事) 司会者:藤井恭子(関西学院大学)		
休憩			
	研究委員会・日本キャリア教育学会合同企画シンポジウム(センター棟 417)		
14:45	青年を対象とした多様な研究法を学ぶ—青年心理学, キャリア教育の観点から— 企画者:日本青年心理学会 研究委員会 話題提供者:千島雄太(筑波大学) 茂垣まどか(帝京大学短期大学) 京免徹雄(筑波大学) 永作稔(武蔵野大学) 指定討論者:山田剛史(関西大学) 司会者:永井暁行(金沢星稜大学)		
16:45			
休憩			
	総会(センター棟 417)		
17:00	総会		
18:00			
移動			
	懇親会(国際交流棟 1 階レセプションホール)		
18:30	懇親会		
20:30			

【2日目】12月7日(日)

9:00	受付開始		
	ポスター発表(センター棟 416)		
9:15 10:00	責任在席発表(奇数番号)		
10:00 10:45	責任在席発表(偶数番号)		
休憩			
	口頭発表 D(センター棟 402)	口頭発表 E(センター棟 405)	口頭発表 F(センター棟 409)
11:00	座長:大久保智生	座長:小塩真司	座長:信太寿理
	0P2-D 利他に重点を置いて就職先 選択を考える大学生の強みとは一 民間企業就職活動期の文科系3年 次生を対象に一	0P2-E 大学生の友人に対する寛容の 構造 一多元性に関する予備的検討一 服部茜(関西学院大学大学院教育学研 究科)	0P2-F 青年期における母親の養育態度 と母親に対する感謝との関係 池田幸恭(和洋女子大学)
11:50	若松養亮(滋賀大学)	藤井恭子(関西学院大学)	
昼食休憩			
	口頭発表G(センター棟 402)	口頭発表H(センター棟 405)	口頭発表I(センター棟 409)
13:00	座長:三好昭子	座長:本田周二	座長:齊藤誠一
	0P2-G1 未来の私は今をどう振り 返る?一大学ノスタルジアの先行 体験を促すフィールド実験一 千島雄太(筑波大学) 長峯聖人(江戸川大学)	0P2-H1 同性友人関係における状況に 応じた切替の類型別の、孤独感 (LS0)、アタッチメント・スタイ ル、多様性志向の比較 大谷宗啓(兵庫教育大学大学院連合学 校教育学研究科) 若松養亮(滋賀大学)	0P2-I1 「人道問題に人道的解決なし」 一緒方貞子の信念と実践をめぐる伝記 分析一 伴野崇生(慶應義塾大学)
13:50			
14:00	座長:三好昭子	座長:本田周二	座長:齊藤誠一
	0P2-G2 日本の成人期女性はなぜ モラトリアム傾向なのか 白井利明(大阪教育大学名誉教授)	0P2-H2 青年の「キャラ」に対する意 味づけによる友人関係と自己意識一 「外キャラ」「内キャラ」の観点か ら一 藤野遼平(大阪大学大学院人間科学研 究科)	0P2-I2 青年心理学はいかにして青年の 声を聴くのか一新聞記事の分析を通じ て一 都筑学(中央大学名誉教授) 齋藤信(鈴鹿大学) 堀尾良弘(愛知県立大学) 橋本広信(群馬医療福祉大学) 峰尾菜生子(岐阜大学)
14:50			
休憩			

	自主シンポジウムA (センター棟 402)	自主シンポジウムB (センター棟 405)	自主シンポジウムC (センター棟 409)
15:00	思春期「男子」の性—ウェブサイト に書き込まれた 10 代の「悩 み」に注目して— 企 画 者: 加藤弘通(北海道大学) 話題提供者: 佐藤奈月(北海道大学大学院) 土屋友美賀(北海道大学大学院) 嶋田祐汰(北海道大学大学院) 滝口達也(北海道大学大学院) 指定討論者: 森山誉恵(認定 NPO 法人 3keys)	青年心理学と哲学—青年心理学とそ の周辺(1)— 企 画 者: 小沢一仁(東京工芸大学) 話題提供者: 藤井恭子(関西学院大学) 橋本広信(群馬医療福祉大学)	伝記資料を用いて人格発達にアプロ ーチする伝記分析 —アガサ・クリス ティーの事例— 企 画 者: 赤木真弓(駒澤大学非常勤講師) 三好昭子(日本女子体育大学) 話題提供者: 茂垣まどか(帝京大学短期大学) 赤木真弓(駒澤大学非常勤講師) 大野久(立教大学名誉教授)
16:30	移動		
	クロージングセッション(センター棟 402)		
16:35	集いの終わりに		
16:45	第33回大会準備委員会(大会準備委員長:佐藤有耕)		

会期および会場のご案内

会期：2025年12月6日(土)・7日(日)

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1

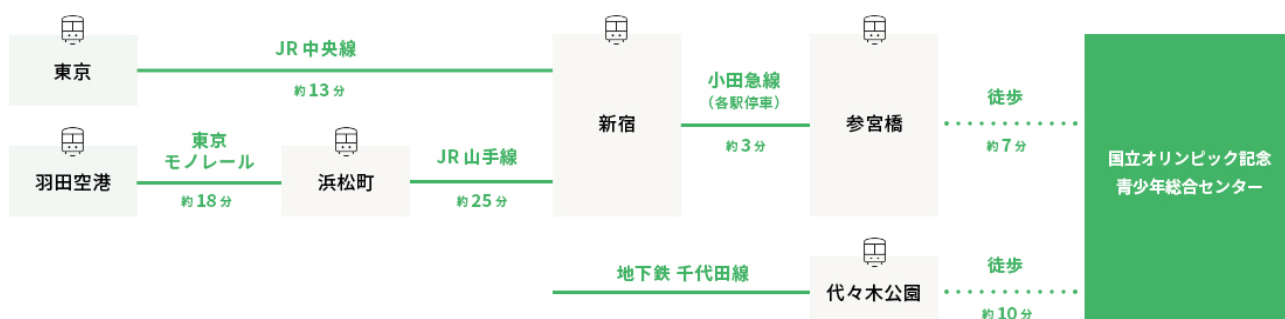
アクセス：<https://nyc.niye.go.jp/access>



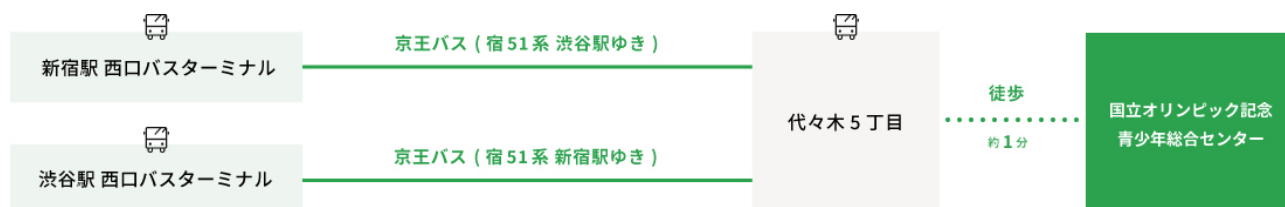
最寄り駅：小田急線参宮橋駅(徒歩7分)、東京メトロ千代田線代々木公園駅(徒歩10分)

1. 会場までの交通経路

(1) 東京駅・羽田空港からのアクセス(電車)



(2) 新宿駅・渋谷駅からのアクセス(バス)



2. 会場への道順

参宮橋駅（東口）からの【歩道橋】を使った経路



参宮橋駅（東口）からの【横断歩道】を使った経路

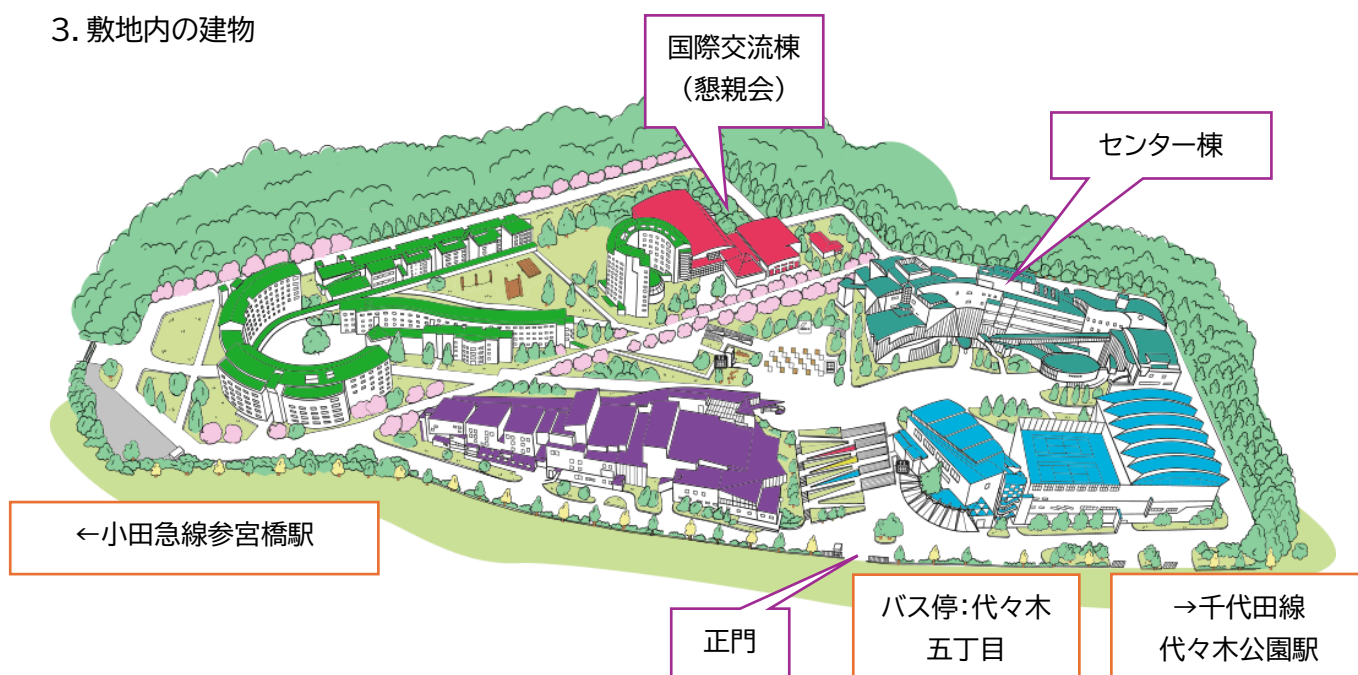


★注意★参宮橋駅(東口)はIC 専用改札です。紙の切符等ご利用の方は西口改札をご利用ください。その場合には、緑色で示した道順に沿ってお進みいただくと、東口改札をご利用の際の道順と合流できます。

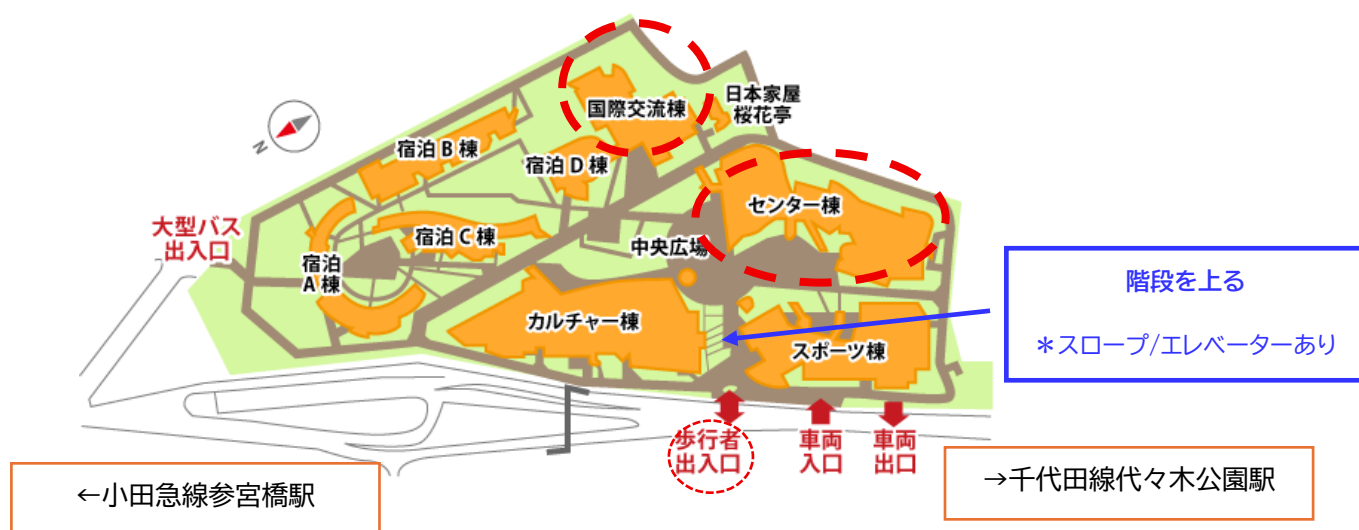
★東口改札をご利用の場合、途中にコンビニ等はありませんのでご注意ください。西口改札からの道順ですと、途中にコンビニやスーパーがございます。

★代々木公園駅をご利用の場合は、出口 4 から地上に出て、右方向にお進みください。一本道で会場に到着しますが、途中にコンビニ等はありませんのでご注意ください。

3. 敷地内の建物



4. 敷地内案内

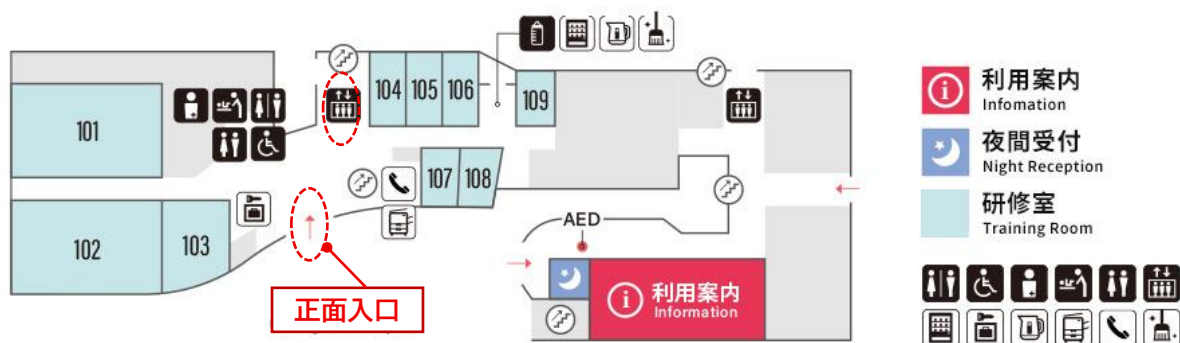


★歩行者出入口より入場後、正面の階段を上り、センター棟へお進みください。
正面入口近くのエレベーターで5階までお越しいただき、503室の本部が参加受付になります。

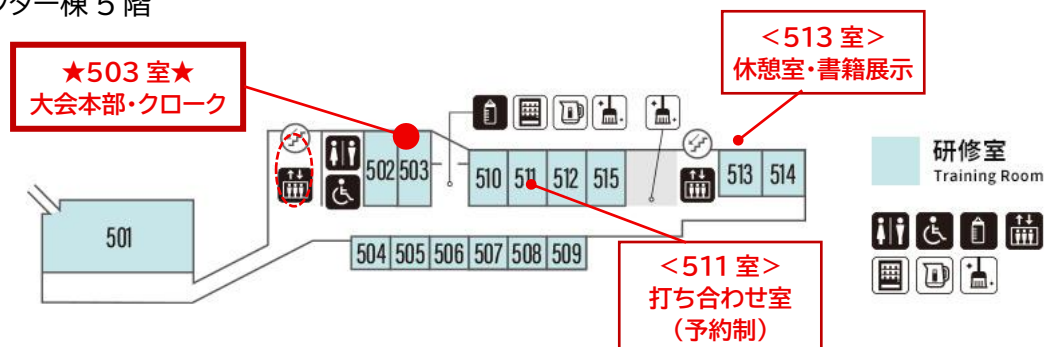
- ◆施設は貸し切りではないため、他の団体も各研修室を利用していることにご留意ください。
- ◆ご歓談などの際は、休憩室(513室)をご利用ください。

5. フロアマップ

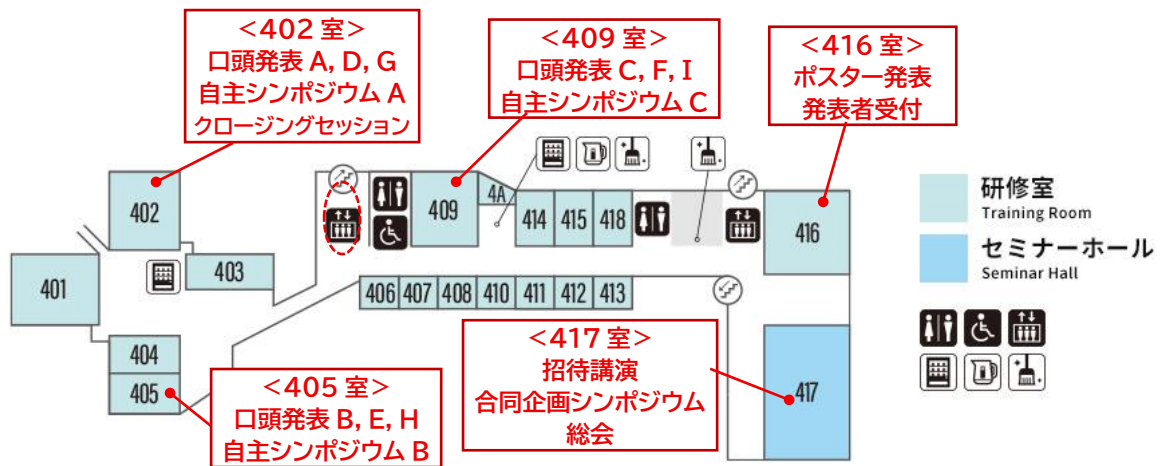
(1) センター棟 1 階



(2) センター棟 5 階



(3) センター棟 4 階



(4) 国際交流棟 1 階(懇親会のみ)



大会参加者へのご案内

1. 会場及び受付

■大会は、国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟4Fと5Fで行います。

■受付時間

1 日目 9:30(最初のプログラム開始時間 10:00) ~ 17:00(総会開始時刻)

2 日目 9:00(最初のプログラム開始時間 9:15) ~ 16:00(クロージングセッション開始35分前)

2. 参加

■予約参加(大会参加費申し込みを行い、参加費を前納した方)

参加者受付(5F 503室:大会本部)でお名前をお申し出ください。名札をお渡しします。

■当日参加

参加者受付(5F 503室:大会本部)で、当日参加であることをお申し出ください。

JPASSからの入金をご案内します。

<当日参加費>

・会員(一般) : 8,000 円

・会員(院生) : 6,000 円

・非会員(一般) : 10,000 円

・非会員(院生) : 8,000 円

・学部生 : 3,000 円

3. クローク

■場所 大会実行本部(5F 503室)

■お預かり時間 1日目 9:00~18:00

2日目 8:30~17:20

■スタッフより「預かり証」をお受け取りください。

■貴重品・傘・上着等は各自で保管をお願いします。

■大会1日目の懇親会に参加される方は、荷物受け取り後に会場に向かってください。

4. 休憩室・書籍展示

■場所 513 室(5F)

■福村出版の展示があります。

■ホットドリンクの用意がありますので休憩室内で利用ください。

■この部屋での食事はご遠慮ください。

5. 打ち合せ室

■場所 511 室(5F)

■ご利用を希望する方は、スタッフまでお申し出ください。

6. 昼食

■各研修室(含む休憩室)内では、食事は不可となります。必要な水分補給は差し支えありません。

■飲食は、センター棟の各階の廊下にあるソファ、国際交流棟1階の交流プラザに設置されているベンチ、ソファ、カルチャー棟2階のイートインスペースで可能です。昼食時にご利用ください。

■会場敷地内にコンビニエンスストアはありません。

7. 懇親会

■日時 大会1日目の12月6日(土) 18:30~20:30

事前予約者のみ参加可能です。必ず予約・参加費の事前納入をお願いします。

■場所 国際交流棟1F レセプションホール

総会終了後、懇親会参加者は国際交流棟までご移動ください。

8. 発表者の資料共有

■発表資料 すべての資料を準備委員会にて共有ドライブに格納します。

当日受付にてお渡しするURL(QRコード)から、各自ダウンロードしてください。

■Wi-Fiの準備 会場の通信設備は、大会当日の他の利用者との兼ね合いによって、利便性が大きく変動します。口頭発表・シンポジウムの各会場にはポケットWi-Fiを設置する予定ですが、接続できる端末数に限りがあります。モバイルWi-Fiをお持ちの方は、ご持参ください。

8. 会期中のお問い合わせ

● 大会本部を503室(5F・クロークと同室)に設置します。

● ご不明の点は、お近くのスタッフにお尋ねください。

● 日本青年心理学会第33回大会準備委員会

準備委員長: 佐藤有耕(筑波大学)

e-mail: jsyap33sy@gmail.com

<発表者用の資料共有に関するご連絡は「発表者の皆様へ」ページに掲載しています>

発表者および自主シンポジウム企画者へのご案内

【研究発表(ポスター発表)】

1. 発表の枠組み

本大会では、第32回大会に引き続き研究発表(ポスター発表)の枠を設けました。日本青年心理学会では、一つ一つの研究発表にじっくり時間をかけて議論を行うことに重きをおいています。研究発表(ポスター発表)でもその文化を大切にしながら、一人ひとりの発表者と大会参加者が議論を深め、交流を創出する場になればと考えています。

2. 発表の要件

研究発表(ポスター発表)は、以下の条件を満たすことで正式な発表として認められます。

1. 発表論文集への原稿掲載。
2. ポスター発表の時間帯(12月7日(日)9:15~10:45)の会場でのポスター掲示。
3. 在席責任時間(45分間)中の質疑応答。

*やむを得ない事情から、上記について困難な条件がある場合は、お早めに大会準備委員会事務局にご相談ください。

3. 発表会場と受付

- ・ 発表および受付は、国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟 416で行われます。
- ・ 発表者は、10分前(9:05)までにはポスターの掲示を終え、発表できる準備を整えてください。前日からの掲示はできません。
- ・ 会場内で発表者用のリボンを配布しますので、参加者から見える位置にご着用ください。
- ・ 掲示用のテープ、発表者コメント用付箋紙なども会場内に準備しています。

4. ポスターの掲示

発表者は発表用のポスターを持参し、指定された位置に掲示してください。ポスターの仕様等は、以下の通りです。

- ・ 本大会では、会場壁面にポスターを掲示していただきます。
- ・ ポスターは【横900mm×縦900~1200mm程度】でご作成ください。A0サイズ(横1189mm×縦841mm)が目安となります(A3で作成される場合は8枚、A4で作成される場合は16枚です)。
- ・ ポスターの最上部に大きく、発表題目、発表者の氏名、所属を表記してください。
- ・ 文字の大きさに指定はありませんが、ポスターから離れた位置(約2m)でも読める大きさを目安にしてください。
- ・ 書式は自由ですが、多様性に配慮し、識別しやすい配色やフォント等をご利用ください。
- ・ 発表について、倫理的配慮事項や開示すべき利害関係(利益相反:COI)がある場合は、ポスター内で詳細を開示してください。
- ・ 希望する方は、ポスターの横に「研究のアピールポイント」「議論をしたいこと」を掲示してください。なお、当

日、付箋やマジック等を用意していますので、そちらに手書きで作成いただくことも可能です。

5. 在席責任時間

ポスター発表の時間帯は 90 分です。在席責任時間の間にご自身のポスター付近に留まり、参加者からの質疑に応じてください。なお在席責任時間は、発表番号が奇数の方は 9:15～10:00 まで、偶数の方は 10:00～10:45 です。ご自身の発表番号は、本論文集掲載の大会スケジュールや、ご自身の発表論文のページでご確認ください。

また活発な交流を促進するため、可能な限り、ポスターセッションのプログラムの時間帯は、在席責任時間以外にも会場内にいらしてください。

6. 資料配布について

- ・ 共有ドライブの設置 : 今年度は、資料配布用の Google ドライブを準備委員会で設定します。フォルダへのアクセス用の URL は、大会参加者全員に配布します。これにより、ポスター会場に来場していない大会参加者も閲覧可能となります。参加者の利便性向上にむけて、ご協力をお願いいたします。この形で資料を電子配布することを希望する発表者は、ポスター発表前日の 12 月 6 日(土)13:00 までに原稿編集担当(jsyap.conference@gmail.com)に資料を送ってください。
- ・ 紙媒体での資料配布 : 会場敷地内にコピー機はありません。印刷した資料も配布される場合には各自でご準備ください。

7. その他

- ・ 研究発表(ポスター発表)終了後、11:00 までに各自でポスターを取り外してください。また、掲示に用いたテープは各自で破棄するようお願いいたします。
- ・ その他ご不明な点がある方は、ポスター発表会場内の発表者受付にてお尋ねください。
- ・ ポスター発表について事前にご相談がある方は、大会準備委員会事務局(jsyap33sy@gmail.com)にご相談ください。

【研究発表(口頭発表)】

1. 発表の枠組み

日本青年心理学会では、一つ一つの研究発表にじっくり時間をかけて議論を行うことに重きをおいています。研究発表(口頭発表)では、従来の枠組みに則り、時間をかけてお一人ずつの発表から学び、セッション参加者全員で議論を深めます。創造的な研究交流の場になりますよう、ご協力をお願いいたします。

2. 発表の要件

研究発表(口頭発表)は、以下の条件を満たすことで正式な発表として認められます。

1. 発表論文集への原稿掲載。
2. 指定の時間(12月6日(土)10:00～／11:00～, 12月7日(日)11:00～／13:00～／14:00～)での研究発表。
3. 座長・参加者との質疑への応答。

3. 発表会場

発表は、国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟 402, 405, 409 で行われます。発表者は、発表時間の 10 分前までに直接会場に会場へ来て、発表開始前に機材の確認等を行ってください。

発表時間と教室は、本論文集掲載の大会スケジュールやご自身の発表論文のページで、あらかじめご確認ください。

4. 発表の進行

口頭発表は 50 分間です。各セッションに座長の先生がいますので、発表と質疑応答の時間配分を調整してください。なお、各会場には発表のためのプロジェクタと接続用の HDMI ケーブルを用意しています。コンピュータの用意はしませんので、ご自身のラップトップパソコンをご用意ください。HDMI および Type-C の変換アダプターも若干の用意はありますが、HDMI とラップトップパソコンの接続に必要なコネクタは各自でご準備ください。

5. 資料配布について

- ・ 共有ドライブの設置 : 今年度は、資料配布用の Google ドライブを準備委員会で設定します。フォルダへのアクセス用の URL は、大会参加者全員に配布します。これにより、ポスター会場に来場していない大会参加者も閲覧可能となります。参加者の利便性向上にむけて、ご協力をお願いいたします。この形での資料を電子配布することを希望する発表者は、口頭発表前日(1日目発表者は12月5日, 2日目発表者は12月6日)の13:00 までに原稿編集担当(jsyap.conference@gmail.com)に資料を送ってください。
- ・ 紙媒体での資料配布 : 会場敷地内にコピー機はありません。印刷した資料も配布される場合には各自でご準備ください。

6. その他

- ・ 口頭発表について事前にご相談がある方は、大会準備委員会事務局(jsyap33sy@gmail.com)にご相談ください。

【自主シンポジウム】

1. 自主シンポジウムの枠組み

日本青年心理学会では、特定のテーマについて会員が企画し、複数の研究者・実践者が話題提供・指定討論を行うことで、参加者と議論を深める場として「自主シンポジウム」を設けています。企画側による知見の提供に留まらず、フロアとの活発な交流を通して、青年心理学研究の知見をさらに深める場になりますよう、時間配分等を含め進行へのご配慮にご協力をお願いします。

2. 発表会場

自主シンポジウムは、国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟 402, 405, 409 で行われます。企画者、話題提供者、指定討論者は、開始時間の 10 分前までに直接会場に会場し、シンポジウム開始前に機材の確認等を行ってください。

シンポジウムの時間と教室は、本論文集掲載の大会スケジュールやご自身の発表論文のページで、あらかじめご確認ください。

3. シンポジウムの進行

自主シンポジウムの時間は 90 分間です。タイムテーブルの設定は企画者にお任せしますが、フロアとの意見交換、質疑応答の時間の確保をお願いします。

なお、各会場には発表のためのプロジェクタと接続用の HDMI ケーブルを用意しています。コンピュータの用意はしませんので、ご自身のラップトップパソコンをご用意ください。HDMI および Type-C の変換アダプターも若干の用意はありますが、HDMI とラップトップパソコンの接続に必要なコネクタは各自でご準備ください。

4. 資料配布について

- ・ 共有ドライブの設置 : 今年度は、資料配布用の Google ドライブを準備委員会で設定します。フォルダへのアクセス用の URL は、大会参加者全員に配布します。これにより、ポスター会場に会場していない大会参加者も閲覧可能となります。参加者の利便性向上にむけて、ご協力をお願いいたします。この形での資料を電子配布することを希望する発表者は、自主シンポジウム前日(12/6)の 13:00 までに原稿編集担当(jsyap.conference@gmail.com)に資料を送ってください。
- ・ 紙媒体での資料配布 : 会場敷地内にコピー機はありません。印刷した資料も配布される場合には各自でご準備ください。

5. その他

- ・ 自主シンポジウムについて事前にご相談がある方は、大会準備委員会事務局(jsyap33sy@gmail.com)にご相談ください。

招待講演

2025年12月6日(土) 13:00～14:30

子どもの「体験格差」の実態, その解消に向けた実践

講演者: 今井悠介(公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン 代表理事)

司 会: 藤井 恭子(関西学院大学)

講演者紹介

1986年生まれ。兵庫県出身。小学生のときに阪神・淡路大震災を経験。学生時代、NPO法人ブレンヒューマニティーで不登校の子どもの支援や体験活動に携わる。公文教育研究会を経て、東日本大震災を契機に2011年チャンス・フォー・チルドレン設立。8000人以上の生活困窮家庭の子どもの学びを支援。2022年より体験格差解消を目指し「子どもの体験奨学金事業」を立ち上げ、全国展開。著書に『体験格差』(講談社現代新書)がある。

東京都生涯学習審議会委員, 日本大学文理学部非常勤講師等を務める。



講演内容

放課後のスポーツや文化芸術活動, 休日のキャンプなどの野外活動——私たちが生きる社会には, こうした様々な「体験」をしたければ自由にできる子どもと, したくてもできない子どもが存在する。背景にあるのは, 多くの場合, 家庭の経済力といった子どもたち自身がどうすることもできない「生まれ」である。そして, 子ども時代の体験機会の剥奪は, 子どもの選択肢を狭め, 将来の機会の格差にもつながっていくのではないかな。

私が代表理事を務める公益社団法人チャンス・フォー・チルドレンでは, 現代の子どもたちの間に存在する「体験格差」の実態を明らかにするため, 2022年に全国の小学生保護者を対象とした大規模調査を実施した。本講演では, 体験格差に焦点を当てた全国初の実態調査データを用いながら, 体験格差の現在地や子ども・家庭を取り巻く状況, 体験の剥奪が子どもに及ぼす影響などについてお話しする。

その上で, 体験格差の問題と向き合い, 「生まれ」に関わらずすべての子どもたちに豊かな体験機会を保障していくために何ができるのか, 拙著『体験格差』の中で挙げている社会にむけた5つの提案について触れる。また, 10年以上にわたり子どもの放課後の学び支援を行ってきた実践者としての立場から, チャンス・フォー・チルドレンが東京都墨田区を中心に展開している子どもの体験保障を目指す取り組み事例についてご紹介する。

青年を対象とした多様な研究法を学ぶ

—青年心理学、キャリア教育の観点から—

Studying Diverse Research Methods on Youth

— Perspectives from Youth and Adolescent Psychology and Career Education —

企画者：日本青年心理学会 研究委員会

話題提供者：千島雄太（筑波大学）

茂垣まどか（帝京大学短期大学）

京免徹雄（筑波大学）

永作稔（武蔵野大学）

指定討論者：山田剛史（関西大学）

企画趣旨

本シンポジウムは、日本青年心理学会と日本キャリア教育学会の合同企画である。日本青年心理学会研究委員会では、短期的なテーマを立て、活動を行ってきている。2025年のテーマは、「研究法」であり、3月に、「青年を知るための心理学的研究法」というワークショップを開催した。ここでは、観察法、インタビュー、伝記分析、実践・介入研究という4つの研究法に関する話題提供が行われ、サイコロトークによって議論を深めていくことができた。

以上の経緯をもとに、日本キャリア教育学会との合同企画として、合同シンポジウムを企画した。青年心理学においては、様々な状況にある青年を幅広く対象とし、青年の心のありようを明らかにすることを試みている。キャリア教育においても、様々な状況にある青年のキャリア形成支援に資する実践・研究活動が心理学以外の立場から活発に行われてきている。多様な青年の心のありようを明らかにしていく際に、日本キャリア教育学会において蓄積されている知見は貴重であり、新たな研究の視点を見つけ出す機会になりうるのではないだろうか。

そこで、本シンポジウムでは、「研究法」をキーワードとして、青年を取り巻く大人がどのように青年に関わっているのかについて4名の先生に話題提供をお願いした。日本青年心理学会側からは、千島雄太先生（筑波大学）、茂垣まどか先生（帝京大学短期大学）にご登壇いただく。日本キ

ャリア教育学会側からは、京免徹雄先生（筑波大学）、永作稔先生（武蔵野大学）にご登壇いただく。その後、指定討論として山田剛史先生（関西大学）にコメントを頂いた上で、フロアも交えながら議論を深めていきたいと考えている。

テクノロジーを介して未来の自己を可視化する

千島雄太（筑波大学）

現代社会は先行きが不透明であり、具体的な未来像を想起するのが困難になりつつある。その社会背景の中で、いかにして個人が未来に希望を持ちながら、未来指向的な行動を取るかというのは、これまで以上に重要な課題となっている。これまでの多くの心理学研究では、未来の想像を本人に任せてきたが、どのような未来が待っているかが不明な社会では、個人の想像力だけに頼っては限界がある。

そこで私は最近、テクノロジーを用いた支援に可能性を見出し、手法の有効性を検証している。例えば、VR空間で未来の自己の3Dアバターと交流する試みや、AIが演じる未来の自己からメッセージを受け取るシステムの構築などを行うなど、新たな手法を模索している。

当日は、情報工学の領域でどのような研究が進められているのかを概観しながら、様々なデモや動画を通して、新たな研究法の広がり示したい。確立されたアプローチがなく、試行錯誤しながら進めている状態であるため、今後の発展可能性について活発な議論が行われることを楽しみにして

いる。

キャリア教育・青年理解における生涯発達の視点の導入：伝記分析の活用

茂垣まどか（帝京大学短期大学）

伝記分析とは、「歴史上の人物の伝記資料に基づいて、人格の生涯発達を研究する方法」（大野ら、2023）である。キャリア教育やそれを支える青年理解・支援において、この分析法がもつ利点の一つは、青年の言動の意味を生涯全体の時間的文脈の中で理解できる点だと考えられる。

たとえば、青年は進路選択の時期に、自身の志望と周囲の期待の不一致、あるいは自分の能力に対する不安など、さまざまな葛藤を経験することがある。その結果、落ち込みや抑うつ的な状況に陥ることもあると考えられる。しかし、こうしたネガティブな経験は、その後の人生における心理的成長の糧となる可能性も十分に考えられる。伝記分析は、このような青年期の心理的状況・経験を、一時的な問題としてでなく、長期的な発達過程の一部として位置付け、理解する視点を提供する。

このような生涯発達の視点に基づく研究知見は、青年理解を深め、より有意義な支援の在り方を検討する上で有効であると考えられる。

キャリア教育の制度と実践の国際比較

京免徹雄（筑波大学）

本報告では教育学、とりわけ海外の教育を対象として扱う比較教育学の領域において、報告者がキャリア教育にどのようにアプローチしてきたか話題提供したい。

まず、「比較」の方法論を確認した上で、報告者が長年行ってきた日仏2国間の併置比較を対象に、方法的特質を示す。青年のキャリア形成支援は各国の教育構造および労働構造と強く関連しており、その影響をふまえながら比較する必要がある。また、報告者の関心はシステムの比較から実践の比較にシフトしてきた。授業分析は、教育学ならではの方法論といえるかもしれない。

次に、報告者が近年新たに試みている多国間比

較と関係比較（教育の対外関係の解明）に注目し、その意義と課題を論じる。特に様々な教育や支援のモデルが国を越えて移転する時代にあつて、関係比較の重要性は増している。他国のモデルが受容され、異なる文化の中で変容（現地化）していくプロセスを解明することは、文脈に合致したキャリア形成支援の発展に寄与する。

最後に、報告者が代表を務める、日本青年心理学会と日本キャリア教育学会の会員が共同で行っている研究に触れ、教育学と心理学の研究者が連携することの可能性を、研究法の視点から考えてみたい。

臨床事例からのボトムアップアプローチ

永作稔（武蔵野大学）

青年期は心身の成長が著しい。また、そのために葛藤や揺れも生じやすく、いかに変化に適応するかということが、今後のキャリア形成という観点からも重要になる。さて、適応という視点から青年期をみると、「あきらめる」という行為の是非について思索を深めさせられる。あきらめる（諦める、明らめる）という言葉には、①断念する、手放すという意味と②物事を明らかにする、見通す、さとりという意味がある。現代では①の意味で使われることが多いが、②の「状況を理解し、見通した上で別の選択をする」という方が、本来の語源に近いことがわかっている。

たとえば、これは不登校生徒が学校に行く代わりに、代替可能な選択肢をとりつつ適応しようとする過程や、摂食障害の若者が歪んだボディイメージに基づくやせ願望を手放すことで快復に向かおうとするプロセス、あるいは進路選択場面で志望先を断念する場合の心情などに適合し、青年期の適応には②の意味のあきらめることの重要性を鑑みることができる。本報告では、カウンセラーとしての臨床経験に基づきつつ、青年期におけるあきらめることの是非について検討したい。

思春期「男子」の性

—ウェブサイトを書き込まれた10代の「悩み」に注目して—

Adolescent Boys' Sexual Concerns: Focusing on the Concerns Expressed by Teenagers on Websites.

企画者：加藤 弘通（北海道大学大学院教育学研究院）

話題提供者：佐藤 奈月（北海道大学大学院教育学院）

土屋 友美賀（北海道大学大学院教育学院）

鴨田 祐汰（北海道大学大学院教育学院）

滝口 達也（北海道大学大学院教育学院）

指定討論者：森山 誉恵（認定NPO法人3keys）

企画趣旨

思春期といえば、性の問題が注目されることが多いが、青年心理学において、思春期の性を扱った研究は多くない。また女子の性については、「被害」「問題」の文脈で注目されることがある一方で、男子の性については、あまり注目されてこなかった（坂爪, 2014）。加えて、歴史研究からは、男子の性の認識が時代とともに変化してきたことが指摘されているが（澁谷, 2013, 2015）、現在の思春期世代において、性の問題がどのような位置を占め、実態をもつのかについても定かではない。そこで本シンポジウムでは「10代のためのサイト Mex」の「気持ちをほきだす」という機能に書き込まれた内容の分析を通して、現代の思春期世代が性について、どのようなイメージや悩みを抱えているのか実態を検討する。また、その結果をもとに、10代の支援の現場から、具体的な支援の視点にもとづきコメントをもらう。

以上を通して、特定のウェブサイトの分析という限られた視点からの報告・問題提起ではあるが、今後、青年心理学において、思春期世代の性について、どのような研究が必要なのかを、フロアとの議論を通して考えることを目的としたい。

「性欲を抑えるには？」：アクセス解析から考える男子の性の悩み

佐藤奈月・土屋友美賀

現代青年は、スマートフォンやGIGA端末を通して、自らの悩みについてインターネットで検索し、情報収集することが可能である。「10代のた

めのサイト Mex」には、10代向けのコラムが多数掲載されており、そうしたコラムへのアクセス状況は、思春期の悩みを捉える上で有用であると考えられる。本発表は、Google社が提供するGoogle Analytics 4を用い、性の悩みに関する Mex のアクセス状況を分析した。2025年4月1日～9月20日のデータを対象とした。まず、Mexへのアクセスに繋がった検索クエリ（Google検索ワード）をカテゴリごとに分類した。その結果、クリック数100件以上の検索クエリ（上位121件）のうち93.1%が、「オナニー・性欲」に関するものであった。具体的には、「制欲を抑える方法（原文ママ）」、「オナニー 頻度」といった検索クエリがみられ、Mexを利用するユーザーの多くが性の悩みについてのキーワード検索からサイトに流入していることが明らかになった。次に、コラムをカテゴリごとに分類した。コラム全体のアクティブユーザー数（指定した期間にサイトまたはアプリを利用したユニークユーザーの数）は、202,803であった。このうち79.2%のユーザーが、性欲・妊娠・生理・避妊・性病等の内容を含む「性の悩み」に関するコラムを閲覧していた。さらに、Mexで公開されている「性の悩み」コラムを、男子向け・女子向け・LGBTQ+向け・共通の4つに分類し、アクセス傾向を確認した。その結果、「性の悩み」のユーザーのうち88.9%は男子向けコラムを閲覧していた。このことから、Mexで性の悩みのコラムを閲覧している者の多くは男子だと想定できる。上記の結果は、Mexのコラムのうち、性欲に関する内容を扱ったものは男子向けであるこ

とに影響を受けていると考えられ、直ちに男子に多い悩みであると断定はできない。しかし、そうした偏りはあるものの、多くの思春期男子が自らの性欲のコントロールに悩んでいることが示唆される結果であるといえる。

青年は男子向けコラムをどのように読んでいるのか？：青年の性欲に関する率直な悩み

鴨田祐汰・滝口達也

思春期の性を理解するためには、青年の実際の語りにも当然目を向ける必要があるが、性と羞恥感情の関連も踏まえると、特に10代前半の青年に性の悩みを直接尋ねることは難しい。そこで本発表では、青年の率直な悩みに耳を傾けることを目的として、Mex内にある「気持ちをはきだす」というウェブページに匿名で寄せられたテキストのうち「性の悩み」コラムを経由して送信された1278件を対象に、性の悩みの探索的分析をおこなった(収集期間：2019年9月～2025年8月)。

まずKHCoderを用いた計量テキスト分析から、①性欲(例：オナニーの方法が分からない)と②妊娠、生理(例：生理が遅れている)の二つが主要なトピックとして見出された。コラムの分類(男子向け・女子向け・LGBTQ+向け・共通)とトピックの関連も分析したが、男子向けコラムでは①性欲が、女子向けコラムでは②妊娠、生理が多く、利用者はコラムに応じた悩みを書く傾向があった。

一方で個別のテキストの内容分析から、特に①性欲において、男子向けコラムの説明に納得しきれずに悩む青年の姿が確認された。具体的には、(コラムでオナニーは問題ないと記載されていたが)「心身への悪影響を感じる」「薄毛になると聞いたが、本当か？」という書き込みや、「男子向けコラムが多いが、女子で性欲が強いのはおかしいですか？」といった書き込みがみられた。以上から、性欲に関しては情報提供の不足も含め、「何が正しく、悩みに対し適切な情報なのか」を青年自身で判断することが難しい状況が示唆された。

なおこのことは、これまでに性が「被害」「問題」に偏って論じられてきたことの限界を示していると考えられる。今後は自慰行為に対しても、

個人的な事象としてのみ捉えるのではなく、「安全な性行為のための練習」(今井, 2022)であることも踏まえて、男女ともに適切な関わり方を議論することが重要である。

声にならない本音はどこにある？：オンライン支援から見える思春期世代の悩み

森山誉恵

Mexは、頼れる大人がいない主に10代の子どものために立ち上げたサイトです。もともとは虐待や貧困といった深刻な悩みを抱える子を支えることを目的として始めました。Mexは多いときで年間200万人が利用し、虐待・貧困に限らず多くの10代が、想像以上にさまざまな悩みを抱えており、それが孤独感や孤立につながっているという現実でした。

中でも「性」というテーマは、現場の居場所や相談活動では直接的に語られることが少なく、支援者にとっては見えにくいものでした。ところがMexを立ち上げたことで、それが子どもたちにとって大きな存在感をもつ悩みであることを実感しました。性欲などの悩みが、自己否定感に強く結びついたり、もともと自己肯定感が低い子どもたちにおいては、性欲などの悩みが自身の生きる価値の否定や、「自分は犯罪者になるのでは」といった悩みにつながるケースすらあることも気づきました。

大人から見ると「かわいい悩み」「取るに足らない悩み」に見えるものが、思春期の子どもにとっては自分の存在を揺るがす大きなテーマとなることがあります。こどもの声を聞くことが政策目標となった今だからこそ、1つひとつはとても脆弱で弱い声を、研究機関が丁寧に分析し、社会に届けていくことを手伝っていただきたいと考えています。その積み重ねが、子どもたちが孤立せず安心して成長できる環境につながっていくと期待しています。

以上の議論、当日のフロアとの交流を通して、本シンポジウムでは、思春期世代の性について、新たな研究の視点を模索したい。

青年心理学と哲学 —青年心理学とその周辺（1）—

Adolescent Psychology and Philosophy: Adolescent Psychology and Related Fields (1)

企画者・司会：小沢 一仁（東京工芸大学）

話題提供者：藤井 恭子（関西学院大学）

話題提供者：橋本 広信（群馬医療福祉大学）

企画趣旨

哲学から分かれた心理学において、離れたはずの哲学に、心理学そして青年心理学が、なぜ再び接近を試みるのか。本シンポジウムでは、ふたりの話題提供から、哲学からヒントを得て、青年心理学をより豊かにしていく可能性を検討する。

第一の論点、どんなときに哲学にヒントを求めるか。心理学という学問の範囲内で、研究が順調に進んでいけば、何も問題はない。しかし、研究を進めていくと、いつかは壁に突き当たる。

ちょっとした躓きから行き詰まりまで、落とし穴、横やり、大小の壁が自らの研究の歩みを妨げる。テーマの選択、用いる概念の選択、対象の選択、方法論の選択、ある心理事象をどう理解したらいいのか、そもそも何のために研究をしているのか、本当に目指したい研究とは何か等々。そのようなときに、心理学が別れたはずの哲学に、研究の停滞への打開のヒントが得られ、さらに進んでいく道が開ける場合がある。

第二の論点、哲学から得られるヒントとは何か。哲学への接近は、心理学者から哲学者への転身ではない。古代ギリシアに端を発する哲学には、様々な学派において、世界、社会、人間、青年への様々な見方の蓄積があり、難解な文章の奥に、自らの見方と何か、そしてその転換が得られうる。

もちろん、心理学研究の中心は、資料、データの収集であり、哲学との違いがここにある。ある問題意識と目的のもとに、量的方法及び質的方法によって、現実の現象をデータとして集め、結果を示し、考察することが研究の中心である。

よって、データを集める方法論に難があると、研究が「机上の空論」となってしまう。と同時に、理論的な追究が不足していると、方法論には問題

がないが、せっかくの研究が「砂上の楼閣」となってしまう。ここに、人間、青年への見方の追究に、哲学のヒントが生きる可能性がある。

最後に、本シンポジウムでは討論時間を全体の半分の45分とし、指定討論者をおかずフロアの参加者との活発な議論を目指す。ベテラン・中堅・若手を問わず研究への情熱の炎が消えることのない方、研究の壁に今まさに直面している方、「推し」の哲学者をもつ方、今まで傍観していた哲学が気になる方々による議論によって、青年心理学の発展につながる場のひとつとしていきたい。

話題提供1：葛藤と対話を生きる青年—哲学的概念と実証研究の交差点

話題提供者 藤井 恭子

青年心理学は実証的研究を基盤としながらも、ときに心理学の構成概念や方法論では捉えきれない現象に直面する。現象はそこに確かに存在するのに、専門用語や尺度に還元しきれず研究のデザインに落とし込めないことがある。こうした壁を打開する糸口となったのが哲学であった。心理学は学問体系において伝統的に、哲学の一部門に位置づけられてきた。図書館の分類でも青年心理学の文献は西洋哲学や倫理学と隣接している。こうした近接性を背景に、ショーペンハウエル（1851）の「ヤマアラシの寓話」は、青年が抱える「近づきたいが近づきすぎたくない」「離れたいが離れすぎたくない」という二重の葛藤を鮮やかに表現していた。藤井（2002）はこの比喻を手がかりに青年の対人関係を実証的に捉え、尺度化と分析によってそのダイナミクスを明らかにした。その成果は、葛藤こそが関係を豊かにし、人間の成熟を促す契機となることを示している。

こうした理解はやがて、バフチン（1981, 1984）の対話論と結びついた。バフチンは、人間を本質的に多声的で未完な存在と論じ、意味を固定されたものではなく、対話的關係のなかで成立するものとしてとらえる視点を提示した。バフチンの哲学的議論は、心理学研究に三つの果実（理論的貢献）をもたらす。第一に、青年期の相互行為を単なる情報交換ではなく、自己と他者が相互に形作り合うプロセスとして捉え直す枠組みを与える。第二に、葛藤を「回避すべき困難」ではなく成熟への契機として積極的に位置づける理論的基盤を提供する。第三に、研究者自身もまた未完の存在として対話に関わるという前提を示し、研究を協働的に生成される過程として位置づける。これらは、哲学的思索と心理学実証との往還を通じて、青年を「未完の問いを生きる存在」として理解する可能性を拓いている。

青年心理学は、哲学と多くの課題を共有している。青年期に特徴的な葛藤、自己と他者の関係、未完性といった主題は哲学的思索においても繰り返し論じられてきた。エリクソン（1950, 1968）はもちろん、ブーバー（1923）、和辻哲郎（1934）らの議論もまた、心理学研究の理論的枠組みを形づくってきた例である。では、哲学から得られるこれらの視座を、心理学の実証研究にどのように接続できるのか。概念的な示唆をどこまで測定可能な枠組みに落とし込めるのか。そして研究者自身の「未完性」をいかに方法論に組み込めるのか。こうした問いを共有し、議論を深めていきたい。

話題提供2 差異の体系化に基づく、同一化不在のアイデンティティ—レヴィ＝ストロースの構造主義の見方を通して

話題提供者 橋本 広信

大学では、特に目指すものがない中で就職活動をする学生と頻繁に出会う。最初から未来の自己の絵を描ける青年は少ないが、多くの場合活動するうちにそれが芽生え、パズルのように、完成（達成）へと向かう〈直線的なアイデンティティ探索の過程〉へと向かっていく。その失敗や停滞は「拡散」と見なされるが、やがて大人社会に認められ

ることで「達成」に至ると理解される。これが、自我を中心とした同一化の達成という発達心理学的になじんだ見方ではないか。しかし中には、「偶然」に任せたような進み方をしながら社会的な適応を十分に果たし、拡散もしていない青年たちがいるとも感じている。構造主義哲学の創設者として名高いレヴィ＝ストロース自身の青年期や成人期は、後者のようなあり方に近い。彼らのようなアイデンティティ形成のあり方をどうとらえたらよいのだろうか。

仮に、レヴィ＝ストロース自身が提唱した構造主義の見方を借りて、次のように考えてみた。本来、多くの青年たちに「達成」すべき未来は具体的に見えているわけではない。将来の展望はあるにしても漠然としたものにすぎず、経験の裏付けもない。そこで青年たちは、何かを賭けて選択をするしかない。（それは自己と社会にある何らかの価値を交換する営みといってもよいかもしれない）。あの仕事とこの仕事（＝あの自分とこの自分）を差異化し、ルーレットのように、自分を賭けていく。そこで選ぶ対象はおそらく無意識的に二項分化的に差異化されながら、未来の自己や社会に関する選択を通して自己のアイデンティティを構造化していく。この賭けが心理的・社会的に成功するかどうかは、賭けを続ける自己の意志と他者の承認もしくは否認の間で生じる偶然による。

目指すべき何かとの同一化の欲望を抱き、自我の強さに基づきそれを達成もしくは実現するのではない。「就職せよ」という命令・意識が差異化に基づく選別を駆動させ、大人社会への自己の反射による構造化が、結果として青年にあるアイデンティティをもたらす。それは、一度動き始めれば、収まりのよい場や形に就くまで止まらない、一種の運動のようなものととらえることもできよう。

哲学と青年心理学の出会いをテーマとする話題提供として、このように、それぞれの思いが形になるまで、道なき道を歩もうとする青年たちが紡ぎ出す「同一化不在のアイデンティティ」というものを提起してみたい。

伝記資料を用いて人格発達にアプローチする伝記分析 —アガサ・クリスティーの事例—

Biographical Analysis: Approaching Personality Development through Biographical Materials

—The Case of Agatha Christie—

企画者：赤木真弓（駒澤大学・非常勤講師）
三好昭子（日本女子体育大学）
話題提供者：茂垣まどか（帝京大学短期大学）
赤木真弓（駒澤大学・非常勤講師）
大野久（立教大学・名誉教授）

企画趣旨

2025年3月に大妻女子大学で開催された本学会研究委員会企画の第21回ワークショップ「青年を知るための心理学的研究法」において、伝記分析について話題提供したが、本シンポジウムではワークショップ形式で、伝記分析を体験していただく機会としたい。

伝記分析とは、歴史上の人物の伝記資料に基づいて、人格の生涯発達やアイデンティティ形成を研究する質的研究方法のことである。『アイデンティティ研究のための伝記分析：生涯発達の質的心理学』（福村出版）では、伝記分析を用いた研究論文の紹介だけでなく、伝記分析についての方法論的検討や分析の手順などを詳細に示している。さらに実際に伝記分析ができるように、大学・大学院の授業で伝記分析を取り入れた事例や方法も紹介されている。しかしながら、「面白そう、やってみたい」と思っても、なかなか実行に移せないという声もある。

そこで本シンポジウム（ワークショップ）では、一人の人物の伝記分析をグループで、いっしょに行ってみたい。実際に伝記資料に触れてもらい、歴史上の人物の青年期の息づかいを感じてもらうことで伝記分析への最初の一步を踏み出していきたい。ケース研究ではケース終結以後のことはわからないが、伝記分析の場合は、生涯を通しての自我発達がわかるため、臨床家養成の基礎訓練として果たす役割も大きいと考えられる。臨床家はもちろん、教員養成、保育士養成、人間発達に関わるすべての方にぜひ体験してほしい。

伝記分析とは・伝記分析のすすめ方

茂垣まどか（帝京大学短期大学）

伝記分析とは、「歴史上の人物の伝記資料に基づいて、人格の生涯発達を研究する方法」（大野ら、2023）である。私からは、伝記分析の一般的なすすめ方、および本ワークショップで行う内容について示したい。

【伝記分析のすすめ方】

- 1. 分析対象の人物を選定：**分析対象とする人物は、すでに死去して一定の年数が経っていること、伝記資料が比較的豊富にあることを条件とし、これを満たしていれば、誰を選んでも差し支えない。
- 2. 資料収集：**分析対象となる資料は、本人の手による日記、書簡、手記など（第1級史料）、自叙伝、回顧録、自伝的小説など（第2級史料）、伝記作家や研究者による伝記（第3級史料）である。これらから複数冊を選定し、分析の材料とする。
- 3. 心理学的年譜の作成：**年譜作成において、伝記に記された年譜（誕生、入学などの具体的事象の表）をもとにしてもよい。心理学的事象を加えた「心理学的年譜」を作成し、人生を概観する。
- 4. 心理学的問いの生成：**3.で生じた疑問（「なぜ、この人物は～だったのだろう」）を心理学的問いとして設定する。
- 5. 問いに対する心理学的仮説の構築：**人格形成理論を軸に、4.の問いに対する仮説（「きっと、～だったからであろう」）を構築する。
- 6. 列挙法による資料提示：**分析対象に対する説明（例：養育環境、自我発達やアイデンティティの様相など）について、根拠となる伝記資料を提示

する。列挙法とは、伝記資料から分析の根拠となる資料を抜き書きし、提示する方法である。

7. 仮説に対する説得的検証：仮説が問いに対して説得的説明となっているかを吟味し、その証拠として伝記資料を提示（列挙法）する。

なお、心理学的問いや仮説は複数生じることもあり、どの仮説が問いに対して説得力を持つかを吟味する。この、ある1人の人物を分析対象とする「個別分析」は、何らかの類似性・共通性と異質性・対照性をもつ人物の比較を行う「比較分析」、複数の人物に共通する生涯発達心理学的な主題（テーマ）について分析する「主題分析」へと発展させていくことができる。

【本ワークショップで行う内容】

本ワークショップでは、「心理学的年譜」および「列挙法による文章一覧」を用いて、「4. 心理学的問いの生成」および「5. 心理学的仮説の構築」の手順の体験をしていただく。

今回の事例：アガサ・クリスティー

赤木真弓（駒澤大学 非常勤講師）

イギリスの作家アガサ・クリスティーを題材に、グループワーク形式で伝記分析を体験していただきたい。

実際の伝記分析では複数の資料から読み取るが、今回は短時間で全員が同じ資料を基にディスカッションを行うため、事前にクリスティーの伝記から抜粋した項目一覧と年譜を配布し、生涯を簡単に紹介する。その後、各自が資料に目を通したうえで3人程度のグループに分かれ、「なぜこの人物は～なのだろう？」という心理学的問いを立て、それに対する仮説を考えるワークに取り組んでもらう。問いは複数設定可能で、仮説もいわゆる「答え」があるわけではないので、グループ内で、最も確からしい仮説を考えてみてほしい。短い時間ではあるが、実際に作業を行うことで伝記分析の面白さを体感できるはずである。

アガサ・クリスティーは、何不自由のない環境で両親や使用人に大切に育てられ、青年期にはさまざまなことに挑戦しながら、理想の男性と結婚し、娘にも恵まれた。また、多くの小説はベスト

セラーとなり、「ミステリーの女王」として確固たる地位を築いた人物である。一見すると順風満帆な人生のように思えるが、伝記をひもとくと、離婚に至る経緯や世間を騒がせた謎の失踪事件を通じて、健全に見えていたアイデンティティの根底に潜む脆弱性が見えてくる。クリスティーの生育史がどのようなものであったのか、それが彼女の人格形成にどのような影響を与えたのか、自由に、楽しみながら議論してもらいたい。

伝記分析へのいくつかの質問に答えて

大野久（立教大学名誉教授）

＊伝記分析の利点は何か：E.H. エリクソンが伝記資料の分析から漸成発達理論を構築したように、伝記資料には人格の生涯発達に関する具体的な情報が豊富である。そのため理論の理解、具体例との関連を把握できる典型例としてこれに勝る資料は少ない。

＊何を検証しようとするのか：伝記分析について、生育史から死亡まで原因と結果が分かっているのに何を検証しようとするのかと質問を受けることがある。確かに実証科学的な考え方と論理構成が異なる。実証的な考え方では、仮説は固定されており独立変数を変化させることによって従属変数にどのような変化があらわれるかによって仮説の真偽を検討する。しかし伝記分析では、独立変数としての生育史と従属変数としての人生の終わり方は固定されている。この関係を説明しようとするものが仮説であり、伝記分析では、考えうる複数の仮説のうちどの仮説の蓋然性が最も高いかを検証しようとする。

＊運命論か自由意志論か：生育史が運命的に決まっていれば運命論にならないかという疑問に関して人はある運命に対して「にもかかわらず」という論理で自由意志を発揮する。しかしその自由意志による決定にもさらなる運命が襲いかかり、人間はその中で葛藤して生きて行く。このプロセスの中に人はアイデンティティの機能を発揮する。

＊人格の生涯発達に興味ある研究者や臨床家にはぜひ伝記分析を体験してほしい。自我発達のみならず、人間を理解するための資料の宝庫である。

青年期の恋愛関係における独占欲求と IPV 加害との関連

高坂康雅¹

(¹和光大学)

The relationship between possessiveness and IPV perpetration in adolescent romantic relationships

Yasumasa KOSAK¹

(¹Wako University)

1. 問題と目的

恋愛関係では、喜びや嬉しさ、恥ずかしさ、悲しみや苦しみ、嫉妬や独占欲求など様々な感情が生じる(吉川, 1997)。金政(2002)では、恋愛イメージのひとつとして、「独占・束縛」があることを示しており、伊福・徳田(2008)が作成した恋愛依存傾向尺度の下位尺度には「独占欲求」が含まれているなど、「相手を自分だけのものにしたい」という独占欲求は、恋愛関係という一対一の関係において強く抱かれる感情・欲求であるといえる。また、この独占欲求は IPV (Intimate Partner Violence ; DV やデート DV) との関連も指摘されている(山本, 2015 など)。

しかし、これまでに恋愛関係における独占欲求についての実証的な研究はほとんど行われていない。その要因のひとつに、尺度が作成されていないことがあげられる。伊福・徳田(2008)が作成した「独占欲求」の項目をみると、「恋人には、いつも私のことだけ考えていて欲しい」のような、恋人に近づいてきてほしいという被接近欲求、「恋人は、私だけのものであってほしい」のような自分が恋人に近づきたい接近欲求、「恋人が自分以外のひとと話したり、出かけたりするのは許せない」のような第三者の接近を拒否する排他欲求、という3つの内容が含まれていると考えられる。

そこで、本研究では、まず恋愛関係における独占欲求を測定するための尺度を作成し、妥当性・信頼性を検証する。ここで作成する独占欲求尺度は、被接近欲求、接近欲求、排他欲求の3概念(下位尺度)で構成されることを仮定して、作成する。次に、作成された独占欲求尺度と IPV 加害との関連を検討することを、第2の目的とする。

2. 方法

調査 1

分析対象者 18 歳から 25 歳で異性と恋愛関係にある者 276 名(男性 140 名, 女性 136 名; 平均年齢 21.8 歳±2.0 歳)を分析対象者とした。

調査内容 (1) 独占欲求尺度項目: 被接近欲求, 接近欲求, 排他欲求の3概念各5項目ずつを独自に作成して使用した。「以下の項目は、あなたの恋人に対する思いにどの程度あてはまりますか」という教示のもと、5件法で回答を求めた。(2) 恋愛様相尺度(高坂・小塩, 2015)のうち「所有性—開放性」5項目を使用した。(3) 恋愛依存傾向尺度(伊福・徳田, 2008)の「精神的支え」「恋人優先」「独占欲求」の3下位尺度25項目を使用した。

調査時期・方法 2025 年 6 月にオンラインにて実施した。

調査 2

分析対象者 調査1の対象者のうち、交際が継続していた者 171 名(男性 77 名, 女性 94 名)を分析対象者とした。

調査内容 (1) 独占欲求尺度項目(調査1と同じ) (2) 改訂版デートバイオレンスハラスメント加害尺度(越智他, 2016 ; 以下 DV 加害尺度) : 7 下位尺度各 5 項目を使用した。

調査時期・方法 2025 年 9 月にオンラインにて実施した。

研究倫理

調査1, 調査2ともに和光大学大学院心理学専攻研究倫理審査委員会の審査を経て行われた(受付番号 20250203)

3. 結果

独占欲求尺度項目の確証的因子分析と信頼性

独占欲求尺度 15 項目について、最尤法による因子分析を行ったところ、初期の固有値 1.0 以上で 2 因子が抽出された。固有値は順に 6.68, 1.43 となったことから、独占欲求という 1 因子が見出されたと解釈された。そこで、3 因子構造を仮定した確証的因子分析を行ったところ、3 因子から対応する項目へのパスが有意なモデルが採択された。適合度は GFI=.881, AGFI=.821, CFI=.914, RMSEA=.092 であった。

α 係数は被接近欲求が.81, 接近欲求が.76, 排他欲求が.79 であった。

独占欲求尺度の妥当性検討

独占欲求尺度と恋愛様相尺度の「開放性」得点との相関は、被接近欲求が-.34, 接近欲求が-.25, 排他欲求が-.27 であった（すべて 0.1%水準）。

また恋愛依存傾向尺度の「独占欲求」得点との相関は、被接近欲求が.65, 接近欲求が.63, 排他欲求が.64 であった（すべて 0.1%水準）。

独占欲求尺度の再検査信頼性

調査 1 と調査 2 の独占欲求尺度 3 解釈得点間の相関は.47～.61 であった（すべて 0.1%水準）。

独占欲求と IPV 加害との関連

調査 1 の独占欲求尺度 3 下位尺度得点、調査 2 の独占欲求 3 下位尺度得点、調査 2 の DV 加害尺度 7 得点との相関を算出したところ、すべてにおいて有意な相関はみられなかった（Table 1）。

4. 考察

独占欲求尺度の作成

本研究では、被接近欲求、接近欲求、排他欲求

の 3 下位尺度からなる独占欲求尺度が作成された。 α 係数及び再検査信頼性は十分な値を示し、恋愛様相尺度の「開放性」得点及び恋愛依存傾向尺度の「独占欲求」得点との相関も高い値を示したことから、信頼性・妥当性を有する尺度が作成されたと考えられる。

独占欲求と IPV 加害との関連

独占欲求尺度（調査 1、調査 2）と DV 加害尺度（調査 2）との関連を検討したところ、有意な関連はみられなかった。そのため、本研究の結果からは、独占欲求の高さによって IPV が促進されるとは言えないことが明らかになった。

独占欲求尺度と恋愛依存傾向尺度の「精神的支え」得点との間にも正の相関がみられたことから、独占欲求自体は恋愛関係の良好な側面にも不適当な側面にも関連しており、そこから IPV 加害に至るには、攻撃性など別の特性との組み合わせが必要になると考えられる。

文献

- 伊福 麻希・徳田 智代（2008）．青年に対する恋愛依存傾向尺度の再構成と信頼性・妥当性の検討 久留米大学心理学研究, 7, 61-68.
- 高坂 康雅・小塩 真司（2015）．恋愛様相尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 発達心理学研究, 26, 225-236.
- 越智 啓太・喜入 暁・佐山 七生・甲斐 恵利奈・長沼 里美（2016）．デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析 (2) 加害に焦点を当てた分析 法政大学文学部紀要, 72, 161-171.

Table 1 独占欲求尺度 3 得点（Time 1/Time 2）と DV 加害尺度 7 得点（Time 2）との関連

		Time 2DV加害尺度						
		身体的暴力	間接的暴力	支配・管理	言語的暴力	性的暴力	経済的暴力	つきまとい
独占欲求	Time 1	被接近欲求	.01	.00	.06	-.02	-.01	-.01
		接近欲求	-.04	-.04	.02	-.06	-.04	-.04
		排他欲求	-.06	-.04	.01	-.06	-.07	-.07
	Time 2	被接近欲求	-.01	.02	.04	-.02	-.02	-.01
		接近欲求	-.07	-.04	-.01	-.07	-.08	-.07
		排他欲求	.00	.02	.07	-.01	-.02	-.01

OP1-A2

青年の片思いはネガティブかポジティブか？ ——心理的アウトカム指標の変化に着目した縦断的検討—— 古谷かすみ¹・高野恵代²・久保南海子²・坂田陽子²

(¹愛知淑徳大学大学院心理医療科学研究科・²愛知淑徳大学心理学部)

Is Having a Crush in Adolescence Negative or Positive?

A Longitudinal Examination of Changes in Psychological Outcomes.

Kasumi FURUYA¹, Yasuyo TAKANO², Namiko KUBO², Yoko SAKATA²

(¹Graduate School of psychology and Medical Sciences, Aichi Shukutoku University,

²Department of Psychology, Aichi Shukutoku University)

1. 問題と目的

片思い (having a crush) とは、一方的な身体的魅力、恋愛感情、性的感情、妄想によって特徴づけられる、他者に対する好意を指す (Bowker et al., 2012)。先行研究 (Bowker et al., 2012; Bowker & Etkin, 2016; Bowker, 2025) では、片思いは抑うつや孤独感といったネガティブな心理的アウトカムと関連することが報告されてきた。しかし、これらの研究にはいくつかの限界がある。第一に、先行研究は横断的アプローチにとどまっており、片思いの前後、あるいは片思いをしている最中で、心理的アウトカムがどのように変化するかは明らかにされていない。第二に、検討対象である心理的アウトカムの指標が、抑うつや孤独感などネガティブな側面に偏っており、ポジティブな側面が十分に検討されていない。

本研究では、青年や若年成人を対象とした縦断データを用いて、片思い状況と心理的アウトカム指標の関連を検討することを目的とした。具体的には、心理的アウトカムのネガティブな側面として抑うつと孤独感、ポジティブな側面として自尊感情と精神的健康を扱い、「片思い状況になること」と「片思いを継続すること」のどちらが心理的アウトカムの変化と関連するのかを検討した。

2. 方法

調査対象者と調査時期

調査会社が所有する 15 歳から 29 歳までのモニターを対象に、2024 年 5 月 (T1)、約 6 か月後 (T2)、

約 12 か月後 (T3) の計 3 回、Web アンケート調査を実施した。T3 まで欠損なく回答した 679 名のうち、T1 から T2 の間に片思いへ移行した 71 名、T1 から T2 の間に片思いを継続していた 52 名、T2 から T3 の間に片思いへ移行していた 25 名、T2 から T3 の間に片思いを継続していた 14 名のデータを分析対象とした。なお、複数の区間に該当する重複した回答者が 9 名含まれているため、分析対象者は計 153 名 (男性 51 名、女性 102 名、平均年齢 20.84 歳、 $SD = 3.86$) であった。本研究は、愛知淑徳大学心理学部倫理委員会の承認を得て実施された (承認番号 2024-05)。

質問項目

①性別、年齢。②現在の恋愛状況 (「結婚している」「交際している人がいる」「好きな人・気になる人がいるが交際していない」「好きな人はいないが、交際相手は欲しい」「好きな人がおらず、交際に興味がない」の 5 択)。③自尊感情尺度 (桜井, 2000)。④心理的ストレス反応尺度 (鈴木他, 1997) のうち「抑うつ・不安」6 項目。⑤改訂 UCLA 孤独感尺度 (諸井, 1991) 20 項目。⑥日本語版 Warwick-Edinburgh Mental Well-being Scale (WEMWBS; 菅沼他, 2016) 14 項目。なお、②で「好きな人・気になる人がいるが交際していない」を選択した回答者を片思い群とした。

3. 結果

連続した 2 時点をプレ/ポストの 1 区間とみなし、ポストで片思い群へ移行した 96 名を移行群、

Table 1 心理的アウトカム指標についての線形混合モデルの結果

	自尊感情			抑うつ・不安			孤独感			WEMWBS		
	推定値	標準誤差	p 値	推定値	標準誤差	p 値	推定値	標準誤差	p 値	推定値	標準誤差	p 値
群(継続群vs新規群)	-0.084	0.057	.140	0.000	0.092	.996	0.024	0.054	.660	-0.034	0.081	.674
時期(プレvsポスト)	-0.066	0.051	.196	-0.101	0.086	.241	0.068	0.047	.148	0.073	0.075	.327
群×時期	0.238	0.075	.002 **	-0.109	0.126	.387	-0.134	0.068	.052 †	0.004	0.110	.972

注) 共変量として、性別(男性vs女性)、年齢、区間(T1→T2 vs T2→T3)、プレ時点のスコアを投入した。

** $p < .01$, † $p < .10$

プレ/ポストともに片思いを継続した 66 名を継続群とした。心理的アウトカム指標を従属変数とし、群(移行群/継続群)と時点(プレ/ポスト)の交互作用を検討するため、個人内の繰り返し測定を考慮した線形混合モデルを実施した。結果では、自尊感情と孤独感において群×時点の交互作用が有意または有意傾向であった(Table 1)。下位検定の結果、自尊感情では、継続群においてプレよりもポストの方が得点が高かった($p = .002$)。孤独感では、ポストにおいて継続群よりも移行群の方が得点が高かった($p = .041$)。抑うつと WEMWBS では交互作用は有意でなかった。

4. 考察

本研究の目的は、片思いがネガティブおよびポジティブな側面の心理的アウトカムと関連するのについて縦断データを用いて検討することであった。同時に、「片思い状況になること」と「片思いを継続すること」のどちらが心理的アウトカムとより関連するのについても検討した。

心理的アウトカムのネガティブな側面である孤独感は「片思い状況になること」と関連しており、プレ時点で片思いをしておらずポスト時点で新たに片思い状況に移行した者は、移行前よりも孤独感が上昇していた。また、ポジティブな側面である自尊感情は、「片思いを継続すること」と関連しており、片思いを少なくとも 6 か月継続した者は時間が経つにつれて自尊感情が上昇していた。

本研究の結果から、片思いは一様にネガティブな経験ではなく、ポジティブな側面も持つことが示された。すなわち、片思いを継続することは自尊感情を高め、新たに片思いをすることは一時的に孤独感を高めるという、心理的アウトカムに対して両義的な効果を持つことが明らかになった。これは、片思いの心理的意義を理解する上で重要

であり、縦断的に検討した点で先行研究を補完するものである。

文献

- Bowker, J. C. (2025). Psychological correlates of crush experiences during early adolescence: Features of the crush experience matter. *International Journal of Behavioral Development*, 1-6.
- Bowker, J. C., & Etkin, R. G. (2016). Evaluating the psychological concomitants of other-sex crush experiences during early adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, 45, 846–857.
- Bowker, J. C., Spencer, S. V., Thomas, K. K., & Gyoerkoe, E. A. (2012). Having and being an other-sex crush during early adolescence. *Journal of Experimental Child Psychology*, 111, 629–643.
- 諸井克英 (1991). 改訂 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討 静岡大学人文論集, 42, 23-51.
- 桜井茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.
- 菅沼慎一郎・平野真理・中野美奈・下山晴彦 (2016). 日本語版 Warwick-Edinburgh Mental Well-being Scale (WEMWBS) の作成と信頼性・妥当性の検討: hedonic/eudaimonic を包括した状態指標 臨床心理学, 16, 471-475.
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野雄二 (1997). 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, 4, 22-29.

付記

本研究は愛知淑徳大学の研究助成を受けて実施された(研究課題番号 24KD04)。

OP1-B1

青年の恥体験と心理的苦痛の関連 —傷つきと恥文脈下のセルフ・コンパッションに着目して—

鴨田 祐汰

(北海道大学大学院教育学院)

The Relationship Between "Haji" Experiences and Psychological Distress in Adolescence:

Focusing on Hurt Feelings and Self-Compassion in "Haji" Contexts

Yuta KAMODA

(Graduate School of Education, Hokkaido University)

1. 問題と目的

国内の羞恥感情研究において「恥ずかしさ」は、shame(自己全体への否定的評価)ではなく embarrassment(失敗や社会的注目に伴う当惑)に近い、一時的で軽微な感情とされてきた(菅原, 1998)。しかし一方で青年は、「恥ずかしくてつらく、何度も思い出す」(鴨田, 2024)といったように、「恥ずかしさ」を重大な感情体験と意味づけて語ることがしばしばある。よって以上の青年が語る問題に対しては、①恥ずかしい体験の中にある重大さを青年の認識に即して特定した上で、②効果的な対処を検討する必要がある。

これらの課題に対してまず本研究では、傷つき(hurt feelings)に着目し、過去の恥ずかしい体験に対する感情と心理的苦痛との関連を検討する。傷つきとは「心が傷つく」などの項目で測定される他者評価関連感情であり、「愛されるべき存在としての自己像や、他者の信頼性に関する信念が損なわれた時に発生する感情」(Feeney, 2005)、また社会的痛みの一形態(MacDonald & Leary, 2005)とされている。よって傷つきは、自己や他者への評価に関わる恥ずかしい体験においても十分に喚起される上、「心が傷つく」という青年も想像しやすい素朴な感覚を捉えられると考えられる。

さらに本研究では、恥ずかしい体験への対処資源としてセルフ・コンパッション(Self-Compassion: 以下 SC)に着目する。SCとは、失敗や苦痛に対し「自己へのやさしさ」「共通の人間性」「マインドフルネス」で応じる対処資源であり、先行研究において SC が恥(shame)による自己否定を

抑え、再評価を促すことが示されている(Gilbert & Procter, 2006)。ただし従来の SC は失敗や苦痛への全般的な態度を尋ねるものであるため、恥(shame)と「恥ずかしさ」の違いも踏まえると、恥ずかしい体験に特有の態度を十分に捉えられていない可能性がある。そこで本研究では、「恥ずかしさ」への態度に特化した恥文脈セルフ・コンパッション(以下、SC-H)尺度を作成し、それが恥ずかしい体験に対する感情と心理的苦痛との関連を緩衝するのかを検討する。

2. 方法

調査協力者: 計 4 校に所属する大学生 256 名(男性 87 名、女性 161 名、不明 8 名; 平均年齢 19.20 歳, $SD=1.25$)。

調査手続き: 調査協力は任意であり、回答はいつでも中断可能であることを周知した上で、「これまでの人生で最も『恥ずかしい』と感じた体験」を想起してもらい、項目①の回答を求めた。続いて、「思い出した体験に限らない日常的な感覚や考え」について、項目②、③の回答を求めた。

調査項目: ①当時の感情について、小田部他(2009)から傷つき 3 項目を、薊(2010)から「罪悪感」「屈辱感」「羞恥感」の因子負荷量が高いそれぞれ 3 項目を採用した計 12 項目を 7 件法で尋ねた。②SC-H について、「あなたは恥ずかしい気持ちになった時、自分自身に対してどのように接していますか」という教示のもと、松本ら(2024)を参考に作成した計 17 項目(例: 恥ずかしくてつらいとき、自分に対してやさしく接し、支えるよ

うにする)を5件法で尋ねた。③直近30日間の心理的苦痛(K6日本語版:古川他,2008)について,6項目を5件法で尋ねた。

3. 結果

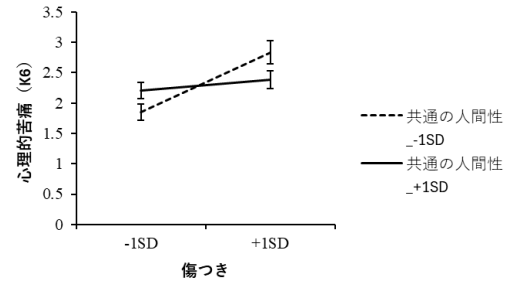
因子分析の結果:当時の感情については,「傷つき」「罪悪感」「屈辱感」「羞恥感」の4因子相関モデルの確認的因子分析(最尤法, $N=223$)の結果,十分な適合度が示された($CFI=.958$, $RMSEA=.084$)。SC-Hについては,SCの先行研究を基に双因子モデル,二次因子モデル(ポジティブ/ネガティブ),6因子相関モデルの確認的因子分析(最尤法, $N=223$)を実施したが,6因子相関モデルのみが許容できる適合度を示した($CFI=.923$, $RMSEA=.073$)。よって本研究では6因子構造を採用し,下位尺度ごとの分析をおこなった。

重回帰分析の結果:性別,当時の感情,ポジティブなSC-H,傷つきとポジティブなSC-Hの交互作用を独立変数,心理的苦痛を従属変数とする重回帰分析($N=202$)をおこなった(Table 1)。その結果,当時の感情のうち傷つきのみが心理的苦痛に関連することが明らかになった($\beta=.284, p=.004$)。また,傷つきと共通の人間性の交互作用が有意だったため($\beta=-.208, p=.002$),単純傾斜検定をおこなった(Figure 1)。その結果,共通の人間性が低い(-1SD)場合は傷つきの単純傾斜が有意だったが($B=.237, p<.001$),共通の人間性が高い(+1SD)場合は有意ではなく($B=.043, p=.403$),共通の人間性が傷つきと心理的苦痛の関連を緩衝することが明らかになった。

Table 1. 心理的苦痛を従属変数とする重回帰分析の結果

$N=202$	β	95%CI
性別(女=0, 男=1)	.068	[-.059, .196]
傷つき	.284 **	[.093, .475]
罪悪感	.139	[-.027, .305]
屈辱感	-.033	[-.220, .154]
羞恥感	.048	[-.111, .208]
自己へのやさしさ	-.025	[-.182, .132]
共通の人間性	-.022	[-.162, .117]
マインドフルネス	-.112	[-.257, .033]
傷つき×自己へのやさしさ	.062	[-.096, .221]
傷つき×共通の人間性	-.208 **	[-.342, -.074]
傷つき×マインドフルネス	.114	[-.037, .264]
R^2	.215 **	

** $p<.01$, * $p<.05$



注) エラーバーは標準誤差を示す

Figure 1. 共通の人間性(±1SD)別の傷つきとK6の関連

4. 考察

まず本研究から,過去の恥ずかしい体験に対する感情と心理的苦痛の関連が明らかになった。羞恥感(「恥ずかしさ」)については心理的苦痛との独自の関連がみられなかったが,この結果は先行研究において「恥ずかしさ」が *embarrassment* に近い感情とされてきたことに整合的だった。一方で傷つきについては心理的苦痛との関連がみられたため,実際の語りにあった通り青年の恥ずかしい体験は,必ずしも一時的で軽微なものにとどまらない可能性もまた示唆された。

さらに傷つきと心理的苦痛との関連は,SC-Hの下位尺度のうち,共通の人間性(他人も恥ずかしく思うことがあると考える態度)によって緩衝されることが示された。因子分析も含めてこの結果は,特にSC-Hにおいては,下位尺度ごとに「恥ずかしさ」に対する機能が異なる可能性を示唆するものである。また,項目水準でみると共通の人間性は,自己へのやさしさやマインドフルネスと比べて社会学習的な側面がより大きいと考えられる。よって今後は,青年の「恥ずかしさ」への対処資源について,個人の能力だけではなく対人場面でのやりとりも含めて検討する必要がある。

文献

- Gilbert, P., & Procter, S. (2006). Compassionate Mind Training for People with High Shame and Self-Criticism: Overview and Pilot Study of a Group Therapy Approach. *Clinical Psychology & Psychotherapy*, 13(6), 353–379.
- 菅原 健介 (1998). 人はなぜ恥ずかしがるのか——羞恥と自己イメージの社会心理学——. サイエンス社

OP1-B2

Motivated Strategies for Learning Questionnaire (MSLQ) の 日本における大学生の回答傾向

上淵寿¹・山本琢俣²

(¹早稲田大学教育・総合科学学術院・²文教大学人間科学部)

Response Tendencies of Japanese University Students on the Motivated Strategies
for Learning Questionnaire (MSLQ)

Hisashi UEBUCHI¹, Takuma YAMAMOTO²

(¹Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University

²Faculty of Human Sciences, Bunkyo University)

1. 問題と目的

大学生の自己調整学習を測定する質問紙に、Motivated Strategies for Learning Questionnaire (MSLQ: Pintrich et al., 1991, 1993) がある。MSLQ は、国際的に最も用いられる自己報告式質問紙の 1 つであり (Credé & Phillips, 2011), 学習における動機づけ尺度 31 項目と学習方略尺度 50 項目の全 81 項目で構成される。

MSLQ は自己調整学習を総合的に測定できる質問紙である。世界中で MSLQ を用いた自己調整学習の研究が進んでいる。日本で MSLQ を用いた自己調整学習研究ができれば、自己調整学習の包括的な検討が可能となる。日本でも MSLQ を翻訳した研究がある (e.g., 宮部他, 2016)。だが MSLQ の特徴である包括的な自己調整学習の把握には至っていない。ゆえに日本での自己調整学習研究を包括的に進めるため、原版の MSLQ に準拠した形で日本での活用が必要である。

さて、MSLQ はアメリカの大学生を対象に開発されたもので、国際間で同様の因子構造が見られるかは検討の余地がある (Lee et al., 2010; 宮部他, 2016)。現状では、この問題が何に起因するのか不明である。

ゆえに、原版の MSLQ に準拠した日本での研究の第一歩として、原版 MSLQ の日本における得点傾向を把握する必要がある。そこで、本研究では、Pintrich et al. (1991, 1993) の MSLQ を邦訳して項目分析および因子分析を行い、原版と同様の因子構造を仮定した場合の得点傾向を探索的に検討する。

2. 方法

調査対象

関東地方の総合大学に在籍する学生 216 名 (女性 118 名, 男性 96 名, 無回答 2 名)。対象者の年齢は 18 歳から 23 歳で、平均年齢は 19.59 歳 (SD = 1.27) であった。

調査内容

MSLQ 著作権者の許可を得て MSLQ (Pintrich et al., 1991, 1993) の翻訳を行った。翻訳サービス会社に、原文から邦文への順翻訳と逆翻訳、および原文と逆翻訳を比較したレビューの作成依頼をした。その後、研究者らで内容を協議し、学術的心理尺度として矛盾のないよう項目表現を修正した。

その他 不誠実回答抽出のために Directed Questions Scale (DQS) 3 項目を調査内容に加えた。

調査手続き

2024 年 11 月—12 月に大学の授業時間内で調査を行った。Google Form を用いて調査用ページを作成し、調査対象者に当該ページへアクセスする URL を提示した。項目の提示順序はランダム化した。回答は、属性回答を除き 7 件法で求めた。本研究は、早稲田大学の人を対象とする研究に関する倫理審査を受け内容の承認を得て実施された (承認番号: 2024-191)。

3. 結果

DQS の 3 項目いずれかに誤答した者の回答を除外した。また、学習方略尺度に回答し、かつ動機づけ尺度に回答しない調査協力者が 30 名存在した。結果、動機づけ尺度では 154 名分 (女性 103 名, 男性 50 名, 無回答 1 名), 学習方略尺度では 184 名分 (女性 110 名, 男性 72 名, 無回答 2 名) の有効回答を得た。以下、本研究の分析には IBM

SPSS Statistics 30 と Mplus version 8.7 を使用した。

項目分析

Pintrich et al. (1991, 1993) の MSLQ の因子構造を用いて、項目の識別力を確認するため IT 相関と IR 相関の値を算出した。IT 相関および IR 相関の基準（絶対値が.2 以上: 熊谷・荘島, 2015）に該当しない項目が 7 つあった（全て学習方略尺度）。

因子構造の検証

本研究のデータに MSLQ の因子構造がどの程度あてはまるかを確認するため、Pintrich et al. (1991, 1993) と同様に、動機づけ尺度は 6 因子、学習方略尺度は 9 因子の因子構造モデルを用いて確認的因子分析（最尤法）を行った。その結果、動機づけ尺度では CFI=.721, RMSEA=.099, SRMR=.104, 学習方略尺度では CFI=.619, RMSEA=.075, SRMR=.100 の値が得られた。動機づけ尺度の各項目への因子負荷量は 3 つの項目で低かったが（.30, .36, .39）、それ以外は比較的高い値を示した（.45～.86）。学習方略尺度の項目への因子負荷量は、IT 相関および IR 相関の基準を満たさない 7 項目で絶対値が.09～.32 だった。

回答傾向の分析

Pintrich et al. (1991, 1993) の MSLQ の因子構造を用いて下位尺度得点およびその平均と SD を計算した。結果、動機づけ尺度では、「課題価値」と「学習の統制信念」の平均値が比較的高かった（5.60, 5.03）。学習方略尺度では、どの下位尺度でも平均は 4 に近い値が得られた（各 4.13～4.63）。

4. 考察

分析の結果、MSLQ の動機づけ尺度では、概ね十分な項目の識別力が確認された。一方、学習方略尺度では、複数の項目で識別力の低さが明らかとなった。大学生における学習への動機づけよりも学習方法において、日米間に差異があるようだ。

翻訳した MSLQ の項目を用いて確認的因子分析を行った結果でも、項目分析で低い識別力を示した 7 つの項目への因子負荷量は低かった。

また、本研究の確認的因子分析の適合度は動機づけ尺度と学習方略尺度の両方で十分な値とはいえない。しかし、推定値の多いモデルを適用していることや項目数の少ない因子を含むために、低

い適合度自体は MSLQ の信頼性を損なわない。

さらに Pintrich (1991, 1993) や諸外国で利用されている MSLQ との共通性を確保するのは、国際間比較や妥当性検証で非常に有用である。

したがって、日本での MSLQ 研究では、適合度のみに拘って因子構造を安易に変えるのではなく、MSLQ の理論的基礎と矛盾しない範囲でモデルを検討する必要があるだろう。

回答傾向では、次の知見が得られた。まず、動機づけ尺度では、日本の大学生が内容理解を重要視する傾向や学習成果への内的帰属をする傾向があることがうかがえた。一方、学習方略尺度では特徴的な傾向はみられなかった。

今後の課題として、本研究の対象が同一地域の大学生のみで構成されていることや、調査時期を検討する必要があることなどが挙げられる。

文献

- Credé, M., & Phillips, L. A. (2011). A meta-analytic review of the Motivated Strategies for Learning Questionnaire. *Learning and Individual Differences, 21*, 337-346.
- 熊谷龍一・荘島宏二郎（2015）．教育心理学のための統計学 誠信書房
- Lee, J. C.-K., Zhang, Z., & Yin, H. (2010). Using multidimensional Rasch analysis to validate the Chinese version of the motivated strategies for learning questionnaire (MSLQ-CV). *European Journal of Psychology of Education, 25*, 141-155.
- 宮部明美・富樫千秋・佐久間夕美子・佐藤千史（2016）．日本語版 MSLQ (Motivation Scales) の信頼性と妥当性の検討 日本健康医学会雑誌, 25, 276-286
- Pintrich, P. R., Smith, D. A. F., Garcia, T., & McKeachie, W. J. (1991). *A manual for the use of the Motivated Strategies for Learning Questionnaire (MSLQ)*.
- Pintrich, P. R., Smith, D. A., Garcia, T., & McKeachie, W. J. (1993). Reliability and predictive validity of the motivated strategies for learning questionnaire (MSLQ). *Educational and Psychological Measurement, 53*, 801-813.

OP1-C1

保護者と子どもの話し合いを促進する情報モラル教育の実践 小中学生への事前・事後アンケートの分析

佐藤奈月¹

(1 北海道大学大学院教育学院)

The Practice of Information Ethics Education to Foster Parent-Child Communication: An Analysis of Pre-Post
Surveys of Elementary and Junior High School Students

Natsuki SATO¹

(1 Graduate School of Education, Hokkaido University)

1. 問題と目的

子どものネットトラブルを防ぐためには、家庭でのルールづくりが重要とされる。子どもと保護者の両方を対象とした指導や教材はまだ少ないが、ワークショップ型の学習プログラムが対話を促すことが示されている(南里, 2023)。しかし、より多くの学校で実践可能な講話形式の介入が、意識や行動の変容にどの程度結びつくのかは明らかではない。本研究の目的は、子どもと保護者双方の気持ちを理解する機会を提供する情報モラル講話が、子どもの意識や行動の変容に与える影響を検討することである。

2. 方法

調査協力者 2025 年 7 月に、小学校 1 校の 5・6 年生 49 名およびその保護者 11 名、中学校 1 校の 1・2 年生 164 名に事前調査(以下, T1)を実施した。2025 年 7 月 14 日に、小学 5・6 年生、中学 1・2 年生にそれぞれ情報モラル講話を実施した。小学校は保護者が 1 名参加した。夏休み明けの 2025 年 9 月に、同校の小学 5・6 年生 49 名およびその保護者 12 名、中学校 1 校の 1・2 年生 142 名に事後調査(以下, T2)を実施した。T1・T2 はいずれも Google フォームを用い、各自の GIGA 端末からホームルーム時間に回答した。本研究では、T1・T2 のいずれも回答した小・中学生 167 名(小学生 45 名、中学生 122 名; 男子 89 名、女子 71 名、その他 7 名)の回答を分析した。

講話の内容 小学校は 45 分、中学校は 50 分の講話を行った。講話は、T1 の結果を元に、(1)小中学生が遭いやすいトラブル、(2)フィルタリングの利用率と重要性、(3)T1 で回答された家庭のルールの

紹介、(4)子どもの気持ち・保護者の気持ちの記述の紹介、(5)家庭でのルールの話し合いの促進という構成で行った。

調査項目

- (1) フェイスシート(学年・性別)
- (2) 家庭のルールの有無、種類(5 項目)
- (3) フィルタリング利用の有無
- (4) トラブルに対する意識(満下他, 2022, 4 項目)
- (5) 保護者の気持ち理解(著者および心理系大学教員、公認心理師の 3 名で協議して作成、5 項目)(e.g., 家族があなたにどのようにネットやゲームを使ってほしいと思っているかが分かる)
- (6) (T1・小学校のみ) ネットやゲームについて家族に分かってほしいと思うこと(自由記述)

分析方法 HAD(ver18.008)(清水, 2016)を用いた。欠損値はリストワイズ削除を行った。

倫理的配慮

本研究は、北海道大学大学院教育学研究院における研究倫理委員会の承認を得て実施された。

3. 結果

(1) 家族に分かってほしいと思うこと

自由記述は、①ゲーム(例: ゲームの中にリアルタイムのものがあって、途中で辞めると仲間の迷惑になってしまうから、急にはやめられないという事を分かってほしい)、②時間(例: もう少しだけ、ケータイを使う時間と日にちを増やしてもらえると、勉強と動画に使えるので助かる)、③気持ち(例: もう少し子供の気持ちや意見を聞いてほしい)についての記述がみられた。

(2) 家庭のルール・フィルタリング利用の変化

「家庭にルールがある」と回答した者の割合は、T1では小学生77.8%、中学生67.8%、T2では小学生75.6%、中学生71.1%であった。主なルールの内容は、「ネットやゲームで知り合った人と直接会わない」(54.8%)、「ネットやゲームを決められた時間以上使わない」(53.3%)、「ネットやゲームで課金をしない」(52.7%)であった。「最も多く利用する機器でフィルタリングを利用している」と回答した者の割合は、T1では小学生51.1%、中学生63.1%、T2では小学生53.3%、中学生60.7%であった。T2において、「講話後に家庭でネットやゲームのルールについて話し合った」と回答した者は、58名(34.7%)であった。また、「講話後に家庭のルールを新しく作ったり、ルールを変えたりした」(以下、ルール更新)と回答した者は、19名(11.4%)であった。Table1に、19名の自由記述および変更したルールを示す。

(3)トラブルに対する意識の変化

トラブルに対する意識4項目の平均点を算出し、意識得点とした。T1とT2の意識得点について、対応のあるt検定を行った。その結果、有意差はみられなかった($t(158)=0.720, n.s.$)。

(4)保護者の気持ち理解の変化

保護者の気持ち理解5項目($\alpha=.850/.894$)の平均点を算出し、保護者の気持ち理解(以下、気持ち理解)得点としたT1とT2の気持ち理解得点に

ついて、対応のあるt検定を行った。その結果、有意差はみられなかった($t(117)=1.367, n.s.$)。しかし、個人の回答の変化に着目すると、T1からT2にかけて気持ち理解得点が上昇した者が29名(欠損値49名を除く有効確率24.6%)いた。

4. 考察

本研究の目的であった意識と行動の変容について、まず行動については、講話後に34.7%がルールについて話し合い、11.4%がルールを更新するという変容がみられた。この背景には、子ども自身も一方的なルール設定ではなく、状況に応じたルール設定についての対話を望んでいる実態があると考えられる。一方、意識については、夏休み後のトラブルに対する意識や保護者の気持ち理解に有意な向上はみられず、1回の講話が意識変容に与える効果は限定的だと考えられる。今後の課題として、保護者が講話に参加し、その場で双方向的な対話を行うことによる意識や行動の変容を検討する必要があると考えられる。

文献

- 満下健太・安永太地・酒井郷平・塩田真吾(2022). 情報モラルの知識がトラブル経験頻度に及ぼす影響 日本教育工学会論文誌, 46(Suppl.), 61-64.
- 南里和哉(2023). 中学校における情報モラル教育の学習プログラムの開発と実践: 「対話のある学び」と「家庭との連携」に着目して 佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要, 7, 351-371.
- 清水裕士(2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.

Table1 ルール更新した者の自由記述およびルールの変化

no	学校種	気持ち理解	ルールの内容(自由記述)	フィルタリング	ルールの種類				
					時間	悪口	やりとり	直接会う	課金
1	小学生	非上昇	夏休み用のルールを作った		なし	継続	なし	なし	継続
2	小学生	非上昇	ゲームを使える時間を変えた	新規	継続	なし	新規	なし	継続
3	小学生	上昇	家にスマホやタブレットがありません		なし				新規
4	小学生	非上昇	ゲームや動画、合わせて1時間	継続	継続				
5	小学生	非上昇	(未回答)	継続	新規	継続	継続	継続	継続
6	小学生		決めた時間までに、ゲームを終わらせる。		継続	継続	継続	継続	継続
7	小学生	上昇	制限をつけられた	継続	消失	消失	なし	なし	なし
8	小学生	非上昇	そんなに変わらない		継続	新規			
9	小学生	非上昇	おこらない		消失	新規	新規	なし	新規
10	小学生		時間制限(9月中旬頃)	なし	継続	継続	継続	継続	継続
11	中学生	非上昇	ゲームは、一日一時間のみ。	継続	継続	継続	継続	継続	継続
12	中学生	非上昇	スマホなどの使える時間を変えた	新規	継続	消失		継続	消失
13	中学生	非上昇	時間を守る	新規			新規	継続	継続
14	中学生		やらなきゃいけないことをやってからSNSなどを使う	継続	新規		なし		
15	中学生	上昇	夜、遅くやりすぎないこと	なし		新規	継続	継続	
16	中学生	非上昇	頑張る	なし	継続			継続	なし
17	中学生		仲良くしています。	継続	継続	なし		継続	なし
18	中学生	非上昇	何時までか、	継続	新規				継続
19	中学生	上昇	朝はできるだけ見ない	継続	新規	継続	継続	継続	継続

※新規: T2のみに有, 継続: T1・T2ともに有, なし: T1・T2ともに無, 消失: T1有・T2無, 空欄: 「わからない」と回答/欠損値

対面支援の外側で青年とつながり続ける

チャット型心理支援の実践

——「関係の継続性」を支える新たな試み——

古川さり(教育心理相談室ひまつも) 青木佑太郎(教育心理相談室ひまつも) 藤井恭子(関西学院大学)

キーワード：チャット型心理支援 関係性の継続 プレンデッド支援

目的・背景

青年期は、自立と依存の間で揺れ動きながら自己理解や対人関係の課題に直面しやすく、心理的な安定を欠きやすい時期である。進路選択や就労、友人関係や家族関係、経済的困難など、複数の課題が同時に押し寄せるため、心理的支援の必要性は高い。しかし、実際に大学相談室を利用する学生は平均で4%程度にとどまるとされ(独立行政法人日本学生支援機構, 2021)、多くの青年が制度的支援から「こぼれ落ち」やすい現状がある。

特に、学校や職場と一定のつながりを保ちながらも心理的な揺らぎや不安を抱える「中間層」と呼べる青年たちは、制度的枠組みに接続しづらい。大学卒業や休学終了といった制度的節目により支援関係が途絶することも少なくなく、孤立化を深めるリスクが存在する。このような状況を背景に、従来の「対面カウンセリング」に依存した支援だけでは、青年の多様なニーズに十分応えることが難しいことが明らかになりつつある。

日本国内では、2017年以降、全国の自治体がLINEなどのSNSを活用した相談支援を展開してきた。2023年度には、全国で延べ27万件を超える相談が寄せられ、登録者の約7割は10代・20代であった(厚生労働省, 2024)。SNS相談は匿名性及び即時性を強みとし、自殺予防や緊急時対応に大きな役割を果たしてきた(杉原・宮田, 2019)。また、テキストを介したやり取りでは自己開示のハードルが下がることが知られており(Suler, 2004)、若者にとってアクセスしやすい支援形態となっている。

しかし、匿名性及び即時性を重視するSNS相談には、支援関係の継続や深まりに限界がある。担当制でないことや対応時間の制約によって継続的な関係が築きにくいこと、匿名ゆえに関係性が断続的になりやすいことなどが課題として指摘されている。長谷(2023)は心理臨床において、クライアントのニーズや「枠」の影響を踏まえ、必要に応じて支援の枠を意図的に超えることの重要性を述べているが、この観点からみても、既存のSNS相談は「継続性」という観点で十分に応えられていない。

海外でもテキストベースの支援に関する研究が進んでいる。Hoermannら(2017)は、同期型テキスト対話を介した介入が、心理的困難を抱えるクライアントの支援に有効であり、対面支援を補完する可能性を有すると指摘した。Chan(2020)は、オンラインのみ、対面のみ、および統合型(オンライン+対面)を比較し、統合型の成果が最も良好であることを示している。さらに、Karnikら(2023)は若年層を対象とした電話起点のテキスト・セラピーの迅速レビューを行い、臨床的有効性・利用性・アクセス性の観点から有用性を報告した。最近では、Higuera-Lozanoら(2025)が欧州4か国の若者向けオンライン・チャッ

ト相談サービスを横断的に調査し、サービス設計の改善課題(アクセス性、データセキュリティ、脆弱集団の包摂など)を明らかにしている。

以上を踏まえ、本研究の目的は、①月額定額・無制限のチャット型心理支援を導入した実践の運用実態と効果の端緒を報告すること、②対面との併用(ブレンデッド支援)によって青年との関係の継続性がどのように支えられたかを、国内外の先行研究と照合して検討することである。

方法

対象と期間

対象は23～26歳の青年3名(女性3名)である。全員が対面カウンセリングの既往をもち、医療機関への通院を継続していた。調査期間は2024年9月～2025年8月の12か月である。

支援モデル(設計と運用)

本実践「ひまつもチャット」は、LINEを媒体とした非対面チャットを中核に、月1回以上の対面カウンセリングを基本とする併用型である。利用開始時にオリエンテーションと同意取得を行い、規約には①危機対応は原則対象外、②返信は24時間以内を基本、③守秘と記録管理、④緊急連絡の取り決めに明記した。料金は月額1,980円の定額・無制限とし、メッセージ回数や文字数の制限を設けなかった。なお、本実践は匿名利用を前提とせず、既存の対面関係の延長として実施した。

体制と応答方針

公認心理師2名が共同運営し、相互モニタリングで返信内容とリスクをチェックした。誰が返信しているかは絵文字等で可視化し、常時即時ではなく継続性・安定性を優先するため、あえて“待つ余白”を残す運用を採用した。緊急時は気づいた時点での即応を原則とした。

データ収集と分析

やり取りの総通数、月別通数、時間帯(時刻)分布などの記述指標を収集した。内容は、①情動調整(不安・抑うつ・怒り)、②対人関係(家族・交友)、③学業・就労、④健康・生活リズム、⑤支援の調整(予約・対面カウンセリング前後の相談)、⑥危機関連

(安全確認)といった包括的カテゴリに整理し、頻出性と文脈を確認した(本稿では匿名性保護のため事例記述は最小限)。カテゴリ付与は発話単位で行い、重複該当時は情動調整>危機関連>対人関係>学業・就労>健康・生活リズム>支援調整の順で主ラベルを決定し、副次情報は註記として保持した。

倫理的配慮

研究発表への同意取得のうえで記録を匿名化し、最長5年間保管することとした。事例の詳細は当日の配布資料に限定し、本稿では全体傾向のみを報告する。

結 果

(1) 利用量と時間帯の特徴

12 か月で累計約 7,071 通（月平均約 589 通）が送受信された。送信は平日の夕方～夜間に多く、日中活動の一区切り後に情動の揺れや対人・学業関連の思考が表出する傾向が確認された。導入初期（登録直後の数週間）は送信頻度にばらつきが見られたが、その後は個人のペースに応じた利用が定着していった。対面カウンセリングの間に送信される傾向も見られ、対面カウンセリングの補完として機能していた。

(2) 内容の全体傾向

- ・情動調整：小さな不安や気分の落ち込みを短文で断片的に綴る投稿が頻発した。強い相談意識がなくても、思考や感情の“置き場”として機能し、その累積が自己省察に結び付いた。
- ・対人関係：家族・交友をめぐる違和感や戸惑いの共有が多く、助言よりも共感的反射への手応えが言及された。
- ・学業・就労：締切や評価、対人摩擦に関する準備的思考（「こう言われたらどう返すか」等）が事前に整理され、対面カウンセリング外でのコーピング設計が進んだ。
- ・健康・生活リズム：睡眠ずれ、体調不良、受診頻度の不安定さといった早期兆候の報告があり、対面カウンセリングを待たずに小さな調整（睡眠衛星の確認等）がなされた。
- ・支援の調整：予約日程のすり合わせや対面カウンセリング準備・振り返りがチャット上で補助され、対面の密度を相対的に高めた。
- ・危機関連：危機の一次対応は対象外であるが、緊張高まりや被刺激性上昇が文面に現れた際は安全確認と受診勧奨が的確に作動した。既存のつながりがあることで、状況説明の心理的ハードルが低減した。

(3) やり取りの様式とプロセス

短い往復（数行）やスタンプを含む非連続的な表現が多く、“即時の共感”と“熟考のための間”が交互に現れた。返信は 24 時間以内を基本としつつ、あえて数時間のラグを許容することで、依存化の予防と自律的検討の余白が保たれた。対面カウンセリング枠の外側に「細いが切れない線」を描くことで、断絶の回避と安定した接続が支えられた。

(4) 運用から得られた実務上の知見

- ・予測可能性：返信の期待値（24 時間以内）が示されていることで、不安の過度な昂進が緩和された。
- ・二人体制：モニタリングにより見逃しを低減し、返信の一貫性が担保された。
- ・定額・無制限：回数や文字数の制約意識が外れ、必要な時に必要なだけ書けることが主観的安心感を支えた。
- ・対面カウンセリングとの連動：チャットで準備→対面カウンセリング→振り返りの三段構えが自然に形成され、ブレンデッド支援としての密度が高まった。

なお、個々の事例の詳細な経過・抜粋は倫理的配慮により当日の配布資料にて提示する。本稿は 3 名全体の傾向に限定して記述した。

考 察

「枠」を意図的に再設計することの意義

結果で示された対面カウンセリング間の補完、待つ余白の設計、定額・無制限、二人体制は、臨床の「枠」が関係性に与える影響（長谷, 2023）を自覚的に扱い、継続性を最優先に枠を再設計した実践である。週 1 回・50 分という伝統的な時間枠や課金枠を緩める

ことにより、“細いが切れない線”としての接点が維持され、断絶の危険が減じられた。この発想は「必要に応じて枠を超える」べきだとする長谷の議論と整合する。

匿名性の利点と継続の課題をどう補完するか

SNS 相談は匿名性・即時性により敷居を下げる一方、継続的な関係の深まりには限界があるとされる（杉原・宮田, 2019）。本実践は非匿名・既存関係を前提に、平時の“ゆるやかな接点”を危機時の“作動する導線”へと転化させた。チャットでの準備→対面カウンセリング→振り返りという往還が自然に生じた点は、匿名相談の到達性を活かしつつ、継続性と個別性を補完する道筋を示す。

断片的自己開示と安心感の形成

結果で確認された短文・スタンプ中心の断片的表現は、オンライン脱抑制効果（匿名性／不可視性／非同時性等）の影響で自己開示の閾値が下がることを示す。小さな揺れを、対面カウンセリングを待たずに文字として置いておく経験は、情動調整と関係の継続を同時に支えた（Suler, 2004）と解釈できる。

ブレンデッド支援としての妥当性

同期テキスト支援の補完的意義（Hoermann ら, 2017）と、統合型（オンライン＋対面）が最も良好という実証（Chan, 2020）は、本実践の対面カウンセリング間での送信傾向や三段構え（準備→対面カウンセリング→振り返り）のプロセスと一致する。若年層へのテキスト・セラピーの有望性（Karnik ら, 2023）は、夕方～夜間に集中する利用パターンの受け皿としての有効性を裏づける。さらに、欧州 4 か国調査（Higuera-Lozano ら, 2025）が指摘するアクセス性・データセキュリティ・脆弱集団の包摂等の制度課題は、わが国でのスケーラブルな実装を検討するうえで同様に留意すべき点である。

実務的含意：即応と余白の両立

24 時間以内返信という予測可能性は不安の高まりを抑制し、あえての遅延は熟考と自律性を促す。結果で示された“作動する導線”（危機時の即応）は、平時の「薄い接点」の累積によって成立する。今後は、①返信タイミングの可視化（曜日・時間帯の運用告知）、②危機予兆の検知基準（キーワード・文脈の二重基準）、③二人体制のスケール戦略（繁忙期のカバレッジ、最大同時担当数の上限設定）を整備することで、継続性と安全性を同時に高められる。

本研究により、チャット型心理支援を取り入れることで、青年との日常接点を維持し、対面支援を補完する形で関係性継続を支える実践モデルの可能性を示した。一方で、運用設計・安全性・拡張性といった課題も明らかとなった。今後は、より大規模な実証研究と技術的支援体制整備を通じて、より多くの青年がアクセス可能な新たな支援モデルを構築していきたい。

主要引用文献

- 長谷雄太 (2023). 心理臨床における枠と関係の多層性. 甲南大学学生相談室紀要, 30, 21-34.
- 厚生労働省 (2024). 令和 5 年 4 月～令和 6 年 3 月分 SNS 相談事業の実施結果(令和 6 年 6 月末時点) Retrieve d September 29, 2025, from <https://www.mhlw.go.jp/content/001271372.pdf>
- 杉原保史・宮田智基 (2019). SNS カウンセリング・ハンドブック. 誠信書房.
- Suler, J. (2004). The OnLINE Disinhibition Effect. *CyberPsychology & Behavior*, 7(3), 321-326.

利他に重点を置いて就職先選択を考える大学生の強みとは —民間企業就職活動期の文科系3年次生を対象に—

若松養亮
(滋賀大学)

Advantages of Juniors Prioritizing Altruism in Job Selection
: A Study of Liberal Arts Students During Private Sector Recruitment Season
Yosuke Wakamatsu
(Shiga University)

1. 問題と目的

働くことに動機づけられ、職業を選択するうえでの価値観として有力なものに「利他」がある(新井ら, 2016)。利他的な動機は、ボランティアや援助行動との関連は多く研究されているが、職業選択との関連を見たものは数少ない(李, 2016)。

本報告はその手始めに、民間企業への就職を希望する文科系大学生を対象に、利他的動機で職業選択を動機づけられる人とそうでない人との差異を検討することを目的とする。

2. 方法

(株)アイブリッジ社のサンプルからスクリーニング調査を経て、民間企業を想定する文系の大学3年生218名にWeb調査を行い、131名から回答を得た。同一回答の連続や多くの設問への無回答者を除き、117名(うち80名が女性)の有効回答とした。本調査実施期間は2025年2月14~27日である。なお調査内容と実施方法は、所属機関の倫理審査を通っている(承認番号B240012)。分析対象の設問・尺度は以下の通りである。

(1) 選択理由尺度

若松(2022)による選択理由尺度を、企業就活者に適合するように修正した29項目の尺度を用いた。まず「現時点で最も希望する業種・職種、可能なら企業名」を記述してもらい、それに対して目指す理由の強さを5件法で尋ねた。

(2) 意思決定状況

調査時点で就職活動のどの段階にいるかを7つの選択肢から1つ選ばせた。

(3) 選択肢への評価

回答時点で有する職業の選択肢全般に対して、肯定的な項目1つ(「このなかから最終的にひとつに決めて良いと思っている」と)と否定的な項目3つで尋ねた。評価は5件法。

(4) 意思決定のプロセス

大学に入学してから調査時点までの意思決定の進み方を尺度化した若松(2014)の22項目を用いた。評価は5件法。

3. 結果

(1) 選択理由の因子パターンとクラスタ分析

選択理由尺度に最尤法による因子分析を行い、プロマックス回転を施すと以下の6因子パターンが得られた。

- I. 仕事内容と自己 ($\omega=.906$)
- II. 勤務の条件・環境 ($\omega=.871$)
- III. 利他性志向 ($\omega=.890$)
- IV. 消極的選択 ($\omega=.833$)
- V. 付随的好条件 ($\omega=.717$)
- VI. 待遇・安定 ($\omega=.911$)

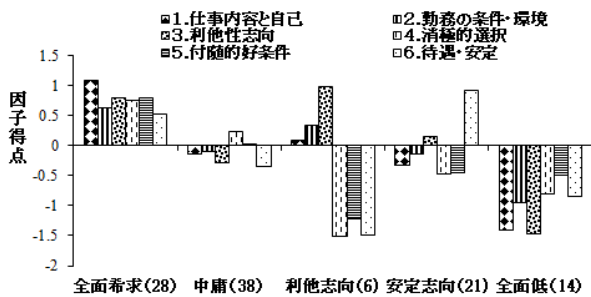
これらの因子得点からWard法によるクラスタ分析を行った結果、図1の5クラスタ解を得た。この5クラスタ間では、性差も意思決定状況も有意な分布の偏りは見られなかった。

利他志向群は、因子IVの消極的な、また因子V・VIの仕事内容と関わらない理由が著しく低い得点であることが特徴的である。

(2) 選択肢評価の比較

現有選択肢への肯定的な評価をクラスタ間で比

図1 選択理由尺度による5クラスタパターン



較すると、 $F(4, 102)=5.43$ で $p<.001$ で有意であり、利他志向群は評定平均値で最も高く、Holm 法による多重比較を行うと、中庸群・全面低群との間に有意差があった（図2）。

次に現有選択肢への否定的な評価3項目に最尤法による因子分析を行って1因子にまとめた（ $\omega=.721$ ）。因子得点をクラスタ間で比較すると、有意な主効果が見られ（ $F(4, 102)=9.56$, $p<.001$ ）、利他志向群は他のすべての群と有意差が見られた（図3）。

図2 クラスタ間での肯定的項目の比較

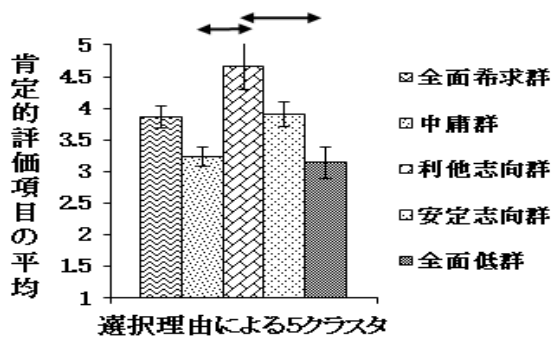
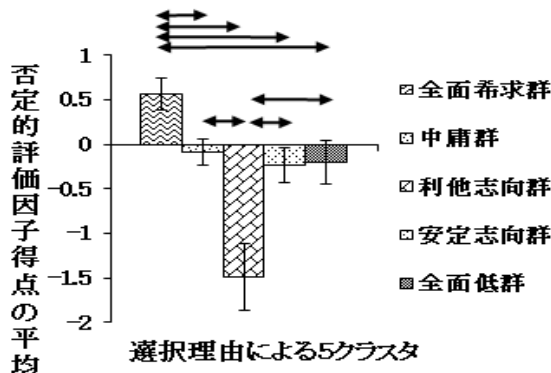


図3 クラスタ間での否定的評価の比較



(3) 意思決定プロセスの比較

意思決定プロセス尺度に最尤法による因子分析を行い、4因子解にプロマックス回転を施して、以下の通り命名した。

因子1 長期の検討（ $\omega=.838$ ）

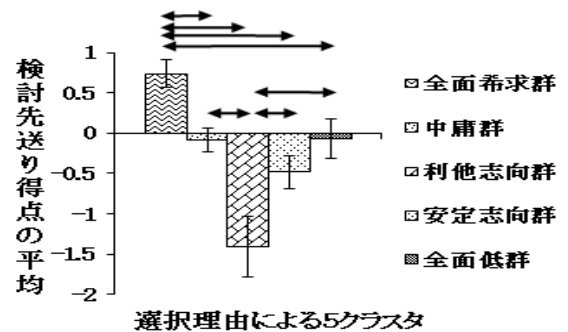
因子2 着実な成果（ $\omega=.808$ ）

因子3 早期の見通し（ $\omega=.753$ ）

因子4 検討の先送り（ $\omega=.749$ ）

これらの因子得点を、同様に5クラスタ間で比較すると、因子1～3は全面希求群と利他志向群が他の3群より高いという類似の傾向を示したが、因子4のみ両群は対照的で、利他志向群は著しく低い得点を示した。

図4 クラスタ間での検討先送りの比較



4. 考察

真島（2010）が提起した、行為者自身に利益をもたらす仕組みのために利他行動は生起・持続するという適応論的アプローチにしたがえば、全面希求群は仕事で感じる自己の成長や承認が利益として機能すると言えるが、利他志向群はどのような「利益」があるために、有する選択肢を肯定的に評価でき、意思決定に気後れなく向き合えるかを、今後解明していくという課題が残された。

文献

- 新井立夫 他（2016）. 経営論集, 2(6), 1-23.
 真島理恵（2010）. 利他行動を支えるしくみ ミネルヴァ書房.
 李 超（2016）. 経営研究, 66, 89-106.
 若松養亮（2014）. 科研費報告書（21530683）
 若松養亮（2022）. 日本キャリア教育学会発表論文集, 44, 92-93.

大学生の友人に対する寛容の構造 —多元性に関する予備的検討—

服部茜¹・藤井恭子²

(¹関西学院大学大学院 教育学研究科・²関西学院大学)

Structure of Kan-yo Toward Friends in University Students:

A Preliminary Examination of Multidimensionality

Akane HATTORI¹, Kyoko FUJII²

(¹Graduate School of Education, Kwansei Gakuin University, ²Kwansei Gakuin University)

1. 問題と目的

本研究は、寛容研究において焦点が当てられてこなかった友人関係に着目し、青年期の友人関係における「寛容」を明らかにするものである。

青年期の友人関係は、Youniss (1980)が対人関係の最終目的とした「相手の個別性を認識し、相互の利益を目指す関係」へと向かう重要な発達過程に位置づけられる。この時期の友人関係は、親密性を重視するものから相互理解を重視する関係へと変容していく(榎本, 1999; 2000)。しかし、発達過程における同質性の高い友人関係は関係崩壊への不安も高く、こうした親密さゆえの両価性も指摘されている(中間, 2014)。近年は教育的課題も深刻であり、いじめ被害や友人関係トラブルと不登校が関連していることも明らかになっている(子どもの発達科学研究所, 2024)。このように青年期において友人関係は重要な位置を占め、言い換えれば、類似性を起点とする不寛容な関係から寛容な関係への変容は、青年が乗り越えるべき課題ともいえよう。

心理学ではこれまで「寛容」について、容認(tolerance)とゆるし(forgiveness)の2つの観点から研究が行われてきた。前者は他者の異質性が自己や集団のアイデンティティを脅かす問題として、後者は過去の加害—被害の問題について研究が行われてきた。しかし、日本語の「寛容」の語義は、「ゆるし受け入れること(広辞苑第七版)」とされ、容認とゆるしの概念を包摂しており、実際に日本の大学生は「寛容であること(To be tolerant)」がゆるしの最も中心的な要素であると評価している

(Joo et al., 2019)。つまり、日本人青年にとって両概念を明確に線引きすることは困難であり、両者を包摂する「寛容(kan-yo)」概念として再検討する必要があると考えられる。

そこで本研究は、青年期の親密な友人関係における「寛容」が容認とゆるしの2因子からなる多元的構造をもつと仮定し、大学生を対象としてその構造を予備的に検討する。併せて寛容と信頼感との関連、および性差についても明らかにする。また、本研究では先行研究の定義や語義を参照し、寛容を「ゆるし受け入れること(広辞苑第七版)」、容認(tolerance)を「相手に対する怒り、否定的な考え、評価などの原因を自他の違いとして認識し、ありのまま受け入れること」、ゆるし(forgiveness)を「相手に対する怒り、否定的な考え、評価などを進んで放棄すること」とそれぞれ定義した。

2. 方法

調査時期 2025年4月

調査協力者 私立大学生338名(男性96名、女性239名、その他3名)、平均年齢は20.00歳(SD=0.96)であった。

調査内容 質問紙では学年、年齢、性別について尋ね、普段最もかかわりの多い友人を想定してもらい、当該友人と会う頻度、親密度、付き合いの期間について回答を求めた。その後服部(2024)において最も不寛容の程度が高かった想定場面を提示し、当該友人に対する不快感の有無、寛容尺度、TRIM(McCullough et al., 1998)、信頼感尺度(天貝, 1995)への回答を求めた。

3. 結果

容認とゆるしの2因子構造を仮定していたが、探索的因子分析の結果から3因子構造が妥当であると考えられた(Table1)。「F1 自他の個別性認知による受け入れ」、「F2 否定的感情の放棄」には、若干の項目の混在が認められたものの、前者には容認 (tolerance) の概念が、後者にはゆるし (forgiveness) の概念を表す項目が負荷していた。新たに見出された「F3 二分法的思考による不快感の反芻」は、逆転項目として想定したもので構成され、一般的には不寛容を表す因子であると考えられた。第3因子は、負荷している項目からゆるしの欠如(Stackhouse et al., 2018)に近い因子であると考えられる。

Table1 寛容尺度

項目	内容	F1	F2	F3
F1 自他の個別性認知による受け入れ ($\alpha=.80$ $\omega=.82$)				
KT6	自分とは違う考えだと割り切る	.77	-.08	-.03
KT20	友人は自分とは違う考えをもっているから、仕方がない	.74	.11	-.01
KT4	結局、自分と友人は違う存在なので、そのままの友人を受け入れる	.63	-.05	-.10
KT1	友人とは自分とは異なる人間なので、考えが違っても仕方がない	.54	-.14	-.14
KT18	友人は自分とは違うので、そのまま諦める	.48	.18	.15
KF2	友人との間で起こったことは小さなことだと考えるようにする	.47	.24	.07
KT3	友人は自分と同じような考えや価値観をもっていると思っていたので、受け入れることができない	-.40	.16	.32
F2 否定的感情の放棄 ($\alpha=.77$ $\omega=.77$)				
KF11	不快に感じたが、そのことばかりを考えないようにする	-.04	.72	.03
KF14	友人へのネガティブな感情を忘れようとする	-.04	.67	.00
KF10	友人に対して感じた不満や不快感についてあまり深く考えないようにする	.00	.63	-.15
KF16	いつまでも友人を批判する気持ちをもち続けないようにする	-.05	.56	-.09
KF8	イライラした気持ちを引きずらないようにする	-.13	.51	-.23
KF22	友人への不満や不快感にいったん蓋をする	.29	.46	.22
KT12	それが友人のすべてではないと考え、合わないところとして受け入れる	.26	.42	.01
F3 二分法的思考による不快感の反芻 ($\alpha=.78$ $\omega=.79$)				
KT9	友人が自分と同じような考えでなかったので、気が済まない	-.08	.08	.67
KF15	友人が間違っているという気持ちが収まらない	-.09	-.05	.62
KF7	友人と自分のどちらに責任があるのかはっきりさせたい	.12	-.08	.58
KF5	友人への不満が頭から離れなくなる	-.09	-.06	.55
KF19	友人が悪いということをはっきりさせたい	.00	-.15	.55
因子間相関		F1	.47	-.49
		F2		-.34

注) 小数点第3位を四捨五入

続いて寛容尺度の信頼性係数を算出したところ、問題のない値であった($\alpha>.77$, $\omega>.77$)。一方で妥当性検証では、各因子と TRIM には相関がみられたものの、否定的感情の放棄との相関係数はそれほど強いものではなく($r = -.19 \sim -.25$, $p < .001$)、受け入れと回避も無相関であった。新たに見出された反芻は中程度の関連を示していたが($r = .30 \sim .44$, $p < .001$)、全体として寛容尺度の十分な並存的妥当性は確認されなかった。

次に寛容尺度と信頼感の関連について検討するために、寛容尺度の3つの下位尺度得点を用いて、現代青年の親密な友人に対する寛容の形態について分類を行った。その結果、デンドログラムから4クラスターを抽出した。それぞれの特徴からCL1を不寛容型、CL2を寛容型、CL3をゆるし型、CL4を容認型と命名した。さらに、信頼感尺度と親密度について、4つのクラスターを被検者間要因として、一要因分散分析を行った。その結果、他者信頼と親密度では有意な差が認められなかったが、不信では有意な得点差がみられた($F(3,287) = 4.53$, $p < .01$, 偏 $\eta^2 = 0.045$)。多重比較の結果、寛容群の不信得点が不寛容群とゆるし群よりも有意に低いことが明らかになった($p < .05$)。

4. 考察

新たに見出された反芻(F3)はゆるしの欠如(Stackhouse et al., 2018)を測定する Unforgiveness Measure の感情的—反芻的ゆるせなさ因子の項目と類似していた。寛容尺度の下位因子として不寛容因子が抽出されたことは、寛容の一次元的な測定への批判(Boon et al., 2022)を支持する。しかし、先行研究ではゆるしとゆるしの欠如が経験的に別概念とされており(cf. Stackhouse et al., 2018)、本尺度の3因子構造については、今後も検討が求められる。寛容尺度の類型化において寛容群は受け入れと否定的感情の放棄の両得点が高く、ゆるしと容認の両方が生じていた。さらにはゆるし群や容認群のように、一方の因子得点が有意に高い群の存在も確認された。この結果は、同じ状況に直面しても個人によって示される寛容の形態が異なることを示唆する。また寛容の形態と信頼感の関連では、不信の得点に差がみられ、不寛容と不信に関連があると考えられた。これまでの先行研究を概観すると、対象群の閉鎖的志向の高さや橋渡し型資源の少なさが関係している可能性がある(cf. 中山・山本, 2018)。

主要引用文献

Stackhouse, M. R., Jones Ross, R. W., & Boon, S. D. (2018).

Unforgiveness: Refining theory and measurement of an understudied construct. *British Journal of Social Psychology*, 57(1), 130-153.

青年期における母親の養育態度と母親に対する感謝との関係

池田幸恭¹

(¹ 和洋女子大学)

Relationship Between Parenting and Gratitude Toward One's Mother in Adolescence

Yukitaka IKEDA¹

(¹ Wayo Women's University)

1. 問題と目的

青年が親から自立していく中で、親に対する感謝の気持ちは発達するといえる。池田(2024)は、「親に対する感謝」を「わたしは親からの恩恵を受けていると感じること」としてとらえ、親とのかかわり方からみた親に対する感謝の心理状態の特徴を検討している。そこでは、親に対する感謝をすまなさを伴って複合的に感じている群と素直に感じている群の両方で親と自分を個別な存在と実感しながらも思いやるような親密な関係を築いており、就職していることで親に対する感謝を素直に感じる青年が多くみられることが示唆されている。

このように「子による親とのかかわり方」との関係が検討されている一方で、親の養育態度のような「親による子とのかかわり方」がどのように親に対する感謝と関係するのかは十分に検討されていない。また、Ikeda(2020)は母親に対する感謝を規定する6種類の心理的要因を見いだしている。親の養育態度は、親に対する感謝を規定する心理的要因を介して、親に対する感謝の心理状態と関係することが予想される。親の養育態度については、「受容」と「心理的統制」に加えて、子どもの居場所や活動に注意をはらう「モニタリング」をとらえることができる青年期養育尺度(内海, 2013)を用いる。

本研究の目的は、青年期における母親の養育態度と母親に対する感謝との関係を明らかにすることである。青年と関わる時間がより長いことが指摘されている母親との関係に着目し、web調査を行うことで学生以外の回答者も広く確保する。

2. 方法

調査回答者 15歳から24歳までの964名(男性364名, 女性600名)の回答を分析した。

調査時期および手続き 2025年10月に、インターネット調査会社(株式会社クロス・マーケティング)を通じてweb調査を行った。Directed Questions scaleに基づく2項目のいずれかに誤答を示した場合は、分析した回答に含めなかった。

調査内容 年齢、戸籍上の性別、職業、家族状況などに加えて、以下の内容を尋ねた。

母親に対する感謝の心理状態 20項目(池田, 2014)へ5件法(「全くあてはまらない」～「非常にあてはまる」)で尋ねた。「援助してくれることへのうれしさ」、「生み育ててくれたことへのありがたさ」、「今の生活をしていられるのは母親のおかげだと感じる気持ち」、「負担をかけたことへのすまなさ」、「自分が苦勞しているのは母親のせいだと感じる気持ち」の5種類の内容から構成されている。

母親に対する感謝を規定する心理的要因 36項目(Ikeda, 2020)へ5件法(「非常にあてはまる」～「全くあてはまらない」)で回答を求めた。「充足」、「非当然視」、「母親からの承認」、「母親の意図」、「自己不全性」、「自己形成への影響」の6種類の要因に各6項目で構成されている。

母親の養育態度 青年期養育態度尺度(内海, 2013)の15項目(「受容」6項目, 「心理的統制」6項目, 「モニタリング」3項目)へ7件法(「全くあてはまらない」～「非常によくあてはまる」)で尋ねた。

3. 結果

第1水準に母親の養育態度 ($\alpha=.76$ to $.92$)，第2水準に母親に対する感謝を規定する心理的要因 ($\alpha=.73$ to $.91$)，第3水準に母親に対する感謝の心理状態 ($\alpha=.89$ to $.94$) を置いたパス解析を男女による多母集団同時分析で行った (Table 1)。第1水準の変数間，誤差項間に相関関係を仮定した。

分析の結果，親に対する感謝を規定する6種類すべての心理的要因と親の養育態度における「受容」に正の関連，「心理的統制」に負の関連がみられた。「モニタリング」は男性で6種類すべての心理的要因に，女性では「母親の意図」，「自己不全性」，「自己形成への影響」の3種類の心理的要因に正の関連がみられた。

男女共に，「負担をかけたことへのすまなさ」と「非当然視」ならびに「自己不全性」に正の関連，「自分が苦勞しているのは母親のせいだと感じる気持ち」と「充足」に負の関連など，母親に対する感謝を規定する心理的要因と母親に対する感謝の心理状態の関連が確かめられた。加えて，男女共に，「受容」は「援助してくれることへのうれしさ」，「心理的統制」は「負担をかけたことへのすまなさ」ならびに「自分が苦勞しているのは母親のせいだと感じる気持ち」との正の関連が示された。その他の一部の関連には，男女による特徴の違いもみられた。

4. 考察

母親の養育態度は，母親に対する感謝を規定する心理的要因を介して母親に対する感謝の心理状態を促すだけではなく，母親に対する感謝の心理状態と直接の関連もみられることが示唆された。特に心理的統制は母親に対する感謝を規定する心理的要因を低減するだけでなく，負担をかけたことへのすまなさ，自分が苦勞しているのは母親のせいだと感じる気持ちを強めていた。モニタリングとの関連には男女差がみられ，その受けとめ方が息子と娘で異なる可能性が考えられた。

文献

- 池田 幸恭 (2014). 成人期を中心とした親に対する感謝の検討 和洋女子大学紀要, 54, 75-85.
- Iked, Y. (2020). Psychological factors of gratitude that Japanese adolescents and young adults feel toward their mother. *European Association for Research on Adolescence* (poster).
- 池田 幸恭 (2024). 親とのかかわり方からみた青年期における親に対する感謝の心理状態の特徴 日本青年心理学会第32回大会発表論文集, 54-55.
- 内海 緒香 (2013). 青年期養育尺度 (PAS) の作成 心理学研究, 84, 238-246.
- 付記 本研究は，和洋女子大学2025年度研究奨励費の助成を受けた。

Table 1 母親の養育態度と母親に対する感謝を規定する心理的要因，母親に対する感謝の心理状態の関連

目的変数 説明変数	充足	非当然視	母親からの承認	母親の意図	自己不全性	自己形成への影響	援助してくれることへのうれしさ	生み育ててくれたことへのありがたさ	今の生活をしていられるのは母親のおかげ	負担をかけたことへのすまなさ	自分が苦勞しているのは母親のせい
男性 受容	.50 ***	.37 ***	.62 ***	.64 ***	.34 ***	.55 ***	.23 ***	.11 *	.14 **		
心理的統制	-.38 ***	-.25 ***	-.36 ***	-.34 ***	-.26 ***	-.29 ***	.07 *	.05		.17 ***	.37 ***
モニタリング	.18 ***	.25 ***	.18 ***	.15 *	.14 *	.12 *	.03				
充足	—	—	—	—	—	—		.25 ***	.27 ***		-.34 ***
非当然視	—	—	—	—	—	—	.10 **	.16 ***	.01	.33 ***	
母親からの承認	—	—	—	—	—	—	.56 ***	.24 ***			-.12
母親の意図	—	—	—	—	—	—			.14 *		
自己不全性	—	—	—	—	—	—			.23 ***	.49 ***	
自己形成への影響	—	—	—	—	—	—		.17 ***	.13 *	-.17 *	
R^2	.55	.37	.70	.69	.27	.49	.68	.66	.64	.39	.46
女性 受容	.66 ***	.56 ***	.67 ***	.65 ***	.44 ***	.51 ***	.17 ***	-.00	-.02		
心理的統制	-.25 ***	-.12 ***	-.26 ***	-.27 ***	-.11 **	-.23 ***	.02	.06 *		.11 *	.22 ***
モニタリング	.00	.02	.06	.08 *	.11 *	.10 *	.09 **				
充足	—	—	—	—	—	—		.24 ***	.16 **		-.37 ***
非当然視	—	—	—	—	—	—	.04	.14 ***	.15 ***	.14 **	
母親からの承認	—	—	—	—	—	—	.60 ***	.30 ***			-.24 ***
母親の意図	—	—	—	—	—	—			.19 ***		
自己不全性	—	—	—	—	—	—			.21 ***	.52 ***	
自己形成への影響	—	—	—	—	—	—		.21 ***	.21 ***	-.09	
R^2	.58	.38	.67	.68	.31	.46	.68	.60	.62	.30	.52

注) 数値は標準化係数である。「受容→充足」のパスの場合，説明変数に「受容」を目的変数に「充足」を示した。戸籍上の性別（男性，女性）による多母集団同時分析を行った。第1水準の変数間および誤差項間の相関係数は，男性の「受容」と「心理的統制」，「援助してくれたことへのうれしさ」ならびに「今の生活をしていられるのは母親のおかげだと感じる気持ち」と「自分が苦勞しているのは母親のせいだと感じる気持ち」以外で有意な関連が示され， $r=.28$ to $.71$ ($p<.01$) であった。適合度はCFI=1.00，RMSEA=.02であった。 * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

未来の私は今をどう振り返る？ —大学ノスタルジアの先行体験を促すフィールド実験—

千島雄太¹・長峯聖人²

(¹筑波大学・²江戸川大学)

How Does Future Me Recall The Present?

A Field Experiment Evoking Pre-Experienced University Nostalgia

Yuta CHISHIMA¹, Masato NAGAMINE²

(¹University of Tsukuba, ²Edogawa University)

1. 問題と目的

ノスタルジアとは、個人の過去に対する感傷的な思慕のことであり、混合感情の一つである (Sedikides et al., 2008)。例えば、大学卒業生が大学生活に対してノスタルジアを感じるほど、大学への愛着や大学への寄付の意図が高いことが報告されている (Green et al., 2021)。

ノスタルジアは過去に対して抱く感情であるが、それを将来感じると予期することがあり、これは「予期ノスタルジア (anticipated nostalgia)」と呼ばれている (Cheung et al., 2020)。これまでの研究では、ノスタルジアを予期するほど、思い出に残るような活動を重視することが知られている (Cheung et al., 2023)。

この「将来、現在の生活をノスタルジックに感じるだろう」という予期は、未来の自己に対する視点取得と、ノスタルジアの先行体験が前提となる。未来の自己の立場から現在の自己や生活を振り返ることについては、ある程度の研究の蓄積があるものの (e.g., Chishima & Wilson, 2020)、ノスタルジアの文脈では研究が行われていない。

そこで本研究では、未来の自己への視点取得を行い、ノスタルジアの先行体験を行うことによって、大学生活の捉え方がどう変わるかを明らかにすることを目的とする。未来の自己の視点取得のリアリティを持たせるため、本研究では卒業した後の自分として大学構内を散策し、SNSで母校について写真やテキストを投稿するという設定を用いることとした。先行研究を土台として、ノスタルジアを先行体験するほど、大学を象徴する写真

を撮りやすく (仮説 1)、大学への愛着が高まり (仮説 2)、大学生生活への意欲が高まる (仮説 3) と予測した。また、補足的な指標として、写真に空が写っている面積の割合を用いた。これは、広角度合いを代替するものであり、未来の視点を取るほど高くなると予測した。

2. 方法

参加者

筑波大学の大学1～3年生139名であった (平均年齢 = 18.86歳, $SD = 1.43$, 1年生 = 60%, 2年生 = 37%, 3年生 = 3%, 男性 = 46%, 女性 = 53%)。

手続き

参加者はランダムに「未来条件」と「現在条件」に割り振られ、条件ごとに大学の教室もしくは実験室に集合した。未来条件では、架空のSNS上で社会人2年目のプロフィールを作成し、その自分として5～20分間大学構内を散策するように指示された。散策中には、自由に写真を撮影し、帰ってきてからテキストを含めて投稿した。その後、アンケート上で投稿内容のスクリーンショットを提出し、大学への愛着や大学生活への意欲について回答を行った。「現在条件」では、現在の自分のプロフィールを作成し、大学構内を散策し、その後は未来条件と同様の回答を行った。最後に、研究目的と各条件の内容について、デブリーフィングを行った。

指標

投稿内容として、写真が大学を象徴する度合いと、空の割合を扱った。象徴する度合いの評価は、

ベテラン教員 2 名による人的評価と、Google Lens のランドマーク検出による機械的評価を採用した。大学への愛着として、大学グッズの選択を用いた。大学のロゴがあるものとないものを 10 点ずつ対提示して、無料でもらえるとしたらどちらが欲しいか選択を求めた。大学生活への意欲として、典型的な生活場面について項目を作成した。

3. 結果

どんな役割が指示されたかを問う操作チェックは、全員がクリアしており、投稿内容についても、全員が指示通り投稿を行っていた。散策時間については、平均約 16 分であり、条件間で有意な差はなかった ($p = .278, d = .19$)。投稿文字数は、平均約 59 文字であり、条件間で有意な差はなかった ($p = .357, d = .16$)。

写真が大学を象徴している度合いについては χ^2 検定の結果、人的評価と機械的評価の双方で、実験条件の方が有意に高いことが示された (順に、 $p < .001, V = .30; p < .001, V = .36$)。空の割合については、マン・ホイットニーの U 検定の結果、実験条件の方が有意に多かった ($p = .010, r = .22$)。実験条件の写真の例を Figure 1 に示す。

大学グッズ 10 点について、因子分析を行った結果、1 因子構造が示された。合計得点について t 検定を行った結果、実験条件の方が有意に高かった ($p = .034, d = .36$)。結果を Figure 2 に示す。グッズ別にみると、クリアファイルやタンブラーなどで差が大きく、衣類では差が小さかった。

大学生活への意欲について、因子分析を行った結果、学業と対人関係の 2 因子構造が示された。それぞれについて t 検定を行った結果、いずれも有意差は示されなかった (順に、 $p = .517, d = .11; p = .094, d = .29$)。

4. 考察

仮説 1 は支持され、ノスタルジアを先行体験するほど、大学を象徴するような写真を撮りやすことが示された。未来条件では、広角の写真を撮りやすくなることも示され、未来の自己の視点取得によって心理的距離が大きくなったことが、被写体への物理的距離にも影響を与えた可能性がある (Niese et al., 2024)。仮説 2 も支持され、大学への愛着が高まることが示された。大学のグッズとして、衣類では差が小さかった点はデザインの影響が強かったと考えられる。今後、愛着に関しては別の指標も検討する必要がある。

一方で、仮説 3 は支持されず、大学生活への意欲は有意に高まらなかった。今回は、未来の自分が母校に帰ってきたという役割演技だけでなく、現在の自己との対話などを含める必要があるかもしれない (e.g., Chishima & Wilson, 2020)。

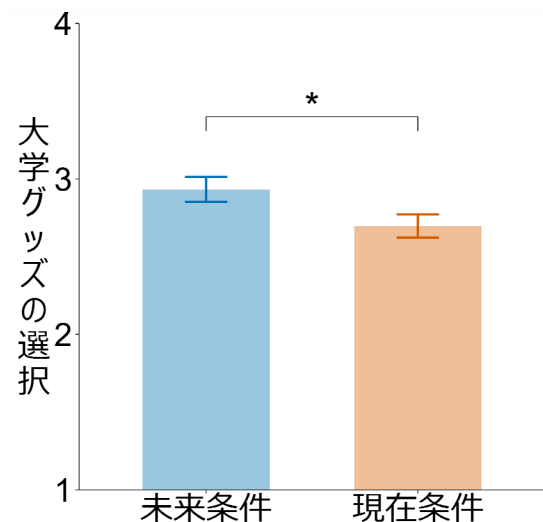
主要引用文献

Cheung, W.-Y., Hepper, E. G., Reid, C. A., Green, J. D., Wildschut, T., & Sedikides, C. (2020). Anticipated nostalgia: Looking forward to looking back. *Cognition and Emotion*, 34(3), 511–525.

Figure 1. 実験条件の投稿写真の例



Figure 2. 大学グッズの選択における条件間差



日本の成人期女性はなぜモラトリアム傾向なのか

白井利明

(大阪教育大学名誉教授)

Why do women are dominantly with Moratorium identities in Japan?

Toshiaki SHIRAI

(Emeritus Professor of Osaka Kyoiku University)

1. 問題と目的

アイデンティティ (ego identity) とは自分を自分の中心に据える (納得のする生き方) ことである (Erikson, 1968, p.159; 岡本祐子, 2002, p.290)。アイデンティティ発達は循環的螺旋的と仮定されるが (Marcia, 2002, p.16; 岡本祐子, 1994, p.46), 縦断研究は直線的であることを示し (Ferrer-Weder & Kroger, 2020, p.192), アイデンティティ地位は性格でもあるとされている (Marcia, 2002, p.17)。安定したモラトリアム傾向の人は、危機に伴う不快を抱えられない (Waterman, 1993, p.44), 弁証法的思考とされる (Stephen et al, 1992, p.288)。しかし, 実際はアイデンティティ地位の安定は人が自分の地位に合う環境を選んで生きることでもたらされると考えられる (Kroger, 1993, p.143)。

成人期のアイデンティティ発達は「償い」 (redemption; 過去のネガティブな出来事をポジティブな意味に転換する) の語りがもたらすとされるが (McAdams, 2019, p.15), スウェーデンの縦断研究 (Eriksson et al., 2023, p.1) で実証されている。ところが, そうした語りは日本ではあまり見られず, “流れるままに生きる” (going with the flow) が多い (Turner et al., 2024, p.1280)。文化差で考えると, 欧米は達成指向であるのに対して, 日本は行為の過程における気持ちに焦点が当たるという指摘 (東洋, 2005, p.3) を踏まえ, 白井利明ら (2025) は, 日本のモラトリアム傾向は自分の課題を確認しながら発達していこうとする姿勢の現れであると推測した。本研究は日本のモラトリアム傾向の中年期女性がどのような課題を抱えているかを検討する。

2. 研究 1

(1) 目的 白井利明ら (2025) に 2024 年度の定期調査の結果を追加し, 確かめる。

(2) 方法 日本の大学生を卒業後も追跡し, 毎年の質問紙調査を行い, アイデンティティ地位の測定は加藤厚 (1983) のアイデンティティ尺度を使ってきた。図 1 は白井利明ら (2025) と異なるが, それは, 第 1 に, 2024 年度の定期調査の結果を入れたこと, 第 2 に, コミットメント (現在の自己投入) を 4 項目から 3 項目に減らして集計したこと, 第 3 に, 達成地位 (F) を 4 点, A F 中間地位を 3.5 点, 早期完了地位 (F) を 3 点, モラトリアム地位 (M) を 2 点, DM 中間地位を 1.5 点, 拡散地位 (D) を 1 点とし直したこと, 第 4 に, 当該年齢での欠損値が 3 名を超えた 20, 54, 55 歳を除いたこと, 第 5 に, 新たに女性 1 名を加えた合計 10 名を集計したことによる。

(3) 結果と考察 北欧の結果も図に入れた図 1 から, 日本はモラトリアム地位の周辺にあり, 北欧とは際違った違いを示している。

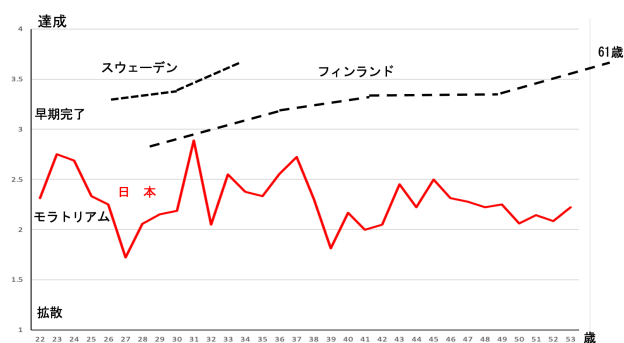


図 1 成人期女性のアイデンティティ地位の軌跡 (22 歳から 53 歳) (Eriksson et al., 2020; Fadjukoff et al., 2024)

3. 研究2

(1) 目的 図1の女性のうち 50 代前半の面接調査の協力者でモラトリウム傾向を示す2人の女性の50代前半の面接調査の語りを比較する。

(2) 方法 面接調査はマニュアルに沿って1人3時間程度実施された。比較対象の抽出に当たっては、対照的な人を選んだ。図2に示されるように成人期の前半がアイデンティティ地位が高く、Bさんは逆である。なお、Bさんの49歳は欠損値であるため50歳の数値を入れ、50歳は50歳の8ヶ月後の数値が代入されている。

(3) 結果と考察 Aさんは、学生時代はクラブ活動で活躍していたが、30代で結婚相手の転勤先の土地で結婚し、心身の不調に陥る。Aさん(52歳)は「目の前のことに精一杯。子どもを起こすところから余裕はない。両親がいなくなり、子どもが家を出たら、喪失感が大きい。夫にはわかってほしい。ひとりの時間をもちたい(子どもの心配をしない時間。しかし、きつと寂しがつてるだろうなと思ってしまう)。 」と語っている。Bさんは20代に心身の不調を経験するが、30代に転職した。Bさん(51歳)は「揺れている。職業生活、結婚の選択はもっと違う選択肢もあったのではと思う。子どもたちに恵まれたことは感謝している。転職に挑戦しているが、子どもと過ごせるのはほんの数年だから、本当にしたいことを我慢している。自分軸で生きたい。」と語っている。これらの語りはいずれも自己の探求が中心となっており、モラトリウム傾向を示していると言える。

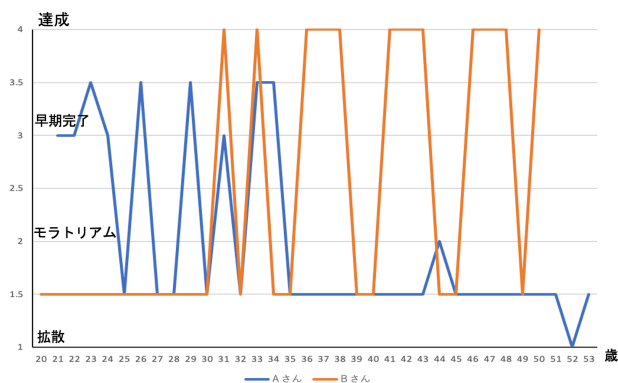


図2 Aさん(青)とBさん(赤)のアイデンティティ地位の軌跡(20歳から53歳)

アイデンティティ発達の個人差は、a.個人の乳幼児期の発達、b.新しい経験への開放性(openness)や柔軟性(flexibility)、c.援助資源へのアクセス(Kunnen & Bosma, 2012, pp.117-126)が関係する。a.は情報が無いため不明であり、b.はAさんはBさんに比べて弱いように思われるが、ここではc.に注目する。

Aさんは、仕事と家庭の両立という(母親の果たせなかった)目標を実現してきた。両親が主な援助資源であるが、パートナーも援助している。40代後半から子育ての終わりや親の高齢といった喪失を予期し、パートナーとの親密性を求めるが、期待できないと言う。Bさんは、親の期待の押しつけではなく、自分が決める生き方を求めてきたが、高齢出産のため子育て真っ最中であり、妥協せざるをえないと考えている。二人の違いとして、パートナーに対しては、Aさんは期待して抑うつ的になっているが、Bさんは期待せず、孤軍奮闘している。

4. 考察

二人に共通する課題として、パートナーとの関係という課題が出てきた。岡本祐子(2007, p.38)は個と関係性の成熟が必要であるが、特に関係性の成熟が鍵を握るとしている。それは単に個人的な心理的関係だけでなく、たとえばジェンダーギャップ指数に示されるような社会文化的な要因も絡み合っているように思われる。AさんもBさんも課題を先延ばししている。50代後半の様子を捉えて中年期危機をどう乗り切るのか見守りたい。

主な文献

白井利明・土元哲平・日潟淳子・沼田あや子・遠藤利彦(2025). 日本女性の成人期のアイデンティティはなぜ「低い」のかー発達の共同構成への主体志向アプローチ 日本発達心理学会第36回大会発表論文集, p.117.

付記

本縦断研究は、大阪教育大学倫理委員会の承認を得ており(受付番号 24025)、遠藤利彦、中村知靖、日潟淳子、徳田治子、尾崎仁美、上田裕美の各氏との共同研究である。

同性友人関係における状況に応じた切替の類型別の、孤独感（LSO）、アタッチメント・スタイル、多様性志向の比較

大谷宗啓^{1,2}・若松養亮²

(¹兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科・²滋賀大学)

Comparison of loneliness(LSO), attachment styles, and diversity orientation among the types of situational changeovers in same-gender friendships.

Munehiro OHTANI^{1,2}, Yosuke WAKAMATSU²

(¹The Joint Graduate School (Ph. D. Program) in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education ²Shiga University)

1. 問題と目的

同性友人関係において状況に応じて関係対象（友人）を切り替える「対象切替」と自己のあり方を切り替える「自己切替」の高低を組み合わせた、不使用型・対象切替偏用型・自己切替偏用型・両用型の「切替4類型」では、対象切替偏用型・自己切替偏用型に比べて不使用型・両用型の発達主題得点が高い（大谷他, 2024）。但し不使用型は人間の個別性の自覚が弱いナイーブな孤独感を示すことに注意が必要と考えられる（大谷, 2024）。大谷（2024）の回答者は大学生のみであったが、本報告では大学生・30歳代・50歳代・70歳代を回答者として、切替4類型と孤独感、アタッチメント・スタイル、多様性志向の関連を検討する。

2. 方法

調査の概要 滋賀大学研究倫理委員会の許可（承認番号: B240009）を得て、2024年12月から2025年1月、調査会社の登録モニターである大学生・30歳代・50歳代・70歳代×男・女の8群各400名にweb調査を実施した。友人数を0名と答えた者と、同一選択肢の反復、超長時間回答・超短時間回答（江利川・山田, 2015）が見られた者を除外後、最少人数の30歳代男性に揃えて8群各193名を乱数生成により抽出し分析対象とした。

調査の内容 紙幅の制約から本報告に用いた変数のみを以下に記す。本報告の調査データは大谷・若松（2025）と同一であり、尺度構成については大谷・若松（2025）で先行して検討し発表した。

状況に応じた切替：状況に応じた切替尺度多年齢対応版（SCSM:大谷・若松, 2025）の対象切替4項目（例「どこに何をしに行くかによって、最初に誘う友人は違う」）と自己切替6項目（例「どんな友人と一緒にいるかによって、自分のキャラが変わる」）。「あてはまる」（5点）～「あてはまらない」（1点）の5件法で回答を求めた。

孤独感：LSO（落合, 1983）の内、先行研究（e.g. 小林, 2006; 大谷, 2024）で除外された項目12と項目13を除外後の、LSO-U（人間の理解・共感の可能性についての感じ（考え）方）9項目と、LSO-E（自己（人間）の個別性の自覚）5項目。原典通り「はい」（+2点）～「いいえ」（-2点）の5件法で回答を求めた。

アタッチメント・スタイル：児童版 ECR-RS-GO（中尾, 2018）の不安3項目と、回避6項目。項目文中の「人」に「友人」を代入して用いた。原典通り「あてはまる」（4点）～「あてはまらない」（1点）の4件法で回答を求めた。

多様性志向：「色々なタイプの友人と付き合いたい」の単項目。「あてはまる」（5点）～「あてはまらない」（1点）の5件法で回答を求めた。

3. 結果

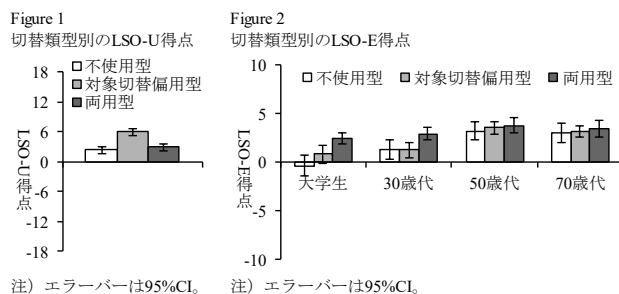
切替4類型の人数分布 落合（1983）に倣い、下位尺度得点の少なくとも一方が中性値である者を分類不能とした上で類型化した。年齢層・性別の切替4類型の人数分布は、不使用型 13.0～20.2%、対象切替偏用型 13.5～60.6%、自己切替偏用型 1.0

～6.2%, 両用型 16.6～46.6%, 分類不能 6.7～21.8% であり, 先行研究 (大谷, 2024; 大谷他, 2024) に比べて自己切替偏用型が少なく対象切替偏用型が多かった。年齢層・性別の人数が極端に少ない自己切替偏用型は以降の分析から除外した。

切替類型間の比較 分類不能と自己切替偏用型を除く3類型×年齢層×性の被験者間3要因分散分析を, 以下の各指標を従属変数として行った。

LSO-U 切替類型の主効果が有意であり ($F(2,1209)=36.01, p<.001$), 多重比較 (Holm 法, 以下も同じ) の結果, 不使用型・両用型<対象切替偏用型の差が有意であった。また, 性の主効果が有意であった ($F(1,1209)=5.70, p=.017$, 男性<女性)。切替類型別の平均値を Figure 1 に示す。

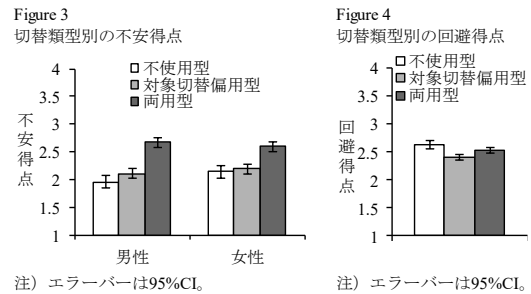
LSO-E 切替類型×年齢層の交互作用が有意であり ($F(6,1209)=2.14, p=.046$), 大学生と30歳代で不使用型・対象切替偏用型<両用型, 不使用型で大学生<30歳代<50歳代・70歳代, 対象切替偏用型で大学生・30歳代<50歳代・70歳代の差が有意であった。また, 性の主効果が有意であった ($F(1,1209)=13.52, p<.001$, 男性<女性)。切替類型×年齢層別の平均値を Figure 2 に示す。



不安 切替類型×性の交互作用が有意であり ($F(2,1209)=3.26, p=.039$), 男性で不使用型<対象切替偏用型<両用型, 女性で不使用型・対象切替偏用型<両用型, 不使用型で男性<女性の差が有意であった。また, 年齢層の主効果が有意であり ($F(3,1209)=17.55, p<.001$), 70歳代<30歳代・50歳代<大学生の差が有意であった。切替類型×性別の平均値を Figure 3 に示す。

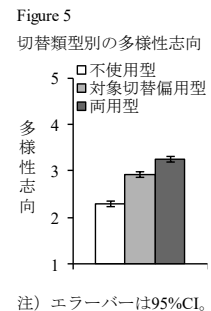
回避 切替類型の主効果が有意であり ($F(2,1209)=12.18, p<.001$), 対象切替偏用型<両用型<不使用型の差が有意であった。また, 年齢層の主効果が有意であり ($F(3,1209)=4.19,$

$p=.006$), 大学生<50歳代の差が有意であった。切替類型別の平均値を Figure 4 に示す。



多様性志向 切替類型の主効果が有意であり

($F(2,1209)=60.76, p<.001$), 不使用型<対象切替偏用型<両用型の差が有意であった。また, 性の主効果が有意であった ($F(1,1209)=15.44, p<.001$, 女性<男性)。切替類型別の平均値を Figure 5 に示す。



4. 考察

孤独感の比較 LSO-U は全群で中性値を上回った。LSO-E は大学生では大谷 (2024) の結果を再現した。但し高年齢層では切替類型間の差は見られず, 両用型では大学生も高年齢層と同等に高い得点であり年齢層差は見られない。これらは, 不使用型の大学生はナイーブな, 両用型の大学生は成人的な孤独感を持つこと, その関連は大学生または大学生以前に限られることを示している。

各類型の特徴 平均値と中性値の関係から見て, 不使用型は不安が低く回避が高い拒絶的な特徴と多様性志向の低さを, 対象切替偏用型は不安と回避が低い安定的な特徴を, 両用型は不安の高さと多様性志向の高さを示した。それらの特徴は年齢層・性にかかわらず一貫していた。

文献

- 大谷 宗啓 (2024). 日心第 88 回, p.892.
 大谷 宗啓・若松 養亮 (2025). 日心第 89 回, 3C-072-PO
 大谷 宗啓・渡部 雅之・若松 養亮 (2024). 青年心理学研究, 36(1), 5-29. https://doi.org/10.20688/jsyap.36.1_5
 (注記) 結果の詳細は当日資料として以下の URL に掲載予定である。 <https://re2.sakura.ne.jp/jyap33rd.html>

青年の「キャラ」に対する意味づけによる友人関係と自己意識 —「外キャラ」「内キャラ」の観点から—

藤野遼平¹

(¹ 大阪大学大学院人間科学研究科)

Self-Awareness and Friendship Relationships Based on Meaning Attributed to Youthful 'Characters'

—From the Perspective of 'External Characters' and 'Internal Characters'—

Ryohei FUJINO¹

(¹ Graduate School of Human Science, Osaka University)

1. 問題と目的

現代の青年期の友人関係においては「キャラ」という概念を用いたコミュニケーションが散見されている。キャラという言葉は1999年以降に青年の友人関係において現れ始め、現代の若者においては、状況や属する集団での対人関係に応じて複数の「キャラ」が振舞い分けられているとされる。キャラは「小集団内での個人に割り振られた役割や、関係依存的な仮の自分らしさ（千島・村上, 2015）」と定義され、キャラには「状況に基づく自己」という意味が内包されている。

しかし土井（2009）は、自分自身の中の自己イメージとしての「内キャラ」と、周囲の状況に適応する形で演技的に振る舞われる「外キャラ」を区別して提唱している。先行研究においては、土井（2009）における、対人的なキャラである「外キャラ」をキャラとして扱っていたが、回答者の中にはキャラに対して異なる認識で回答をしていた者もいた可能性が考えられる。そのため、まず前提として青年がキャラをどのようなものとして捉えているのかという意味づけを明らかにする必要がある。また、キャラを振る舞うことにはメリットやデメリットがあり、それによる葛藤が生じることが明らかになっているが、キャラに対する認識によって友人関係様式に違いはあるのか、またそれにより自己意識にも差異が見られるのかについては検討されていない。

そのため本研究では、現代を生きる青年がキャラをどのように意味づけており、それによって友人関係様式や自己意識に差異は見られるかを検討することを目的とする。

2. 方法

調査方法 本調査では対象となる青年のナラティブに注目し分析を行う。ナラティブ分析では個別事例に見られる主観的意味の世界を理解することを目的としている。そのためキャラをどのように自己内で意味づけているか、またキャラによる葛藤についてどのように意味づけているかを個別具体的に分析できるナラティブ分析が本調査には適していると思われる。その際、分析する被験者の語りを決定するにおいては合目的的サンプリングを採用する。合目的的サンプリングとは比較的少数のサンプルを意図的に選択して深く研究することを指し、語り手によって語られたことや、出来事や経験についての報告に着目するナラティブ分析におけるテーマ分析の手法においてよく使用されるサンプリング手法である。本調査では平井（2007）による内容分析を用いてサンプリングする事例を決定する。内容分析ではテキストデータを切片化せず重要な表現・内容を抽出し、類似する内容の抽象化をして概念化とカテゴリー名の付与を行う。なお、調査は著者の所属機関に設置された研究倫理委員会の承認を得て実施された。

調査対象者 関西圏の国立大学生10名（男性6名、女性4名、平均年齢20.50±2.50歳）を分析対象とした。

調査内容 千島・村上（2015）を参考に、キャラの有無と種類について尋ねた。次に、キャラがある者となない者に分けて作成したインタビューガイドに基づき半構造化インタビューを行った。インタビューの実施時間は1人につき30～60分程度であった。

3. 結果

内容分析の結果得られた概念とカテゴリー、また各概念に対するインタビュー協力者の該当の有無を Table1 にまとめた。そのうえで本調査においては、「外キャラ」「内キャラ」そして「キャラ無し」の特徴を、カテゴリー重複せずに持っている者を各カテゴリーを代表する者とし、「外キャラ」として H 氏、「内キャラ」として E 氏、「キャラのない者」として J 氏を取り上げた。

4. 考察

友人関係における比較 キャラを周囲の状況に適応するために演技的に振舞う「外キャラ」として捉えている場合、友人関係では、集団に属し楽しさを求めて群れの的に友人と一緒にしようとするような特徴が見られた。このような友人関係スタイルの者は自尊感情が高いとされている一方で、他者からの視線に敏感で安定した自尊感情を持ちにくいとされる。また、H 氏からは忙しいときやしんどい時にまでいじられたりするとよりしんどくなるという語りも得られ、「外キャラ」を振舞い続けることはキャラを演じることによる精神的疲労を引き起こしうると考えられた。一方で、ゆるぎない自己イメージである「内キャラ」として自身のキャラを捉えている場合は、対人関係における親密さを避けようとする特徴が見られた。

また瀬沼（2007）は、グループでキャラが被ることは自らの居場所がなくなるように感じられるため忌避されると指摘したが、本調査では、キャラを「外キャラ」として捉えている者はキャラ被りに忌避感を抱くことが示された一方で、「内キャラ」として捉えている場合にはキャラ被りに対して忌避感を抱いていないことが示された。

自己意識における比較 「外キャラ」としてキャラを振舞っている者は、自己を一貫したものと捉えず、場面によって異なる自分が現れるような多元化した自己を認識していた。「外キャラ」のメリットとしては、状況に応じて自己を切り替えることにより、交友関係を広げ良好な友人関係を築くことができるとされている一方で、状況に応じて様々な自己を振舞い分けられることが自己イメージを定めることを妨げ、アイデンティティ拡散の様相を示しやすいとされている。また H 氏の語りより、自分のキャラがひとつに縛られることはキャラによるしんどさを引き起こすことが示唆された。

その一方、「内キャラ」においては自己を一元的で固定化された、生来一貫したものと捉えている。「内キャラ」のメリットとしては、目標とするような価値観や理想像がなくなり流動化する現代において、自己の準拠点として存在することにより存在論的な不安を軽減するとされている（土井，2009）。その一方、「内キャラ」のデメリットとして、「内キャラ」が絶対変えられない自己の性質といった宿命主義を導くとされており、E 氏からも同様の語りが得られた。

文献

- 千島雄太・村上達也（2015）現代青年における“キャラ”を介した友人関係の実態と友人関係満足感の関連—“キャラ”に対する考え方を中心に—。青年心理学研究，26，129-146。
- 土井隆義（2009）．キャラ化する／される子どもたち—排除型社会における新たな人間像—。岩波書店

Table1 生成された概念・カテゴリーと調査協力者における各概念の該当の有無

概念名	定義	協力者									
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
内キャラ	自身の性格によるキャラの定義	○	○		○	○	○	○		○	
	自己の本来感	○	○		○	○	○				
外キャラ	他者からの認識	○	○	○	○		○	○	○	○	
	外見による決定				○						
	周囲からの定着	○		○	○		○		○	○	
	関係性の中の役割									○	
キャラ無し	役割の拒否										○
	キャラが想起できない		○								○
	集団への不参加		○								○
	心理的距離		○								○

「人道問題に人道的解決なし」 —緒方貞子の信念と実践をめぐる伝記分析—

伴野崇生¹

(¹慶應義塾大学)

“No Humanitarian Solution to Humanitarian Problems”
: Biography Analysis of Sadako Ogata's Beliefs and Practices

Takao TOMONO¹

(¹Keio University)

1. 問題と目的

本発表は、日本人初の国連難民高等弁務官・緒方貞子（1927-2019）の生涯を、伝記分析（大野 1998）によって検討する。緒方はしばしば『「人道問題に人道的解決なし」』という私の発言がよく引用される」と前置きした上で、「難民問題は本質的には政治問題であり...人道行動は政治行動にとって代わることは決してできない」と明言する。

本発表は、この命題がどう形成され、いかなる実践によって支えられ、またどのような制度改革へ接続されたのか、探究することを目的とする。

2. 方法——伝記分析

伝記分析とは、エリクソンの心理歴史学に連なるアイデンティティ研究の質的方法である。伝記という公共性の高い史資料（本人の言動・周辺証言・公的記録など）を歴史学並みの史料批判で点検しつつ、一人の生涯全体を通して心的過程の配置（パターン）を読み取り、複数事例の比較から心理-社会的／心理-歴史的理解へと普遍化を図るアプローチである。数量的手法が無作為抽出の「平均像」を記述するのに対し、伝記分析は「典型」をめざす（大野 1998）。

3. 結果

3.1 クルド難民危機 ——「線」を「地帯」に

湾岸戦争直後、トルコが越境庇護を拒むなかで、UNHCR 内部は「本来、国境を越えた者のみが難民である」という法理と「それでも保護しなければならない」という現実のあいだで揺れた。緒方

は「国境の概念を『線』から拡大して『地帯』にとらえ、トルコ側から越境して、国境周辺にある難民を救済することが必要」と判断した（緒方 2017）。この決断は、政治・軍との連携（安全地帯、多国籍軍の役割）を前提にした人道活動の再設計であり、まさに「人道問題に人道的解決なし」であった。

3.2 サラエボ空輸——人道を「見える化」する

停戦不在の市街戦下で始まった空輸は、「その後3年半、のべ1万2,000回...約16万トン」に及び、市民の命綱となった（東野 2003）。緒方は空輸開始5日後に現地入りした。それを第三者は「国際社会はサラエボを見殺しにしない...というシンボルが空輸だった」（黒田 2002）。緒方自身、軍との共同司令部として「オフィスに軍人がいることに違和感」を覚えながらも「慣れるのに時間はかからなかった」（東野 2003）。

3.3 ルワンダ——原則と現実の裂け目に立つ

ジェノサイド後、キャンプに旧戦闘員が混在する事態に直面し、緒方は「旧戦闘員も一緒に援助せざるをえなかった」と回想する。「人道活動の原則からはずれると批判を受けることになった」という自己言及は、シビリアン性の確保という原則と、人命保護の最小化という現実のあいだで為された選択の苦渋さを示す（緒方 2017）。

矛盾を人道だけで解けない以上、政治・治安（武装解除・保護）の関与を含む解決が不可欠であるという命題へとつながっていく。

3.4 制度的レジリエンス——初動の「速度と質」

イラク北部の人道活動は、UNHCRの実務を刷新した。緒方は「緊急対応資金を1,000万ドルから2,000万ドルに引き上げ……緊急救援物資の備蓄」を行なう（緒方2006）。聞き書きでも同趣旨の回想が続き、「初動態勢…最初期の対応こそが一番重要」と強調する（緒方2020）。

3.5 「怒り」と公共性——援助停止の判断

バルカンでの援助停止判断をめぐり、緒方は「私はなにも大統領や政府のために物を送っているのではなく、市民のために送っているんです…あれは私の怒りでした」と述べた（黒田2002）。この怒りは、感情の爆発ではなく規範（人命・尊厳）を侵す妨害に対する対処原理として作用している。後に「人道支援は紛争解決へのプロセスなしには続けられない」と総括する（緒方2020）。

4. 考察

「人道問題に人道的解決なし」という命題は、①基礎的信頼を土台に他者と状況を人間として受けとめる姿勢、②規範や役割からの心理的離乳を経て現場・政治・軍・法を横断的に結び直す判断様式、③逆境を推進力へと変換する、レジリエンスの三つの心理力動が相互に噛み合うときに実質化する規範命題である。緒方は「現場を見るということは、人間と知り合うということでしょう」と繰り返し述べ、他者を抽象化せずに把握する姿勢を軸に据えた（小山2014）。この「人間への焦点化」は、異質性を尊重する語りと結びつき、青年心理学でいう一般化他者への信頼に近似する対人枠組みを作動させていると解釈できる。すなわち、基礎的信頼は単なる楽観ではなく、尊厳の感受を通じて他者の文脈に自己を結び付ける認知-情動の姿勢であり、その結果、判断は「まず原則は？」よりも「いま、この状況は？」へと自然に配列し直される（東野2003）。

レジリエンスは、逆境を反跳力へ転化する情動-行動の規則性として二層で現れる。第一に情動レベルでは、緒方は人間の苦難に触れるたびに沸き上がる「怒り」を原動力と明言する（東野2003）。

第二に制度レベルでは、この情動が単発の決断で終わらず、初動重視の仕組み（緊急資金拡充／EPRO／備蓄／優先派遣）を設計・埋め込み、組織の回復力の慣性へとつながる（緒方2006、2020）。ここで見られるのは、情動の持続化→手続き化→制度化というレジリエンスの層化である。

以上を踏まえると、「人道問題に人道的解決なし」は、人道の無力宣言ではない。むしろ、人道（保護）を政治・軍・法・開発の媒介と触媒へと位置づけ直す発達の到達点であり（東野2003）、クルドの「線→地帯」、サラエボの軍との共同、援助停止という境界画定、そして初動の制度化という一連の実践が、この命題の心理学的成立条件を裏づけているのである。

文献

- 緒方貞子（2006）『紛争と難民 ——緒方貞子の回想』集英社
 緒方貞子（2017）『私の仕事 ——国連難民高等弁務官の10年と平和の構築』朝日新聞出版
 緒方貞子（著）野林健・納家政嗣（編）（2020）『聞き書 緒方貞子回顧録』岩波書店
 黒田龍彦（2002）『緒方貞子という生き方』ベストセラーズ
 東野真（2003）『緒方貞子 ——難民支援の現場から』集英社
 小山靖史（2014）『緒方貞子 戦争が終わらないこの世界で』NHK出版

青年心理学はいかにして青年の声を聴くのか

—新聞記事の分析を通じて—

都筑学¹・齋藤信²・堀尾良弘³・橋本広信⁴・峰尾菜生子⁵

(¹中央大学・²鈴鹿大学・³愛知県立大学・⁴群馬医療福祉大学・⁵岐阜大学)

An approach for understanding adolescent voices in adolescent psychology: Analysis of newspaper articles

Manabu TSUZUKI¹, Makoto SAITOH², Yoshihiro HORIO³, Hironobu HASHIMOTO⁴, Naoko MINEO⁵

¹Chuo University, ²Suzuka University, ³Aich Prefectural University,

⁴Gunma University of Health and Welfare, ⁵Gifu University

1. 問題と目的

本発表では、青年の声を聴くプロジェクト (PLAV: Project for Listening to Adolescent Voices) の共同研究の成果を報告する。PLAV は、2024 年の本学会第 32 回大会 における「広報・ニューズレター編集委員会企画シンポジウム 青年と戦争・平和：歴史的・社会的な観点から」に参加し、フロアから発言した都筑が、大会後に登壇者 4 人に送信したメールが契機となって始まった。

同シンポジウムで話題となったトピックの 1 つは、研究者が自らの授業を通じて学生と対話しながら、学生の声을聴くという堀尾の授業実践だった。保育や幼児教育において、子どもの声を聴く実践や研究が発展してきたように、青年心理学も青年の声を聴く実践や研究に積極的に取り組む必要があるのではないか。このような都筑の問いかけに対して、登壇者が応え、その後のメールの意見交換の積み重ねによって、今回の発表の元になっている「新聞の投書欄や相談コーナーに掲載されている青年の投稿記事を分析する」というアイデアがまとまった。

言うまでもなく、新聞の投稿記事は、青年の声の全てではない。新聞という媒体の性質上、他者に読まれることが前提となって書かれたものであり、また、新聞社によって取捨選択されたものでもある。その一方で、新聞には全国紙や地方紙など多くの種類があり、研究者が分担することで、幅広く投稿記事を集められるという利点もある。また、新聞紙上の投書や相談を読むことによって、研究者が日頃は気づかなかった新たな気づきを得

ることもできるかもしれない。

以上のような経緯と問題意識のもとに、PLAV の活動は開始された。

本発表では、PLAV が収集した 234 本の投稿記事の分析結果を報告して、次の点を明らかにする。

1. 記事に現れた青年の声の全体的な特徴
2. 年齢による青年の声の差異

2. 方法

分析対象の新聞と掲載欄 東京新聞（発言，人生相談），読売新聞（人生案内，発言小町），中日新聞（発言），朝日新聞（声）

記事が掲載された期間 2024 年 11 月 22 日～2025 年 7 月 31 日

投稿者の年齢 12 歳～37 歳 10 代 187 人，20 代 42 人，30 代 5 人

投稿者の学歴・職歴 中学生 78 人，高校生 87 人，大学生 44 人，社会人 17 人，その他 4 人，未記入 4 人

分析対象となった記事 東京新聞 111 本，読売新聞 36 本，中日新聞 44 本，朝日新聞 43 本，計 234 本

記事の抽出手順 新聞の該当欄に目を通し，10～30 代の投稿者の記事の中から，投稿者個人の意見が含まれていると判断された記事を選択した。

分析に至るまでのデータ整理の手順 ①新聞に掲載された記事をスキャンして文字起こしするか，あるいは新聞のデジタル版から直接に文字情報を入手するか，いずれかの手法でテキストデータを得た。②Google フォームを用いて，次の情報を入力して記事のデータベースを作成した。新聞

名、掲載年月日、掲載欄名、投稿者氏名、学校種・職業など、年齢、居住地域、記事タイトル、記事本文、記入者氏名、特記事項の11項目 ③データベースをExcelファイル形式で保存し、Googleドライブで共有した。④記事タイトルおよび記事本文のテキストデータを分析するために、語の修正、語の統一をおこなった。

3. 結果

本発表では記事本文について扱う。分析にはKH Coderを用いることとした。

記事本文のコーディング

234本の各記事が1個ずつのコードに入るようにして9個のコードを作成した。以下にコード名と含まれる記事の例を示す。①学校教育・子ども(25本・10.68%) 「校則の見直し」「お弁当と相対的貧困」 ②メディア(32本・13.68%) 「SNSの便利さに伴う問題」「自身で書店を開く試み」 ③社会・文化(22本・9.4%) 「気候変動の影響」「原発推進への違和感」 ④家庭・家族(13本・5.56%) 「家族とのかけがえのない時間」「両親から怒られないためのアドバイスの要請」 ⑤関係性・自己像(26本・11.11%) 「友達関係で損ばかりしていること」「他人と比べて自己肯定感を下げってしまうこと」 ⑥働く・成人(33本・14.10%) 「働く大変さとやりがい」「成人年齢18歳の責任感」 ⑦政治参加・関心(25本・10.68%) 「選挙権を得たら投票したい」「内閣・政治への不安」

⑧ジェンダー・多様性(21本・8.97%) 「ジェンダー平等の実現」「LGBTQの知識」 ⑨戦争平和・国際(37件・15.81%) 「現在の世界情勢と戦争への問題意識」「特攻兵の遺書」

記事本文のコーディングと学校種・職業などの関連

記事本文のコーディングと投稿者の学校種・職業などの関連をFigure 1に示す。

4. 考察

本発表では新聞記事となった青年の声について分析した。

記事に現れた青年の声の全体的な特徴 青年の声は9個のコードに分類された。これらについては「個人志向と社会志向」「発言・主張と相談・悩み」などの要素が共存していると思われる。

年齢による青年の声の差異 Figure 1に示した通り、コードと学校種・職業には関連が想定される。中学生・高校生では社会への広い関心、大学生(短大)、社会人では現実生活を通じた社会への関心が考えられる。

本研究の成果と今後の課題 本発表から新聞の投稿記事は青年が社会に伝えたいことを知るための手段の1つであることが示された。前述の通り、それらの理解には留意すべき点もある。しかしながら、青年の置かれた時代背景や社会的文脈を反映したものと考えられるため、有効な研究データとなることが期待される。

付記 本発表の準備並びに原稿執筆に際しては、研究倫理について十分に検討し、配慮して研究を進めた。

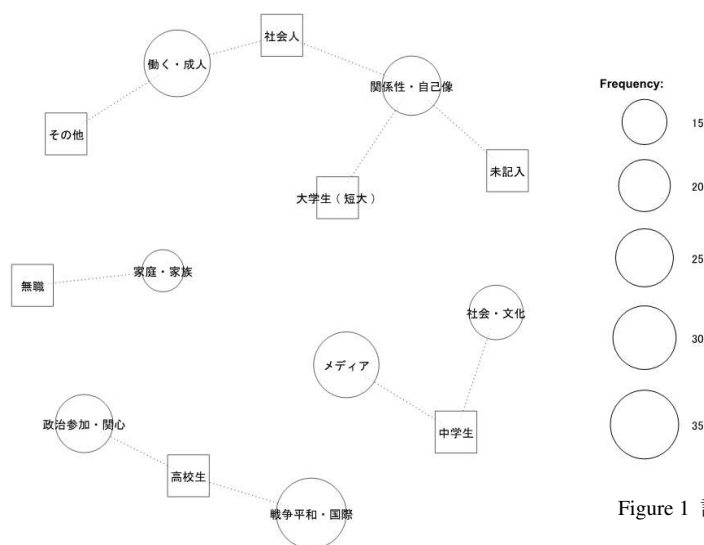


Figure 1 記事本文のコーディングと学校種・職業などの共起ネットワーク図

ポスター発表リスト

在席責任時間 奇数番号 9:15～10:00 偶数番号 10:00～10:45

P-01	異文化環境における在日中国人留学生の過剰適応 —対人関係に焦点を当てて—	万珽(立命館大学大学院人間科学研究科) 吉沅洪(立命館大学)
P-02	自己開示の深さおよび適切さと本来感の関連の検討	松澤美奈(昭和女子大学大学院生活機構研究科) 櫛原良太(昭和女子大学)
P-03	大学生における自閉スペクトラム症傾向がアイデンティティ確立に及ぼす影響 —カモフラージュに着目して—	村井史香(北星学園大学社会福祉学部) 村上茉生(北星学園大学社会福祉学部)
P-04	アイデンティティと“美・繊細さ”との関連	宗田直子(福山大学)
P-05	何を買ったときに「大人になった」と感じるのか？ —購入した商品・サービスとその価格—	渡辺伸子(東北公益文科大学)
P-06	日々への感謝と他者への感謝の関連	今泉里香(早稲田大学大学院文学研究科) 小塩真司(早稲田大学文学学術院)
P-07	青年期における境界性パーソナリティ特性と孤独感の関連 —青年期対象関係を介した因果モデル分析—	田中啓孝(佛教大学教育学部臨床心理学科)
P-08	オンライン就職面接における注目対象の違いが不安に与える影響	今野優香理(明星大学大学院心理学研究科) 藤井靖(明星大学心理学部/国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所)
P-09	「推し」の存在の意味とアイデンティティとの関連	三好昭子(日本女子体育大学)
P-10	中学生において親子関係・友だち関係・教師との関係が学校とのつながり感を介して 孤独感・生活満足度に与える影響—学年差に着目して—	中尾達馬(琉球大学)
P-11	現代青年のアパシー傾向と解離傾向との関連に関する研究 —親からの期待に着目して—	渡部智行(広島文教大学人間科学部心理学科)
P-12	青年期における親子の共同的関与(Joint Media Engagement) —アプリケーションを媒介としたコミュニケーションの探索的研究—	信太寿理(愛知学泉大学)
P-13	社会規定的完全主義と対人依存欲求の関連 —他者信頼感の調整効果に着目して—	松崎美奈子(早稲田大学文学研究科)
P-14	ストレス状況におけるネガティブな感情の分化の種類と適応戦略の関係	岡村百香(京都大学 大学院教育学研究科) 高橋雄介(京都大学 大学院教育学研究科)
P-15	大学生における過去自己連続性とアイデンティティの感覚の経時的関係	浅山慧(筑波大学/北海道教育大学) 外山美樹(筑波大学)
P-16	両親及び友人に対する過剰適応と 母親のアタッチメント機能および自律性支援に関する縦断的検討	風間惇希(三重大学)
P-17	歯科矯正における成人日本女性患者の心理的特徴	鈴木光海(東北大学大学院教育学研究科)
P-18	成人期前期におけるひとりていられる能力の検討	吉田加代子(立正大学心理学部)
P-19	他者の経験から学ぶ態度を測定する試み—尺度作成の初期検討—	溝口侑(関西大学)
P-20	Time-Efficient Viewing (TEV)と時間的展望との関連	三田遥真(早稲田大学大学院文学研究科) 小塩真司(早稲田大学文学学術院)
P-21	青年期後期から成人期初期における Big Five パーソナリティ特性と健康習慣の関連	松木太郎(広島国際大学) 山岡香織(広島国際大学大学院健康科学研究科) 田中秀樹(広島国際大学)

異文化環境における在日中国人留学生の過剰適応 —対人関係に焦点を当てて—

万琰¹・吉沅洪²

(¹立命館大学大学院人間科学研究科・²立命館大学)

Over-Adaptation among Chinese International Students in Japan: Focusing on Interpersonal Relationships

Ting WAN¹, Yuanhong Ji²

(¹Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University ²Ritsumeikan University)

1. 問題と目的

「環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすることであり、内的な欲求を無理に抑圧してでも、外的な期待や要求に応える努力を行う」過剰適応は、不安、抑うつ、不登校傾向などと関連しており、心身の健康や生活状態に影響を及ぼすリスク要因であると考えられる（石津, 2006; 石津・安保, 2008; 益子, 2009）。

過剰適応はよく日本文化に根ざした概念と理解されているが、近年、中国人学生においても自己の内的欲求を抑え、他者の欲望や要求を優先して満たそうとする傾向が示されている（王, 2021）。

在日中国留学生は、「良い子」としての養育や順応などを重視する文化的背景による影響に加えて、異文化適応の過程で、個人内外で多様な変化を経験しており、この時期には、過剰適応が問題となる可能性が高いと考えられる。従って、過剰適応が心身の健康や生活状態に及ぼす負の影響を踏まえ、中国人留学生の異文化生活における過剰適応課題に注目する必要がある。

さらに、先行研究により、対人関係が異文化適応に重要であり（高井, 1989）、過剰適応に関する研究においても、関係性ごとによるその様態が違ふことが検証された（風間・平石, 2018）。

以上を踏まえ、本研究は在日中国留学生を対象に、異文化生活における過剰適応に焦点を当てる。特に、留学生活にとって重要な対人関係面に着目し、過剰適応の違いを検討することを目的とした。本研究を通じて、留学生の異文化適応に対する理解を深め、留学生支援の在り方に示唆を与え、留学生活の質の向上につながることを期待される。

2. 方法

調査協力者は18歳以上の在日中国人留学生である。事前に過剰適応尺度（石津, 2006）を含む質問紙調査を実施し、得点の平均値+0.5標準偏差を基準として高群を抽出した。その結果、男性1名、女性7名の計8名（ $Mage=25.5$ 、 $SD=1.58$ ）が本調査に参加した。調査では一対一の半構造化インタビューを実施し、毎回の所要時間は約90分であった。インタビュー内容は、(1) 留学生活に関わる人間関係の構成（モレノによるソシオグラムで図式化してもらった）、(2) 関係性ごとに表れた過剰適応的行動、(3) その影響、(4) 改善に関する考え、を中心に尋ねた。

インタビュー内容を逐語録にし、質的データから主題（テーマ）を見出す体系的なプロセスであるテーマ分析を用いて、質的分析を行った。

本研究は立命館大学倫理審査委員会の承認を受けており（承認番号：衣笠-人-2024-33）、協力者全員からインフォームド・コンセントを取得した。

3. 結果

Table 1 言及された過剰適応的行動が生じる人間関係の分類

分類	n=	ポジティブ関係	ネガティブ関係	ニュートラル関係
先生	10	6	3	1
学生同士	9	1	3	5
仕事関連	6	2	3	1
友達	6	3	1	2
家族	4	3	0	1
知り合い	3	2	1	0
恋人	1	0	0	1

まず、逐語録を踏まえ、描かれた人間関係を整理した結果、多様な関係には過剰適応的行動を示していることが明らかとなった（Table 1）。

さらに、作成した逐語録を、テーマ分析を参考に、①起因、②その影響、③改善に関する考え、の三つの大テーマが初歩的に抽出された。

協力者の語りから、過剰適応的行動は、問題解決のための方略として位置づけられていると考えられる。多くの協力者は、関係維持や衝突回避のために自分の感情を抑え、相手に迎合する行動をとっていると語った。また、教師との関係や職場関係など権力差を含む上下関係では、相手を「目標達成に重要な存在」と捉え、過剰適応的行動が生じやすいことが示唆された。さらに、日本社会文化による影響を受け、より良く環境に溶け込むため、過剰適応傾向を強化していると指摘された。

その影響について、肯定的な側面として先行研究が指摘された適応の促進効果に加え、自己犠牲が他者の幸せにつながる達成感が語られた。一方、それによる身体的疲労や感情的負担といった負の影響も見られた。さらに、負の影響の蓄積が関係や適応の放棄につながることを示された。

過剰適応の改善について、一部の協力者はこれが自然な反応と捉えており、どう変えるかを考えたことがないと述べた。しかし、人間関係の可視化や過去経験の振り返りを通じて、自己理解が深まり、過剰適応に対する新たな気づきを得たことが確認された。また、表現力の向上が改善に向けた大切な要素と多くの協力者が言及した。その上、過剰適応の背景には他者評価への懸念があると示されており、理解され受け入れられる支持的な人間関係が、傾向の軽減に重要であると示唆された。加えて、改善意欲には関係性の特徴による差異が見られ、教師のように期限付きで上下の権力関係を伴う場合には、個人目標の達成を優先し、変化することを望まない一方、学生同士のようにより対等で、変化の代償が受け入れ可能な関係においては、改善したい意向が語られた。

4. 考察

本研究から、留学生は先行研究で指摘された関係性に限らず、多様な人間関係において過剰適応を示すことが明らかになった。留学生生活は学校場面のみならず、社会理解や生活資金の獲得を目的

とした職場環境なども含めて多面的であり、その中で多様な人間関係が形成されている。本研究では学校場面に次いで職場における過剰適応が多く言及されていた。また、関係の親密度や期限性、関係の意義などは、過剰適応の生起や影響、改善に関する考え方にも影響を及ぼしていた。従って、留学生生活における過剰適応を理解するためには、より広範な人間関係を視野に入れ、関係性の視点から分析することが不可欠だと考えられる。

また、過剰適応は文化的環境の影響を受けて強化され、多くの留学生がこれを「環境適応や目標達成のための必要な犠牲」として「合理化」する一方で、心身への負担となり、留学生生活の質を損なうリスクが示された。これは留学生の「自己」の犠牲を示すと同時に、社会的環境の重要性も示された。今後の留学支援においては、留学生の自己理解や自己表現を促進するとともに、理解と受容に基づく支持的な人間関係の構築を重視する必要がある。これにより、過剰適応傾向を軽減し、留学生生活の質の向上が期待される。

文献

- 石津憲一郎(2006).過剰適応尺度作成の試み.日本カウンセリング学会第39回大会発表論文集,137.
- 石津憲一郎・安保英勇(2008).中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響.教育心理学研究,56,23-31.
- 風間惇希・平石賢二(2018).青年期前期における過剰適応の類型化に関する検討.青年心理学研究,30(1),1-23.
- 益子洋人(2009).高校生の過剰適応傾向と、抑うつ、強迫、対人恐怖心性、不登校傾向との関連:高等学校2校の調査から.学校メンタルヘルス,12(1),69-76.
- 高井次郎(1989).在日外国人留学生の適応研究の総括.名古屋大学教育学部紀要.教育心理学科,36,139-147.
- 王晓.(2021).中学生过剩适应的中日比较研究.宁波大学学报(教育科学版),43(2).

自己開示の深さおよび適切さと本来感の関連の検討

松澤美奈¹・榊原良太²

(¹ 昭和女子大学大学院生活機構研究科・² 昭和女子大学)

The Depth of Self-Disclosure and Adequate Self-Disclosure in Relation to Sense of Authenticity

Mina MATSUZAWA¹, Ryota SAKAKIBARA²

(¹ Graduate School of Life and Environmental Sciences, Showa University ² Showa University)

1. 問題と目的

松澤・榊原(2024)は、本来感を高める要因についての検討を目的に、自己開示の深さの各レベルを独立変数、省察または反芻を媒介変数、本来感を従属変数とし、自己開示から省察・反芻へのパスを受容的反応もしくは拒絶的反応が調整するという、調整媒介分析を行った。その結果、自己開示は本来感を高めるが、深さのレベルが上がるほど本来感との関連が小さくなるという傾向が見られた(松澤・榊原, 2024)。その理由として、自己開示の内容が関連していると考えられる。「趣味」(自己開示の深さレベルⅠ)について話すことが本来感尺度項目にある「これが自分だ、と実感できるものがある」といった体感に繋がり、本来感との関連が大きくなったことや、レベルⅢやⅣは本来の自分として受け入れにくい、否定的に思っていることについての開示になるため、ありのままの自分として受け入れられず、本来感との関連が小さくなったことが考えられる(松澤・榊原, 2024)。

しかし、自己開示はその深さだけでなく、いかに開示するかという“適切さ”の要因も関与すると考えられる。そこで本研究では、自己開示の深さと適切さ、本来感について、まずは各変数間のシンプルな関連性を探り、その後の詳細な分析を実施するための示唆を得ることを目的とする。

2. 方法

調査方法 インターネット調査サービスであるFreeasyを利用し、オンライン調査を行った。

調査手続きと分析対象者 2025年9月に18～22歳の学生3000名を対象にしたスクリーニング調査を実施した。回答者のうち「あなたは今大学生ですか。」「仲の良い友人はいますか。」の質問に「はい」と答えた者を対象に同年9月に本調査を依頼し、400名から回答を得た。集計後、職業が「学生」でない者、サティスファイサー検出項目において指定した回答をしなかった者を除き、最終的に大学生293名(男性136名、女性157名、平均年齢20.14±1.36歳)を分析対象者とした。

倫理的配慮 本研究は、昭和女子大学倫理審査委員会の承認を受けて実施した(承認番号25-36)。調査にあたり、協力依頼をWeb上の最初のページに記載した。調査協力は任意であり、途中でやめても不利益は生じないこと、回答は匿名であり個人が特定されないこと、調査実施者の問い合わせ先等を明記し、同意を確認したうえで回答を得た。

調査内容 各尺度はそれぞれ項目をランダムイズして回答を求めた。また、(1)・(2)にはサティスファイサー検出項目を1項目ずつ含めた。

(1)自己開示の深さを測定する尺度(丹羽・丸野, 2010):自己開示の内容の深さを4つのレベルごとに測定する尺度である。レベルの浅いものから順に、「趣味(レベルⅠ)」7項目、「困難な経験(レベルⅡ)」4項目、「決定的ではない欠点や弱点(レベルⅢ)」6項目、「否定的性格や能力(レベルⅣ)」7項目の計24項目、4つの下位尺度からなり、各項目について7件法で回答を求めた。教示文は「親密な同性に対する開示状況」で提示されている文言をもとに、「以下の点について、すでに仲は良いがこれから親しくなりたいと思っている同性の友だちに対してどのくらい詳しく話すか、(1)何も話さないから(7)十分に詳しく話すの間で最もあてはまるものを選択してください」とした。

(2)適切な自己開示尺度(森脇・坂本・丹野, 2002):状況にふさわしい適切な自己開示方法について測定する尺度である。「文脈等配慮」「聞き手選択」「時間および場所選択」の3因子から構成される12項目に対し、4件法で評定を求めた。教示文は、尺度作成者に許可を取り、「普段仲の良い同性の友人(恋人を除く)に対し個人的な話を打ち明ける時のことを思い浮かべ、最もよく当てはまるものを1つだけ選択してください」とした。

(3)本来感尺度(伊藤・小玉, 2005):個人が自分らしくあると感じている全般的な感覚を測定する尺度である。本来感を感じている個人の状態を記述した7項目について、5件法で評定を求めた。教示文は、「以下にある文章は自分に対してどのように感じているのかを表したもので

す。それぞれの文章について、あなた自身がどの程度あてはまるのかを5段階からひとつずつ選んでください」とした。

3. 結果

各変数の記述統計量と α 係数、また変数間の相関係数を Table1 に示す。各変数の α 係数は .800-.910 であり、十分な信頼性を有していた。変数間の相関係数について、自己開示の深さレベル I は、レベル II・III と有意な中程度の正の相関がみられ ($r = .480, p < .01; r = .415, p < .01$)、レベル IV と有意な弱い正の相関がみられた ($r = .289, p < .01$)。自己開示の深さレベル II はレベル III・IV と有意な中程度の正の相関がみられた ($r = .690, p < .01; r = .740, p < .01$)。自己開示の深さレベル III は、レベル IV と有意な高い正の相関がみられた ($r = .829, p < .01$)。

適切な自己開示は、自己開示の深さレベル I と有意な中程度の正の相関がみられたが ($r = .407, p < .01$)、それ以外の変数とは有意な相関はみられなかった。

本来感は、自己開示の深さレベル I・II と有意な弱い正の相関がみられたが ($r = .205, p < .01; r = .305, p < .01$)、レベル III・IV および適切な自己開示とは有意な相関がみられなかった。

4. 考察

自己開示の深さは、I～IV の各レベル間で有意な相関がみられた。丹羽・丸野 (2010) では、各レベル間の距離が近いほど高い相関がみられ、距離が遠くなるほど相関が低くなるという傾向が示されており、本研究においても概ね同様の結果となった。

本来感は、自己開示の深さレベル I・II と有意な相関がみられたが、レベル III・IV とは有意な相関がみられなかった。松澤・榊原 (2024) では自己開示の深さのすべてのレベルと本来感とで有意な相関がみられており、レベル III・IV の結果が本研究と異なっていた。しかし、松澤・榊原 (2024) でもレベル III・IV は弱い相関にとどまっており、またサンプル数が本研究よりも少なかったことが影響し相関関係に違いがみられたと考えられる。

適切な自己開示は、自己開示の深さレベル I とのみ有意な相関がみられ、その他では有意な相関がみられなかった。本研究は各変数の相関関係を調べるにとどまるため、詳細な関係性について明らかにすることが今後の課題である。

文献

- 伊藤 正哉・小玉 正博 (2005). 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85.
- 松澤 美奈・榊原 良太 (2024). 自己開示と本来感の関連の検討—省察および受容的・拒絶的反応に着目した調整媒介モデル— 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 27, 39-46.
- 森脇 愛子・坂本 真士・丹野 義彦 (2002). 大学生における自己開示方法および被開示者の反応の尺度作成の試み 性格心理学研究, 11(1), 12-23.
- 丹羽 空・丸野 俊一 (2010). 自己開示の深さを測定する尺度の開発 パーソナリティ研究, 18(3), 196-209.

Table1

各変数の平均値・標準偏差・ α 係数および単純相関

	M	SD	α 係数	1	2	3	4	5	6	7
1 年齢	20.140	1.356	—	—						
2 性別	0.536	0.500	—	-.005	—					
3 レベル I	4.590	1.166	.910	.021	.011	—				
4 レベル II	3.515	1.215	.841	-.081	-.174 **	.480 **	—			
5 レベル III	3.585	1.137	.863	-.093	-.164 **	.415 **	.690 **	—		
6 レベル IV	3.416	1.202	.905	-.065	-.192 **	.289 **	.740 **	.829 **	—	
7 適切な自己開示	2.923	0.509	.851	.028	.114	.407 **	.107	.095	.074	—
8 本来感	3.040	0.726	.800	-.032	-.121 *	.205 **	.305 **	.063	.091	.089

** . 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)。

* . 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)。

大学生における自閉スペクトラム症傾向が アイデンティティ確立に及ぼす影響

—カモフラージュに着目して—

村井史香・村上茉生

(北星学園大学社会福祉学部)

The Relationship Between Autism Spectrum Disorder Traits and Identity Formation in University Students:

Focusing on Camouflaging Autistic Traits

Fumika MURAI, Mao MURAKAMI

(School of Social Welfare, Hokusei Gakuen University)

1. 問題と目的

自閉スペクトラム症（以下 ASD）は、社会的コミュニケーションや対人相互反応の困難、限定された興味・反復行動などを中核症状とする神経発達症である（American Psychiatry Association, 2013）。大学等に在籍する障害学生の約2割が発達障害であり、その約半数が ASD の診断を有する（日本学生支援機構, 2024）。また、診断に至らなくても、ASD 特性を有することで、青年期以降に深刻な心理的不適応を生じ、心理的支援を必要とする学生は少なくない（毛利, 2019）。

ASD 者の抱える困難の1つに、アイデンティティの確立の困難さが挙げられる（稲垣, 2014; 山本, 2023）。このことは、ASD 者が社会的比較を通じた自己認識に困難を有することが影響していると考えられている（Cage & Troxell-Whitman, 2019）。実際に、大学生を対象とした調査からは、ASD 特性が強い者は、個および関係性アイデンティティの両面で低い傾向が示されており（上田他, 2021）、当事者研究においても、ASD 者が定型者とは異なるルートでの自己形成を辿る可能性（山崎, 2015）や、自己意識の弱さに由来する苦しみを経験する場合があること（綾屋, 2008）が報告されている。

関連して、ASD 者のアイデンティティ確立を困難にする要因として、「camouflage（カモフラージュ）」の影響が指摘されている（Cage & Troxell-Whitman, 2019）。ASD 者はカモフラージュによって過剰に他者に合わせ、“普通に見えるよう”に振舞うことで、自分とは何かが分からな

くなり、アイデンティティの不安定さを抱えやすいと考えられる（Cage & Troxell-Whitman, 2019）。しかし、ASD 特性の強さはアイデンティティ確立を困難にすることは示されているものの、そこにはどのような要因が関わっているのかは実証的な検討がなされておらず、社会的カモフラージュの関連についても明らかになっていない。

以上の議論を踏まえ、本研究は、ASD 傾向とアイデンティティ確立との関連を検討するとともに、社会的カモフラージュが媒介要因となるかどうかを検討することを目的とする。

2. 方法

調査協力者 私立大学1校の大学生251名から調査への協力を得た。そのうち、回答に不備のあった8名を除いた243名（男性：66名、女性：176名、不明：1名）を分析対象とした。平均年齢は19.45歳（ $SD=3.00$ ）であった。

手続き 2025年7月に、質問紙調査を実施した。本調査は、北星学園大学の倫理審査の承認を受けて行われた（承認番号：25-研倫-18）。

調査項目 (1) デモグラフィック変数（年齢、性別）(2) 多次元自我同一性尺度（谷, 2001）全20項目、7件法。(3) 自閉スペクトラム指数日本語版の短縮版（AQ-J-10; Kurita, H., et al, 2005）全10項目、4件法。(4) 社会的カモフラージュ尺度 Camouflaging Autistic Traits Questionnaire（CAT-Q; Hull et al., 2019）の日本語版（CAT-Q-J; Hongo et al., 2024）全14項目、7件法。

3. 結果と考察

記述統計量 各変数の各変数の信頼性を検討したところ、ASD 指数の α 係数は .51 と十分に高い値ではなかったが、Kurita et al. (2005) においても AQ-J-10 の α 係数は .61 と報告されており、短縮版尺度の特性として内部一貫性が高くないことが知られている。本研究でも同様の傾向が認められたため、先行研究に準じて許容することとした。

続いて、アイデンティティについては、自己斉一性・連続性が.83, 対自的同一性が.83, 対他同性が.86, 心理社会的同一性が.83, カモフラージュについては、マスキングが.80, 同化が.77, 補償が.79 と十分な値を示したため、ASD 指数およびカモフラージュの各項目については加算平均、アイデンティティの各項目については先行研究に倣い、合計得点を算出した (Table 1)。

Table 1 各尺度の平均値と標準偏差

	<i>M</i>	<i>SD</i>
ASD指数	3.21	1.98
マスキング	4.72	1.27
同化	4.16	1.30
補償	3.14	1.36
自己斉一性・連続性	23.83	6.88
対自的同一性	20.72	6.88
対他同同一性	19.77	6.78
心理社会的同一性	21.12	6.29

ASD 特性とアイデンティティ確立との関連におけるカモフラージュの媒介効果の検討 ASD 特性が、カモフラージュのマスキング、同化、補償を媒介して、アイデンティティ確立の程度を低めるという仮説モデルが成立するかどうかを検討するため、カモフラージュの3因子を媒介変数とする媒介分析を行った。分析に先立って、変数間の相関を検討したところ、一部の変数において有意な関連が認められなかった (Table 2)。ただし、媒介分析の枠組みにおいては、直接効果や間接効果を同時に検討することが重要であるため、理論的観点から全ての変数をモデルに投入して分析を行った。その結果、ASD 特性は同化に正の関連を示し ($\beta = .24, p < .001$)、これを介して自己斉一性・連続性 ($\beta = -.08, 95\% \text{ CI } [-.12, -.03]$)、対自的同一性 ($\beta = -.09, 95\% \text{ CI } [-.15, -.03]$)、対他同同一性 ($\beta = -.10, 95\% \text{ CI } [-.15, -.04]$)、心理社会的同一性 ($\beta = -.10, 95\% \text{ CI } [-.16, -.04]$) をいずれも有意に低下させた。また、ASD 特性の直接効果は対他同同一性にのみ認められた ($\beta = -.12, p = .038$)。マスキングや補償を介した間接効果はいずれの側面でも有意ではなかった。

本研究の結果から、ASD 特性は、カモフラージュの同化のみを媒介して、アイデンティティの各側面に負の関連を示すことが明らかとなった。同化は、周囲に受け入れられるために自分を变え、社会的に普通とみなされるように演じる感覚を持ちながら振る舞うことを指す (Hongo et al., 2024)。したがって、ASD 特性を有する者への支援においては、過度の同化に伴う自己感の揺らぎに目を向ける視点が重要と考えられる。

Table 2 分析に使用した変数の相関

	1	2	3	4	5	6	7
1 ASD	—						
2 マスキング	-0.11 †	—					
3 同化	0.24 **	0.44 **	—				
4 補償	0.09	0.44 **	0.49 **	—			
5 自己斉一性・連続性	-0.19 **	-0.25 **	-0.47 **	-0.42 **	—		
6 対自的同一性	-0.09	-0.06	-0.31 **	-0.10	0.51 **	—	
7 対他同同一性	-0.20 **	-0.38 **	-0.54 **	-0.35 **	0.63 **	0.31 **	—
8 心理社会的同一性	-0.21 **	-0.20 **	-0.49 **	-0.31 **	0.66 **	0.58 **	0.65 **

注. ** $p < .05$, † $p < .10$

アイデンティティと“美・繊細さ”との関連

宗田直子¹

(¹ 福山大学)

Association between identity and "delicacy-charms"

Naoko SOTA¹

(¹Fukuyama University)

1. 問題と目的

アイデンティティ (Erikson, 1950 仁科訳 1977・1980) について, 「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」の両者に焦点をあてた実証研究が行われている (岡本, 1997, 2002, 2007, 2010; 宗田, 2010; Sota & Kamite, 2024; 宗田・岡本, 2005, 2013, 2023)。岡本 (2005) は「自分らしい生き方」の確認とアイデンティティについて, 化粧の意味の観点から論じている。美に対する意識は, QOL や well-being と関連があり (野澤・沢崎, 2006), 「自分らしさ」というアイデンティティ発達のテーマと大きく関わっていると考えられる。そこで本研究では, 伊藤 (1986) の“美・繊細さ”因子と「個」と「関係性」からみたアイデンティティとの関連性について, 実証的に検討する。

2. 方法

(1) 対象者 315 名 (男性 130 名, 女性 185 名)。平均年齢は男性 34.47 歳 (SD 17.58), 女性 30.85 歳 (SD 14.55), 全体 32.34 歳 (SD 15.94)。青年後期は 182 名, 平均年齢は 20.40 歳 (SD .95), 成人期は 133 名, 平均年齢は 48.68 歳 (SD 11.74)。

(2) 質問紙構成 ①フェイス項目 (性別・職業等)。②宗田・岡本 (2013) の「個としてのアイデンティティ」尺度および「関係性にもとづくアイデンティティ」尺度短縮版 (52 項目, 7 件法)。

③性役割測定尺度 (ISRS:伊藤, 1986) 単極尺度の“美” (おしゃれな, 色気のある, かわいい) と“繊細さ” (細やかな, 繊細な, 言葉遣いのていねいな) の 6 項目であった (7 件法)。実施にあたり,

プライバシー保護等の倫理的配慮に関する説明を行った。

3. 結果

(1) “美・繊細さ”の特徴

性×発達差 (青年後期・成人期) の“美・繊細さ”得点に関して, 2 要因分散分析を行ったところ, 交互作用は有意ではなかった ($F(1, 311) = .60, ns$)。発達差に主効果がみられ ($F(1, 311) = 18.86, p < .001$), 成人が青年より有意に高かった。性の主効果はみられなかった ($F(1, 311) = .27, ns$)。

(2) アイデンティティと“美・繊細さ”の関連

相関分析を行った結果を Table 1 に示した。「個としてのアイデンティティ」尺度の「自己と他者の不可侵性」下位尺度および「関係性にもとづくアイデンティティ」尺度の「相互性・相互調整」下位尺度を除いて, “美・繊細さ”と弱～中程度の有意な相関を有した ($r = .11 \sim .44$)。

(3) アイデンティティの特徴による“美・繊細さ”

「個としてのアイデンティティ」尺度および「関係性にもとづくアイデンティティ」尺度を, クラスタ分析を用いて検討したところ, 6 クラスタ (「個 (I)」 「関係性 (R)」両低位群, 「I」 「R」両極低位群, 「I」低位 「R」高位群, 「I」 「R」両高位群, 「I」 「R」両極高位群, 「I」高位 「R」低位群) が抽出された。各クラスタの“美・繊細さ”得点に関する一元配置分散分析を行ったところ, 有意差がみられた ($F(5, 309) = 8.97, p < .001$) (Table 2)。多重比較 (Tukey HSD) の結果, 特に「個 (I)」 「関係性 (R)」両高位群の“美・繊細さ”得点の高さが示された。

Table 1

「個としてのアイデンティティ」尺度得点および「関係性にもとづくアイデンティティ」尺度得点と“美・繊細さ”得点との相関係数 ($N=315$)

	“美”	“繊細さ”	“美・繊細さ”
「個としてのアイデンティティ」尺度 (6 下位尺度)			
積極的自己実現	.27***	.21***	.29***
自己と他者の不可侵性	.07	-.04	.02
不変性	.09	.10	.11*
自己斉一性・連続性 (谷, 2001)	.17**	.09	.16**
自己主張	.23***	.10	.21***
対自的同一性	.23***	.18**	.25***
「個としてのアイデンティティ」尺度合計	.25***	.15**	.25***
「関係性にもとづくアイデンティティ」尺度 (7 下位尺度)			
基本的他者信頼	.31***	.22***	.32***
熱情的体験・目と目の確認	.38***	.31***	.42***
理想化と同一化	.12*	.11	.14*
相互性・相互調整	.02	.02	.02
埋め込み	.32***	.15**	.29***
友人への思いやり	.24***	.34***	.35***
配偶者・子ども・家庭への配慮	.21***	.18**	.24***
「個体内関係性」合計 (2 下位尺度)	.41***	.31***	.44***
「社会的関係性」合計 (5 下位尺度)	.27***	.23***	.31***
「関係性にもとづくアイデンティティ」尺度合計	.35***	.29***	.39***
全尺度合計	.35***	.25***	.37***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 2

「個としてのアイデンティティ」尺度得点 (I) および「関係性にもとづくアイデンティティ」尺度得点 (R) の各クラスターの“美・繊細さ”得点の 1 元配置分散分析

	クラスター	1. I 低 R 低 N	2. I 極低 R 極低 N	3. I 低 R 高 N	4. I 高 R 高 N	5. I 極高 R 極高 N	6. I 高 R 低 N	F 値	多重比較 (Tukey HSD)
“美”	Mean	9.47	6.31	10.29	10.83	11.74	9.05	8.11***	2<1, 3, 4, 5
	SD	3.08	2.89	3.26	3.14	3.40	3.72		6<5
“繊細さ”	Mean	12.40	11.88	13.54	13.28	14.93	12.00	4.81***	1, 2, 6<5
	SD	2.71	3.88	2.63	2.81	3.66	3.34		
“美・繊細さ”	Mean	21.87	18.19	23.83	24.11	26.67	21.05	8.97***	1, 2, 6<4 2<3
	SD	4.46	5.83	4.74	4.82	5.66	6.11		1, 2, 6<5

*** $p < .001$

以上の結果から、アイデンティティが発達している方は、“美・繊細さ”に関する自意識が発達していることが示唆された。また、Table 2 の結果から、“繊細さ”は、アイデンティティが相対的に特に高く形成されている人が持つ要素（特徴）であることが示された。

(4) “美・繊細さ” へのアイデンティティの影響

Amos を用いて、アイデンティティが“美”におよぼす影響のモデル (GFI .986, RMSEA .047) および“繊細さ”におよぼす影響のモデル (GFI .967, RMSEA .098) を検討した。アイデンティティから“美”へのパス係数は.53 ($p < .001$)、アイデンティティから“繊細さ”へのパス係数は.38 ($p < .001$)であった。「個」と「関係性」からみたアイデンティティが“美”・“繊細さ”に影響する可能性が示唆された。

4. 考察

アイデンティティが確立されるにつれ、自信が増し、“美・繊細さ”に対する個人的評価が上がると思われる。「個体内関係性」尺度合計と“美・繊細さ”尺度合計が高い相関 ($r=.44$) を有したことから、乳幼児の頃からの体験に“美・繊細さ”の根本的要素が含まれることが推察される。今後は自由記述式調査や面接調査を行い、美と繊細さに関する意識・行動の心理的過程をアイデンティティの観点から質的に検討していくことが課題である。

主な文献

宗田 直子・岡本 祐子 (2013) . アイデンティティにおける「個」と「関係性」をとらえる尺度作成とその短縮版の検討 青年心理学研究, 25, 13-27.

何を買ったときに「大人になった」と感じるのか？ —購入した商品・サービスとその価格—

渡辺伸子¹

(¹東北公益文科大学)

Which purchases makes you feel like you've become an adult?

: Buying goods and services, and their prices

Nobuko WATANABE¹

(¹Tohoku University of Community Service and Science)

1. 問題と目的

青年心理学において、自立は大きなトピックである。心理的自立（高坂・戸田，2006）やキャリアの自立（下村・白井・川崎・若松・安達，2007）をはじめとして、青年が自立し、大人になっていく様子が記述され、理論化が試みられてきた。

一方で、自立は発達心理学において、養育者から離れ、独立していく様子としてもとらえられてきた。その中には、「おこづかい」等のお金が、親子間でどのようにやりとりされ、認識されているかを扱ったものもある。小・中・高校生を対象として調査を行った竹尾・高橋・山本・サトウ・片・呉（2009）では、お金の使用の規範が、親の考えに従う状態から、自分なりの考えに従う状態に移行していくことが示された。また、友人との遊びにお金の使用が拡大していくことも示された。これは、青年期に、重要な対人関係の相手が養育者から友人へと移行していくという青年心理学の知見とも整合的である。しかし、竹尾ら（2009）は、青年期前期までしか扱っておらず、購買行動における青年期後期から成人期への移行については依然不明な点が多い。

そこで、本研究では、成人を対象に回顧式の調査を実施し、何を買ったときに「大人になった」と感じるのかを明らかにすることを試みる。

2. 方法

調査協力者 スクリーニング調査では、web パネルの設定に 20 歳から 59 歳と登録している者 4000 人（男女各 2000 人）の回答を得た。そのう

ち、年齢が合わない者および、性別を「その他・回答しない」とした者、「何かを買って“大人になった”という体験」（以下、「体験」と呼ぶ）がない者を除外し、本調査の回答依頼を行った。条件を満たした 2015 人に本調査を依頼した。回答態度に問題がある者のデータを除外した結果、分析に使用できる本調査の回答者の内訳は、男性 378 人、女性 380 人、「その他・回答しない」が 3 人であった。この 3 人については、分析に使用しなかった。平均年齢は、40.4 ($SD=10.9$) 歳であった。

調査内容 本調査では、主に次の内容について尋ねた。①人口統計学的変数、②「体験」の有無、③「体験」の際に買ったモノ・サービス（択一回答）、④③で買ったモノ・サービスの値段、⑤「体験」の際の年齢。

調査時期 スクリーニング調査は、2025 年 1 月下旬に実施した。本調査は、2025 年 1 月の月末から、2 月初めにかけて実施した。

調査方法 セルフ式 web 調査サービス「Freeasy」を利用した。パネルも利用した。

倫理的配慮 所属組織において研究倫理審査を受け、研究実施計画が承認された（公倫-24-07）。

3. 結果

性別ごとに、「大人になった」と感じた買い物体験の際に購入したモノ・サービスをまとめた。

「その他」を含めて 46 の選択肢があり、選択がばらついたため、度数が 10 以上のもののみまとめた（男性の結果は Table 1、女性の結果は Table 2）。

男女ともに度数が 10 を超えたものは、「自動

車」,「アパートなどの家賃」,「国内旅行」,「家またはマンション」であった。男性では,「腕時計」や「スーツ」などの服飾品,「パソコン」などの通信機器が特徴的であった。女性では,「高級アクセサリ」のようなオシャレに関するモノの他,「家族を外食に招待した」や「家族に何か買ってプレゼントした」などの家族へのサービスが特徴的であった。

購入額に関しては,男性では,「100万円～500万円」が72人,「5万円～10万円」が41人,「10万円～50万円」が41人だった。女性では,「5万円～10万円」が63人,「1万円～3万円」が42人,「10万円～50万円」が49人であった。上位3つを性別で比較すると,女性の方がやや低い金額でも「大人になった」と感じる傾向があった。

Table 1 購入したモノ・サービスで度数が10以上のもの（男性；右側の数字は度数）

1 自動車	81
2 アパートなどの家賃	38
3 携帯電話やスマートフォンの本体料金	21
4 腕時計	19
5 パソコン	14
5 スーツ（高級なもの）	14
7 国内旅行	13
7 家またはマンション	13
9 高級酒	10

Table 2 購入したモノ・サービスで度数が10以上のもの（女性；右側の数字は度数）

1 高級アクセサリ	36
2 自動車	31
3 アパートなどの家賃	30
4 海外旅行	20
5 お米や野菜など、普段食べるもの	16
5 デパートで販売している化粧品	16
7 家族を外食に招待した	14
7 国内旅行	14
9 家またはマンション	13
10 家族に何か買ってプレゼントした	11
11 生命保険に加入した	10

4. 考察

本研究では,購買行動の青年期から成人期への移行を明らかにするための手がかりとして,何を買ったときに「大人になった」と感じたのかを回顧法により調査した。結果から,自動車,国内旅行,家賃,家やマンションなどが,男女共通の購入品であることが明らかとなった。

購入したモノ・サービスの性差としては,女性で家族へのサービスが見られたことが特徴的であった。女性には,家族における大人である養育者と同じ振る舞いをすることで,「大人になった」と感じる心性があるのかもしれない。

また,男女差は見られるものの,値段については少なくとも男性では5万円以上,女性では1万円以上が一つの目安となっていた。このことから,ローンを組むほどの高額ではなくとも,「大人になった」と感じるようになることがうかがえる。

本研究では,購買行動という側面から,青年心理学に新たな知見を加えることができた。一方で,広い年代を対象としたため,各世代で規範となっていたモノ・サービスの購入が見えづらかった。世代による比較や,購入に至った理由についての面接調査なども今後必要だろう。

文献

- 高坂 康雅・戸田 弘二 (2006). 青年期における心理的自立(IV)—心理的自立の発達的变化—北海道教育大学紀要（教育科学編）, 57, 135-142.
- 下村 英雄・白井 利明・川崎 友嗣・若松 養亮・安達 智子 (2008). フリーターのキャリア自立—時間的展望の視点によるキャリア発達理論の再構築に向けて— 青年心理学研究, 19, 1-19.
- 竹尾 和子・高橋 登・山本 登志哉・サトウ タツヤ・片 成男・呉 宣児 (2009). お金の文化的媒介機能から捉えた親子関係の発達的变化発達心理学研究, 20, 406-418.

日々への感謝と他者への感謝の関連

今泉里香¹・小塩真司²

(¹早稲田大学大学院文学研究科・²早稲田大学文学学術院)

The Relationship Between Gratitude for Daily Life and Gratitude Toward Others

Rika IMAIZUMI¹, Atsushi OSHIO²

(¹Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University,

²Faculty of Letters, Arts and Sciences Waseda University)

1. 問題と目的

これまで、海外の代表的な感謝特性尺度のひとつである Gratitude Resentment and Appreciation Test Short Form (GRAT-S; Thomas & Watkins, 2003) の日本語版 (GRAT-SJ) を作成してきた (Table 1)。作成過程において、原版の3つ因子「剥奪感の欠如 (LOSD)」 「単純な喜びへの感謝 (以下, SA)」 「他者への感謝 (以下, AO)」のうち, SA と AO の相関が非常に高いことが示された。SA は日々における単純な喜びへの感謝を表す項目群, AO は自分の幸福に対する他者の貢献への感謝を表す項目群で構成される。バックトランスレーションの過程においては原著者から適切であるという確認が得られており, この高い関連は翻訳による問題ではないと考えられる。では, 日本人は SA と AO を区別していないのであろうか。相互依存的自己観を持つ日本人は他者との関連の中で自分が存在するという意識が強く, 他者との境界が曖昧である (e.g., Markus & Kitayama, 1991; 鈴木, 1972)。そのため, SA と AO は密接に関連する可能性がある。本研究はこの両者の関連について複数の観点から検討することを目的とする。両者の項目間の関連を検討し, さらに人生満足度や共感性等との関連から両者の関連を検討する。

2. 方法

調査回答者 497 名 (男性 249 名, 女性 248 名, $M = 45.33$ 歳, $SD = 13.88$) が回答した。

使用尺度 GRAT-SJ, 感謝特性尺度 (白木・五十嵐, 2014), 主観的幸福感尺度 (島井他, 2004), 人生に対する満足尺度 (角野, 1994), 対人反応

性指標 (日道他, 2017) を使用した。

なお, 調査にあたっては日本心理学会倫理規程を参照し, 倫理的配慮を行った。

Table 1: GRAT-SJ 因子別項目

剥奪感の欠如 (LOSD: Lack of Sense of Deprivation) 6項目

2: 人生は私に優しくしてくれている。

3: 周りに十分な資源があるようには見えないし, 私は正当な取り分を得ることもできないようだ。*

6: 私は人生で手に入れるべき幸運を全く手に入れていないと思う。*

10: 私の人生は必要以上に悪いことが起こっている。*

11: 私は人生で大変な思いをしてきたのだから, なにか見返りがあってもいいのではないかとと思う。*

15: なぜだか, 他の人が得ているような利益を私は得ていない気がする。*

単純な喜びへの感謝 (SA: Simple Appreciation) 6項目

4: 自然の美しさにしばしば圧倒される。

7: 毎秋, 木の葉が色づくのを見るのはとても楽しい。

9: 「立ち止まってバラの香りを嗅ぐ」ような, シンプルな喜びに気づくことは大切だと思う。

12: 頻繁に立ち止まり, 「自分の恵みを数える」時間を取ることが大切だと思う。

13: 生活の中にシンプルな喜びを見出すことは大切だと思う。

16: 生きている毎日に感謝することが大切だと思う。

他者への感謝 (AO: Appreciation of Others) 4項目

1: 今の自分が存在するためには, 多くの人たちの助けが必要不可欠であった。

5: 自分の業績に満足することは大切だが, そこに多くの人たちの多大な貢献があったことを忘れないことも重要だと思う。

8: 基本的に人生は自分でやりくりしているが, これまでサポートしてくれた全ての人たちの存在を忘れることはできない。

14: 私が深く感謝しているのは, これまで多くの人たちが私のためにしてくれたことの数々である。

注) *は逆転項目

3. 結果

SA と AO の項目間の関連を見るため, まず相関

分析を行った (Table 2)。その結果, SA と AO の項目間の相関について, 最も低い相関係数は .38, 最も高い相関係数は .65 であった。特に, 項目 9 (SA)と項目 16 (SA) については AO のすべての項目と .50 以上の相関を示した。最も高かったのは項目 16 (SA)と項目 14 (AO) の相関で, .65 を示した。次に, 感謝と関連のある 4 つの尺度と SA および AO との単相関分析を行った (Table 3)。その結果, SA および AO の単相関係数はいずれも有意, かつ類似した正の値を示した。さらに, 4 つの尺度と SA および AO との偏相関分析を行った (Table 3)。その結果, 人生満足度および共感的関心が SA のみと有意な正の関連を示し, 感謝特性 (GQ)が AO のみと有意な正の関連を示した。

4. 考察

項目間の相関分析の結果および他の尺度との単相関分析の結果から, SA と AO は明確には区別されていない可能性が示唆された。項目 16 (SA)「生きている毎日に感謝することが大切だと思う」と

項目 14 (AO)「私が深く感謝しているのは, これまで多くの人たちが私のためにしてくれたことの数々である」が高い相関を示したように, 日本人において日々への感謝と他者への感謝は強く関連している可能性が示唆された。しかし一方で, 偏相関分析の結果からは, 両者が密接に関連しつつも別の概念である可能性が示唆された。なお, 感謝特性尺度(GQ) は AO のみと有意な関連を示したことから, この尺度(GQ)は対人感謝寄りの感謝を測定している可能性も示唆された。以上より, 日本人においては, 日々におけるシンプルな喜びへの感謝と他者への感謝は概念的に区別されつつも両者が混在する可能性が示された。

主要引用文献

Thomas, N., & Watkins, P. (2003, May). Measuring the grateful trait: Development of the revised GRAT. Poster presented at the annual convention of the Western Psychological Association, Vancouver, BC.

Table 2: SA と AO の項目間相関係数

	SA (4)	SA (7)	SA (9)	SA (12)	SA (13)	SA (16)	AO (1)	AO (5)	AO (8)	AO (14)
SA (4)	—									
SA (7)	.53	—								
SA (9)	.50	.60	—							
SA (12)	.45	.51	.57	—						
SA (13)	.41	.40	.61	.48	—					
SA (16)	.41	.43	.60	.53	.57	—				
AO (1)	.39	.41	.53	.42	.47	.55	—			
AO (5)	.38	.40	.59	.39	.58	.63	.60	—		
AO (8)	.41	.42	.58	.53	.55	.63	.60	.66	—	
AO (14)	.40	.45	.56	.60	.55	.65	.66	.63	.69	—

注). SA = 単純な喜びへの感謝, AO = 他者への感謝; ()内の数字はGRAT-SJの項目番号; 相関係数は全て1%水準で有意。

Table 3: 感謝と関連する尺度とSAおよびAOの単相関係数, 偏相関係数, 記述統計量, α 係数 (n = 497)

	単相関係数		偏相関係数		M	SD	α
	SA	AO	SA	AO			
感謝特性尺度 (GQ)	.61 **	.76 **	.07	.58 **	4.72	1.20	.87
人生に対する満足尺度 (SWLS)	.29 **	.26 **	.15 **	.06	3.37	1.41	.92
主観的幸福感尺度 (SHS)	.34 **	.33 **	.15 **	.11 *	4.04	1.21	.83
対人反応性指標 (IRI)							
共感的関心 (EC)	.55 **	.46 **	.35 **	.07	3.23	0.65	.79
視点取得 (PT)	.54 **	.48 **	.31 **	.12 *	3.12	0.69	.80
M	6.15	6.31					
SD	1.43	1.59					

注). SA = 単純な喜びへの感謝, AO = 他者への感謝; SAの偏相関係数はAOを統制したときの相関係数, AOの偏相関係数はSAを統制したときの相関係数; ** $p < .01$, * $p < .05$

青年期における境界性パーソナリティ特性と孤独感の関連 — 青年期対象関係を介した因果モデル分析 —

田中啓孝¹

(¹ 佛教大学教育学部臨床心理学科)

The Relationship between Borderline Personality Trait and Loneliness in Adolescence

— A Causal Model Analysis Mediated by Object Relations in Adolescence —

Hiroataka Tanaka¹

(¹Bukkyo University)

1. 問題と目的

境界性パーソナリティ障害（Borderline Personality Disorder : BPD）は、精神疾患の一種でパーソナリティ症に分類される。DSM-5-TR では「ボーダーラインパーソナリティ症」と名称が変更され、ICD-11 では「ボーダーラインパターン」としてコード 6D11.5 が付与されている。BPD は、見捨てられないためのなりふりかまわない努力、理想化と脱価値化を繰り返す不安定な対人関係、同一性の混乱、自己を傷つける可能性のある衝動性、自傷エピソードの反復、著しい情動不安定性、慢性的な空虚感、不適切で激しい怒り、一過性の解離症状などを特徴とする。一方、境界性パーソナリティ特性（Borderline Personality Trait: BPT）は、BPD のアナログ研究として斎藤（2007）によって提唱された概念であり、BPD ほどの重篤さはない。

DSM-5-TR では、BPD の「慢性的な空虚感」の診断的特徴として、孤独感が空虚感と共に生起する可能性が指摘されている。しかし、BPD の研究は暴力、敵意、衝動性といった外在化障害に焦点を当てたものが多く、抑うつや孤独、空虚感といった内在化障害に関する研究は比較的少ない。Miller et al. (2020) は、BPD における空虚感や孤独感は、BPD 特有の抑うつ体験の中核的な症状であり、自傷行為や自殺傾向の増加と関連していることを指摘している。BPD の病因論は、精神分析的な理論や生物社会モデルによって説明されており、いずれの理論においても孤独感是不適切な養育環境への反応や心理的機能の障害として捉えられている。しかし、このような理論的見解があるにもかかわらず、BPD と孤独感の関連を定量的に説明する実証的研究は不足している。本研究はこれらの理論的見解と孤独感の関連を実証的に検討することに意義がある。

本研究の第一の目的は、BPT、青年期の対象関係および孤独感との関連を質問紙調査によって検討し、各尺度について確認的因子分析と相関分析を実施することである。第二の目的は、確認的因子分析によって得られた下位尺度因子が孤独感をどのように予測するのかを探索的に調査し、BPD と孤独感の因果モデルを共分散構造分析（Structural Equation Modeling : SEM）によって検討することである。

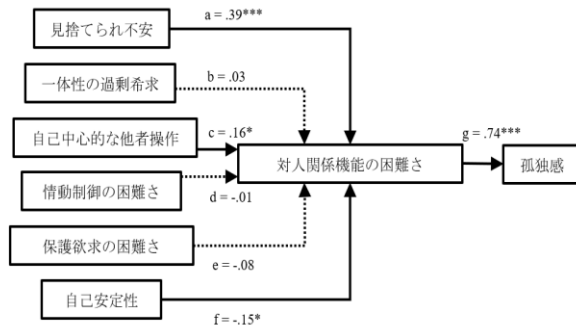
2. 方法

X 市の私立大学に在籍する大学生 204 名（女性 : 128 名、男性 : 75 名、その他 : 1 名、18~26 歳、平均年齢 19.44 歳、SD = 1.39）を対象に、2024 年 10 月から 2025 年 4 月にかけて Google Forms を用いた質問紙調査を実施した。BPT の測定には、斎藤（2007）の BPT 尺度（38 項目、5 件法）を採用した。青年期対象関係の測定には、井梅他（2006）の青年期用対象関係尺度（ORS 尺度、29 項目、6 件法）を採用した。孤独感の測定には、諸井（1991）の改訂 UCLA 孤独感尺度（20 項目、4 件法）を採用した。

3. 結果

尺度の確認的因子分析と信頼性 斎藤（2007）の BPT 尺度では、先行研究と同一の「自己安定性」に加え、斎藤（2007）の「情動制御不全」因子と類似した「情動制御の困難さ」、「保護欲求不全」因子と類似した「保護欲求の困難さ」が抽出された。また、斎藤（2007）とは異なり、対人関係の困難さに関する項目が「親密な対人関係の困難さ」と「友人関係への困難さ」の 2 因子に分離し、青年期特有の対人関係様式が示唆された。これらの因子は高い内的一貫性を示した。青年期用対象関係尺度では、井梅他（2006）と同様の 5 因子構造

Figure 1
境界性パーソナリティ特性における対人関係機能の困難さを介した孤独感のパス解析モデル



注) 適合度: CFI = .993; RMSEA = .117; SRMR = .038; TLI = .856. 係数はすべて標準化係数を表す。
* $p < .05$, *** $p < .001$

(「見捨てられ不安」「一体性の過剰希求」「自己中心的な他者操作」「希薄な対人関係」「親和不全」)が得られ、高い内的一貫性が確認できた。改訂 UCLA 孤独感尺度では、諸井 (1991) と同様の 1 因子構造 (「孤独感」) が確認され、非常に高い内的一貫性が示された。

因果モデルによる検討 事前に仮定した SEM は、潜在変数の分散が負の値を示す Heywood case が発生したため、モデルの修正が求められた。そこで、BPT 尺度の「親密な対人関係の困難さ」因子、「友人関係への困難さ」因子、ORS 尺度の「希薄な対人関係」因子、「親和不全」因子の計 4 因子の合成得点を中間変数「対人関係機能の困難さ」として設定し、潜在変数を仮定しないパス解析を行った (Figure 1 を参照)。「見捨てられ不安」($a = .39, p < .001$) および「自己中心的な他者操作」($c = .16, p < .05$) は、「対人関係機能の困難さ」を促進することが示された。一方、「自己安定性」($f = -.15, p < .05$) は「対人関係機能の困難さ」を抑制した。さらに、「対人関係機能の困難さ」は、「孤独感」を非常に強く促進するパス ($g = .74, p < .001$) が認められた。これらの結果から、BPT における対人関係機能の困難さが、孤独感の強さを予測する重要な要因であることが示唆された。

4. 考察

BPT 尺度において抽出された「情動制御の困難さ」は BPD における情動不安定性と、「保護欲求の困難さ」は分離不安と、「親密な対人関係の困難さ」は養育的な親イメージの不在とそれぞれ関連付けられる。また、「友人関係への困難さ」が分離して抽出されたことは、青年期特有の「第二の分離個体化」のプロセスにおける困難さを反映している可能性がある。ORS 尺度の「見捨てられ

不安」や「自己中心的な他者操作」は、マスターソンの境界例理論における WORU (Withdrawing Object Relation's part Unit: 撤去型対象関係部分単位) と RORU (Rewarding Object Relation's part Unit: 供給型対象関係部分単位) の分裂機制を援用して解釈可能であり、精神分析的な概念との関連性を示唆している。相関分析において、「見捨てられ不安」が BPT 尺度の「親密な対人関係の困難さ」や「保護欲求の困難さ」と強く関連していたことは、アタッチメントの乏しさや基本的信頼感の低さの点で共通している可能性が考えられる。

パス解析の結果は、BPT における対人関係機能の困難さが孤独感の中核的な要因であることを支持している。「見捨てられ不安」や「自己中心的な他者操作」が対人関係機能の困難さを高め、その結果として強い孤独感につながるというプロセスが示された。これは、BPD における耐え難い孤独感の理解に貢献する可能性がある。

本研究の知見は、一般大学生を対象としたアナログ研究であるため、BPD の臨床群への直接的な適用には慎重を要する。また、質問紙調査のみに依存しているため、精神分析的理論の概念をより深く掘り下げるためには、投映法などの測定法を併用した多角的な研究が必要となる。さらに、因果モデルの修正を余儀なくされたため、より理論的に強固な因果モデルの構築が今後の課題である。

文献

- 井梅 由美子・平井 洋子・青木 紀久代・馬場 禮子 (2006) . 日本における青年期用対象関係尺度の開発 パーソナリティ研究, 14(2), 181-193.
- Miller, C. E., Townsend, M. L., Day, N. J. S., & Grenyer, B. F. S. (2020) . Measuring the shadows: A systematic review of chronic emptiness in borderline personality disorder. *PLoS One*, 15(7), e0233970.
- 諸井 克英 (1991) . 改訂 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討 静岡大学文学部人文論集, 42, 23-51.
- 斎藤 富由起 (2007) . 境界性パーソナリティ特性尺度開発の試み 千里金蘭大学紀要, 4, 65-72.

オンライン就職面接における注目対象の違いが不安に与える影響

今野優香理¹・藤井靖^{2,3}

(¹明星大学大学院心理学研究科・²明星大学心理学部・

³国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所)

The effect of differences in focus during online job interviews on anxiety in people

Yukari KONNO¹, Yasushi FUJII^{2,3}

(¹Graduate School of Meisei, ²Meisei University, ³National Center of Neurology and Psychiatry)

1. 問題と目的

社交不安は、他者から注目を受ける可能性がある社交場面に対する、強烈かつ持続的な恐怖や不安を特徴とする疾患である。それゆえ、社会的な状況を回避することが多くなり、日常生活に大きな支障をきたすことになる。主に就職活動をすると思われる年代である18歳から29歳までの生涯有病率が、13.6%と高い(Kessler et al., 2005)。そのため、就職活動等の面接は、困難が予測される社会的状況の一つである。

2019年に発生したCOVID-19の影響により、就職面接のオンラインを併用した就職面接の割合は72.6%と高い割合を占めている(株式会社学情, 2024)。こうしたオンライン就職面接の場では、自身の様子が画面上に表示される事で情報が多くなる。一方で、面接官の情報は、画面上の相手ではなくカメラに視線を向ける事が求められ、面接官の様子が胸部よりも上のみの情報となっている。ここから、従来の社交不安で想定されてきた社会的状況とは異なるものであると言える。なお、社交不安症と社交不安傾向とは連続的な関係で質的な相違はないと考えられるため、診断基準を満たさないSAD傾向者に対する介入も意義があるとされる。

社交不安症の発症・維持に影響を与える要因として、内的・外的な脅威刺激に注意が偏る「注意バイアス」が指摘されている。外的な脅威情報に注意をむける事を他者注目と呼び、内的な自己の情報に注意を向ける事を自己注目と呼ぶ。Rapee & Heimberg (1977)のモデルにおいて、社交不安を感じやすい物は、自己注目と他者注目によって脅威を検出しやすくなる。さらに、自己注目と他者注目を同時に行うことにより、多くの認知資源が必要とされ、他者の否定的な反応に対しての注目が促進され、コミュニケーションが阻害されることで、より緊張や不安を強めるという悪循環が形成されると考えられる。ここから、注目を切り替えず、一つのものに注目を固定する事で認知資源に余裕ができ、不安が低くなるのではないかと考えた。

そこで本研究では、実験参加者に注目する場所

を教示しない「注目流動条件」と、注目をする場所を固定し続ける「注目固定条件」の2セットでオンラインでの就職面接で聞かれる質問を想定した模擬のスピーチ課題をかし、課題が与えられる前の“平常時”、注意流動条件でのスピーチ課題が終了した後の“1 セット後”、注意固定条件のスピーチ課題が終了した後の“2 セット後”の3期間の他者注目、自己注目の変化と、それらが不安に及ぼす変化について明らかにすることを目的とした。

2. 方法

【実験協力者】

聴衆不安尺度にてスクリーニングを行った、4年生私立大学に通学する12名(男性2名、女性10名)を対象とし、無作為に他者表情群3名、他者胸元群3名、自己注目群3名、カメラ注目群3名に振り分けた。

【尺度】

①Profile of Mood States 2nd Edition 短縮版(以下、POMS2 短縮版):スピーチ課題による気分を測定するために用いた。

②Focused Attention Scale (以下、FAS; 山田・関口・伊藤・根建, 2002):スピーチ課題中の注目対象を測定するために用いた。

【手続き】

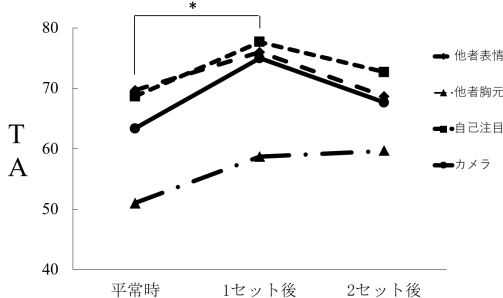
スーツを着用した2名の聴衆が映ったzoom画面の映ったパソコン画面の前で、就職面接を想定したスピーチ課題を行った。聴衆は、事前に録画された動画であるが、実験参加者にはリアルタイムであるとの教示を行った。スピーチのテーマは、「長所・短所について」「人生の中で頑張ったことについて」の2つとし、テーマによる影響を避けるため、スピーチの順番はランダムとした。1セット目は注目流動条件、2セット目は注目固定条件で行った。スピーチ課題を行う前に、POMS2短縮版、1セット目の課題後に、POMS2短縮版、FAS、2セット目の課題後に、POMS2短縮版、FAS、スピーチ時の不安症状の主観的な変化について回答を求めた。実験終了後には、ディブリーフィングを行った。

3. 結果

注目条件の違いを群として、POMS2短縮版の得点を測定した平常時、1セット後、2セット後を時期として群×時期の2要因分散分析を行った。その結果、TAにおいて、平常時と1セット後の間に有意差が得られた（平常時<1セット後、 $p=.005$ ）（Figure 1）。

注目条件の違いを群として、FASの得点を測定した1セット後、2セット後を時期として群×時期の2要因分散分析を行った。この結果、主効果及び交互作用のいずれも有意な差はみられなかった。

Figure 1
注目条件の違いを群とした3期間のTAの変化



4. 考察

本研究は、オンライン就職面接場面における注目対象の違いが不安気分及ぼす影響を検討することを目的とした。大学生を対象に、面接場面において注目対象を操作し、不安気分の変化を測定した。その結果、注目対象の違いによる不安気分の有意ある差は示されなかった。

この要因として、教示による注目対象の固定が十分に機能しなかった可能性が挙げられる。さらに、社交不安傾向者は出現される脅威刺激に対して反応準備性を高め、注意を維持しやすいという特徴（朝倉, 2015）を有する。そのため、参加者は注目対象にかかわらず、「面接官」という潜在的な脅威に過敏に注意を向け、不安が高く維持された可能性が考えられる。

また、不安を高める社会的な手掛かりの影響が限定的であったことも示唆される。本研究では注目対象の違いが不安に及ぼす影響を確認できなかったが、これは社交不安傾向者にとっては、注目対象の違いよりも他者から評価される状況そのものが強力な不安喚起要因となった可能性がある。

さらに、オンライン面接における不安の上昇が対面状況とは異なる要素によって生じていることが窺われた。オンライン面接という状況において

は、対面場面で顕著となる表情や非言語的行動などの手がかりが限定されている為である可能性がある（田中・森, 2022）。この点から、オンラインでの不安の上昇は、対面面接と異なる環境要因が社交不安の体験に影響を与えている可能性を示唆している。

このことより、オンラインにおいては面接官の情報が限定的であり、不安を高める社会的な手掛かり注目対象の影響が少ない可能性が示された一方で、オンラインならではの不安の上昇は対面とは要素が異なることが窺われた。

本研究は、注目対象の違いによる不安の変化は明確には確認できなかったものの、社交不安傾向者の不安の持続やオンライン環境に特有の不安喚起要因の存在について理解を深める一助になったと言える。

文献

- 朝倉 聡 (2015). 社交不安症の診断と評価（特集：社交不安症） 不安症研究, 7, 4-17.
- Heuchert, Juvia P., M. McNair, Douglas, 横山 和仁監訳. POMS2 日本語版マニュアル. 金子書房, 2015, 156.
- Kessler, R. C., Berglund, P., Demler, O., Jin, R., Merikangas, K., & Walters, E. (2005). Lifetime 46 prevalence and age-of-onset distributions of DSM-IV disorders in the national comorbidity survey replication. Archives of General Psychiatry, 62, 593-602.
- Rapee, R. M., & Heimberg, R. G. (1997). A cognitive-behavioral model of anxiety in social phobia. Behavior Research and Therapy, 35, 741-756.
- 田中 彰吾・森 直久 (2022) 間身体性から見た対面とオンラインの会話の質的差異 ころと科学とエピステモロジー, 4, 2-17.
- 山田 幸恵・関口 由香・伊藤 義徳・根建 金男 (2002). 注意の焦点を測定する尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 ヒューマンサイエンスリサーチ, 11, 161-173.
- 全国大学生生活協同組合連合会 (2024) 第 59 回学生生活実態調査 概要報告 全国大学生生活協同組合連合会 Retrieved 11, 14, 2024, from https://www.univcoop.or.jp/press/life/pdf/pdf_report59

「推し」の存在の意味とアイデンティティとの関連

三好昭子

(日本女子体育大学)

Relationship between the meaning of “Oshi” and a sense of identity

Akiko MIYOSHI

(Japan Women's College of Physical Education)

1. 問題と目的

CiNii のフリーワードで「推し活」を検索すると、2020 年には 1 本だった論文数が、2021 年には 4 本、2022 年には 10 本、2023 年には 30 本、2024 年には 68 本と一気に増加している。心理的な側面からの研究はまだ少ないが、「推し活」が人間の心身の健康（原田ら、2023）や幸福感（森山・吉岡、2022）、ウェルビーイング（井上・上田、2023）に対してプラスに影響することを指摘した研究などがある。しかし三好（2024a）は、「推し活」のポジティブな側面を強調した研究が、「推し活」をしている人しか対象にしていないことに着目し、推し活群と非推し活群の両群を対象として、精神的健康について比較した。その結果、推し活群の方が非推し活群よりも「無気力」の得点が有意に高く、「私は、存在する価値のある人間である」といった「存在価値感」が有意に低かったことを明らかにした。つまり推し活群はアイデンティティ拡散(Erikson, 1950)の状態にも似ており、アイデンティティ拡散から自我を守るための防衛として「推し活」が有効に働いている可能性が示唆された。そこで本研究では、その人にとっての「推し」の存在の意味とアイデンティティとの関連について探索的に検討する。

2. 方法

調査手続き：2024 年 10 月、都内大学の学園祭および授業の前後、部活動を通して調査への協力依頼をおこない、Google フォームを使用した Web 調査を実施した。倫理的配慮を説明の上、研究に協力することに同意した方にのみ回答を求めた。

分析対象者：回答に欠損のない 16～23 歳までの平均年齢 19.8（標準偏差 0.97）歳、150 名（男性 20

名／女性 126 名／回答しない 4 名）

調査内容：年齢、性別、所属、「推し」の有無や対象、「推し活」をしている期間の他は次のとおりである。■**アイデンティティ：**Ochse & Plug(1986)のアイデンティティ尺度の日本語短縮版（三好ら、2003, p69）を用いた。「当てはまる」から「当てはまらない」までの 4 件法で回答を求め、得点が高いほどアイデンティティの統合程度が高いことを意味している。■**「推し」の存在の意味：**三好(2024b)は、「あなたにとって推しはどのような存在ですか」という問いに対する自由記述の回答を KJ 法で分析した。その結果に基づき、Table1 の 1) から 10) について、「そう思う」から「そう思わない」までの 4 件法で回答を求めた。

■**「推し」に対する心理的所有感と同担意識：**同担とは自分の「推し」を推す他人のことで、井上・上田（2023）が作成した尺度のうち、「推し活継続性」を除く①～④の 4 下位尺度を使用した。「全くそう思わない」から「とてもそう思う」の 7 件法で回答を求めた。

3. 結果と考察

「推し」がいると回答した推し活群は 105 名（70.0%）、いないと回答した非推し活群は（44 名 29.3%）だった。推し活群と非推し活群とでアイデンティティの得点を比較したところ、平均値に有意な違いは認められなかった（ $t = -0.36$, $df = 83.45$, $p = .72$, $d = -.006$ ）。

「推し」の存在の意味とアイデンティティとの関連について検討するために、アイデンティティの得点との相関係数を Table1 に示した。その結果、アイデンティティの統合の程度が高いほど、「推し」は 1) 神のような存在、6) 自分を幸せにし

てくれる存在, 10) 現実を忘れさせてくれる存在ではないという, 負の関連があることが明らかになった。4) 生きるために必要不可欠な存在, 5) 自分をがんばらせてくれる存在, 7) 自分をいやしてくれる存在, 8) 自分を元気にしてくれる存在との間にも有意傾向ではあるが負の関連が認められた。つまり「推し」の有無によってアイデンティティの統合の程度に違いがないのは, 推し活群は「推し」の存在によってアイデンティティが補強されているからだと考えられる。だからこそ, アイデンティティの得点が低いほど「推しはもはや自分のパーソナリティの一部である」といった心理的一体感が高いのではないだろうか。

「推し」に対する心理的所有感と同担意識を測定する①心理的一体感, ②心理的責任感, ③同担競争意識, ④同担仲間意識の得点を用いて階層クラスター分析 (Ward 法) をおこない, 3つのクラスターを得た。クラスター1 は①～④の得点が全体的に低く (推し活意識低), クラスター2 は1より心理的一体感が高く3と同程度だったが, 3よりも心理的責任感と同担競争意識が低く, 同担仲間意識は高かった (仲間意識高)。クラスター3は全体的に得点が高かったが, 2よりも同担仲間意識が低かった (競争意識高)。これら3クラスターを独立変数として, 「推し」の存在の意味とアイデンティティを従属変数とした1要因の分散

分析をおこない, 多重比較をおこなった。その結果, クラスター2と3は1よりも1), 4), 6), 7), 8), 10)の得点が有意に高く, 「推し」の存在の意味が大きいことが明らかになった。3) 恋人のような存在のみ, クラスター3が1と2よりも得点が有意に高く, 「推し」の存在の意味が大きい人の中にも, 同担競争意識をもつ人と仲間意識をもつ人とが存在していることがわかった。アイデンティティについてはクラスター3が1に比べて有意に得点が低く, 同担競争意識の高いクラスター3はアイデンティティが不確かであるがゆえに「推し活」において排他的にのみめり込みやすい可能性が示唆された。

文献

井上淳子・上田 泰 (2023). アイドルに対するファンの心理的所有感とその影響について—他のファンへの意識とウェルビーイングへの効果— マーケティングジャーナル, 43, 18-28.

三好昭子 2024a 推し活と精神的健康との関連 日本心理学会第88回大会発表論文集, 981.

三好昭子 2024b 自我感覚の拡大としての推し活と充実感との関連 日本青年心理学会第32回大会発表論文集, 105-106.

付記: 本研究は, 幕田琴美さんの卒業研究(2024年度)のデータを, 許可を得て再分析したものである。

Table1. 各変数における平均値・標準偏差, アイデンティティと各変数間との相関, および各クラスターにおける平均値の差の検定結果													
		α 係数	M	SD	アイデンティティとの 相関係数	推し活意識低 Cluster1(N=26)		仲間意識高 Cluster2(N=25)		競争意識高 Cluster3(N=54)		F 値	多重比較
						M	SD	M	SD	M	SD		
アイデンティティ(7項目)		.77	2.67	0.57	1.00	2.87	.60	2.78	.55	2.53	.53	4.06 *	3<1
推し活の存在の意味	1)神のような存在		2.90	0.99	-.26 **	2.08	.74	3.04	.98	3.25	.86	14.66 ***	1<2, 3
	2)憧れ・尊敬の存在		3.65	0.72	.00	3.38	.98	3.76	.72	3.72	.53	1.19	
	3)恋人のような存在		2.14	1.04	-.11	1.81	.98	1.72	.94	2.50	1.00	7.25 **	1, 2<3
	4)生きるために必要不可欠な存在		3.30	0.83	-.17 †	2.73	.87	3.36	.91	3.55	.64	8.27 ***	1<2, 3
	5)自分をがんばらせてくれる存在		3.79	0.51	-.18 †	3.54	.71	3.84	.47	3.89	.37	2.94 †	
	6)自分を幸せにしてくれる存在		3.84	0.42	-.20 *	3.58	.64	3.96	.20	3.91	.29	5.58 **	1<2, 3
	7)自分をいやしてくれる存在		3.74	0.60	-.19 †	3.35	.89	3.92	.40	3.85	.41	7.35 **	1<2, 3
	8)自分を元気にしてくれる存在		3.89	0.39	-.17 †	3.68	.69	4.00	.00	3.94	.23	5.19 **	1<2, 3
	9)自分に楽しみを与えてくれる存在		3.93	0.25	-.06	3.81	.40	4.00	.00	3.96	.19	3.29 *	
	10)現実を忘れさせてくれる存在		3.31	0.93	-.31 **	2.77	1.18	3.52	.92	3.48	.69	5.35 **	1<2, 3
心理的	①心理的一体感(5項目)	.84	5.45	1.19	-.20 *	4.05	.95	6.19	.58	5.79	.93	43.52 ***	1<2, 3
所有感	②心理的責任感(5項目)	.77	3.66	1.23	-.05	2.28	.82	3.57	.87	4.37	.93	45.56 ***	1<2, 3; 2<3
同担	③同担競争意識(4項目)	.88	2.62	1.54	-.14	1.37	.48	1.42	.57	3.78	1.25	74.36 ***	1, 2<3
意識	④同担仲間意識(6項目)	.86	5.32	1.32	.00	4.81	1.12	6.43	.53	5.05	1.38	13.84 ***	1, 3<2
		*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$											
下位尺度得点は項目数で除した値。アイデンティティ以外は推し活群のみの値であり, アイデンティティとの相関係数も推し活群のみの結果である。													

中学生において親子関係・友だち関係・教師との関係が
学校とのつながり感を介して孤独感・生活満足度に与える影響
—学年差に着目して—

中尾達馬¹

(¹琉球大学)

The Effects of Parent–Child, Peer, and Teacher Relationships on Loneliness and Life Satisfaction among Junior High School Students through School Connectedness: Focusing on Grade-Level Differences

Tatsuma NAKAO¹

(¹University of the Ryukyus)

1. 問題と目的

教育実践の場では、個々の対人関係を基盤として、学校が個人にとっての居場所となり、適応を支えるという図式がしばしば活用される(上床・田村, 2025)。しかし、この図式を直接取り上げて実証的に検討した研究はほとんど存在しない。

そこで本研究の目的は、中学生を対象に、(1) 親子関係・友人関係・教師との関係が居場所感(学校とのつながり感)を介して孤独感や生活満足度へどのように影響するのか、さらに(2) 学年による違いはあるのかを明らかにすることである。

本研究では、アタッチメント理論の視点から友人関係や教師との関係を尺度項目として可視化する。このことにより、青年期のアタッチメント理解が深まるとともに、生徒の学校適応支援に向けた議論の基盤を築くという効果が期待される。

2. 方法

調査対象 調査対象は大阪市A中学校に通う中学生369名(1年生141名、2年生127名、3年生100名、不明1名)であった。

質問紙 質問紙はフェイスシート(学年、年齢、性別)と以下の6つの尺度から構成されていた。

養育者へのアタッチメント(児童版 ECR-RS; 中尾他, 2019; 2020) アタッチメント不安3項目、アタッチメント回避6項目から構成される(4件法)。本研究では、国立教育政策研究所(2024)と同様に、主要な養育者を母親に限定せずに全回答者を対象として分析を行う。

ピア・アタッチメント(中尾他訳, 2024) 自分のことを自分の言葉で話すことは青年期の重要な発達課題の一つである(畑野, 2010)。本研究では、IPPA-R(Gullone & Robinson, 2005)のコミュニケーション8項目をピア・アタッチメントの指標とした(4件法)。

教師との関係性(中尾他訳, 2024) 自己決定理論(Ryan & Deci, 2000)に基づき、台湾で高校生向けに作成された「教師との関係性尺度」(Relatedness; 須他, 2000、5項目、4件法)を中学生向けに日本語へ翻訳し使用した。

学校とのつながり感(中尾他訳, 2024) 「学校とのつながり感尺度」(Furlong et al., 2011、5項目、4件法)を日本語へ翻訳し使用した。

短縮版孤独感尺度(井上・高橋訳, 2000) 中尾他(2019)で使用した5項目を用いた(5件法)。

生活満足度(吉武訳, 2010) 本研究では、日本語版 SLSS を使用した(4件法)。

手続き等 本研究は Web 調査形式で、2024 年 12 月に実施した。調査内容・倫理的配慮は、事前に大阪市教育委員会や学校長らと確認した。

3. 結果

先行研究に基づき、各下位尺度得点(加算平均値)を算出した。信頼性を ω 係数で確認した結果、十分な内的整合性が得られた($\omega=.73-.88$)。

Figure 1 を設定し、学年に関して測定不変性を検討した。その結果、孤独感と生活満足度の両方において切片不変性が確認された(Table 1)。

Figure 1 本研究で検討するパス図

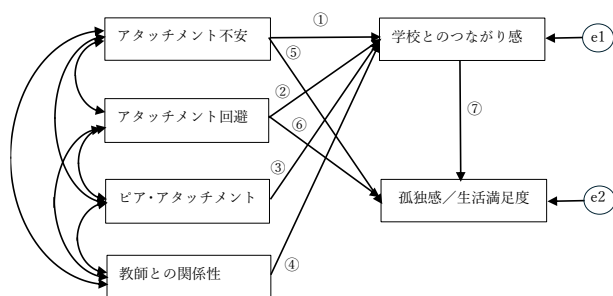


Table 1 測定不変性の検討

	モデル	AIC	BIC	RMSEA
孤独感	構造不変性	3832.0	4124.7	—
	負荷量不変性	3831.3	4069.4	0.088
	切片不変性	3825.1	4016.4	0.063
生活満足度	構造不変性	3633.0	3925.7	—
	負荷量不変性	3625.2	3863.3	0.060
	切片不変性	3616.9	3808.1	0.050

注) AIC、BIC は値が低いほど適合度の良いモデルを示す。RMSEA は 0.05 未満で適合度が良好である。

切片不変性が確認されたため、学年によるパス係数の違いを検討した。その結果、構造不変性モデルと計量不変性モデルの比較において、学年間で有意な差は認められなかった(孤独感: χ^2 差(14) = 27.30, $p < .05$ 。ただし、部分的計量不変性の検討により、有意に異なるパス係数はなかった；生活満足度: χ^2 差(14) = 20.16, n.s.)。

さらに、切片不変性が確認されたことから、学年による下位尺度得点の差を一元配置分散分析により検討した。その結果、生活満足度において学年の主効果が有意であった ($F(2, 365) = 3.92$, $p < .05$, $\eta^2 = .02$)。多重比較 (Sidak) の結果、3 年生は 1 年生よりも生活満足度が有意に高かった (平均値: 1 年生 = 2.81、2 年生 = 2.91、3 年生 = 3.00)。

4. 考察

本研究は、中学生において学年にかかわらず、個々の対人関係を基盤として学校が居場所となり、孤独感の低減や生活満足度の向上を通じて適応を支えることを示唆した (Figure 1、Table 2、3)。公衆衛生分野のシステマティックレビューでも、学校とのつながりが不安や抑うつ予防に寄

Table 2 孤独感におけるパス係数

パス	1 年生	2 年生	3 年生
①	-0.052	-0.053	-0.048
②	-0.064	-0.070	-0.064
③	0.250 **	0.269 **	0.260 **
④	0.502 **	0.560 **	0.521 **
⑤	0.348 **	0.307 **	0.361 **
⑥	0.005	0.005	0.006
⑦	-0.305 **	-0.265 **	-0.342 **

注) ○で囲まれた数値は、Figure 1 に対応する。

Table 3 生活満足度におけるパス係数

パス	1 年生	2 年生	3 年生
①	-0.052	-0.053	-0.048
②	-0.064	-0.070	-0.064
③	0.250 **	0.269 **	0.260 **
④	0.502 **	0.560 **	0.521 **
⑤	-0.179 **	-0.185 **	-0.170 **
⑥	-0.240 **	0.005 **	0.006 **
⑦	0.297 **	-0.265 **	-0.342 **

注) ○で囲まれた数値は、Figure 1 に対応する。

与することが示されており (Raniti et al., 2022)、本研究の結果は、学年にかかわらずこの重要性を確認した点で新たな学術的貢献となる。

文献

- 中尾 達馬・村上 達也・数井 みゆき (2019) . 児童期においてアタッチメント不安とアタッチメント回避を測定する試み—児童版 ECR-RS の日本語版作成 パーソナリティ研究, 27 (3), 179-189.
- 中尾 達馬・村上 達也・数井 みゆき (2020) . 27 巻 3 号 訂正 パーソナリティ研究, 28 (3), 263-263.
- 上床 祐輔・田村 優士 (2025) . 「ここがあってよかった」—不登校支援の取組から学校の在り方を考える 大阪市人権・同和教育研究大会報告集, 51, 190-199.

付記 本発表は、大阪市総合教育センター教育振興担当実践研究グループが実施している「研究Ⅳ 不登校の未然防止・解決に向けた研究」の成果の一部を、連携協力者である中尾が代表して発表するものである。

現代青年のアパシー傾向と解離傾向との関連に関する研究 —親からの期待に着目して—

渡部智行¹

(¹ 広島文教大学人間科学部心理学科)

A study on the relationship between apathy and dissociative tendencies among modern adolescents

Tomoyuki WATANABE¹

(¹Department of Psychology, Faculty of Human Sciences, Hiroshima Bunkyo University)

1. 問題と目的

渡部 (2021) は、一般学生のアパシー傾向を測定するための「多次元アパシー傾向測定尺度」を作成し、快を体験する能力の低下や感情の平板さを表す「アンヘドニア」、将来への展望や自分のなさを表す「時間拡散」、他者との衝突を避け批判されることを恐れる「強迫的適応志向」の三次元構造を見出している。一方、廣澤 (2010) は解離の特徴として「情動の回避」「自分がない状態」「他者と過度にぶつかって傷つけ合うといった事態を避ける」など、アパシー傾向と類似するものを挙げている。また、稲村 (1989) がアパシーの背景として母子密着や両親の不一致を挙げており、岡野 (2007) が「子どもは親からのさまざまな無言の圧力や期待を感じ、それに押しつぶされるようになりながら生きていく過程で、解離をその防衛機制として発達させる」と述べているように、家族関係・家庭環境もアパシーと解離それぞれの背景にあるものとして挙げられている。アパシー傾向と親の養育態度の関連を検討した研究はこれまでも複数ある (川原・松尾, 1998; 毛利・相模, 2008) が、母子密着性や親からの期待に着目した研究はこれまでに見られない。また、アパシー傾向と解離傾向に関しても、これまでにこれらの関係を検討した研究は見られない。

そこで本研究では、現代大学生のアパシー傾向と解離傾向との関連、それらの背景にあると考えられる親からの期待がどう作用しているかといった観点から質問紙調査を用いた検討を行う。

2. 方法

広島文教大学研究倫理委員会の承認を得て行っ

た。調査対象は中国地方の私立大学生 138 名 (男 53 名, 女 83 名, その他 2 名) であった。

測定尺度

①多次元アパシー傾向測定尺度 (渡部, 2022)

「アンヘドニア」5 項目, 「時間拡散」5 項目, 「強迫的適応志向」5 項目からなり, 計 15 項目。

②解離性体験尺度 (DES-II) 日本語版

Bernstein & Putnam (1986) が作成したものを田辺・小川 (1992) が邦訳した 28 項目からなる尺度で, 体験頻度を 0%~100% の 11 件法で測定する。

③親からの期待尺度, 期待に対する反応様式尺度 (春日・宇都宮・サトウ, 2014)

各因子の負荷量が高い上位 5 項目ずつを用いる。親からの期待尺度は, 「人間性期待」5 項目「進路期待」5 項目「よい子期待」5 項目の 3 下位尺度からなる。期待に対する反応様式尺度は, 「肯定反応」5 項目「反発反応」5 項目「負担反応」5 項目の 3 下位尺度からなる。

3. 結果

測定尺度間の相関分析を行った結果, アパシー傾向と解離傾向には概ね弱い正の相関が見られ, 「強迫的適応志向」を除くアパシー傾向の心理的側面は, 肯定反応と弱い負の相関, 反発反応と弱い正の相関が見られた (Table 1)。

Table 1 アパシー傾向と解離性体験, 親からの期待との相関

	アパシー全体	アンヘドニア	時間拡散	強迫適応
解離性体験	.252 **	.165 †	.184 *	.214 *
人間性期待	-.159 †	-.180 *	-.140	-.022
親からの期待全体	-.114	-.125	-.104	-.015
肯定反応	-.324 **	-.312 **	-.257 **	-.140
反発反応	.163 †	.226 **	.146 **	-.025

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

次に, 「親からの期待尺度」全体得点と「期待

に対する反応様式尺度」各下位尺度を従属変数、「アパシー傾向測定尺度」各下位尺度と「DES-II」得点を独立変数として多変量重回帰分析を行った (Table 2)。その結果、「アンヘドニア」の重決定係数が一番高く、「親からの期待」「肯定反応」からは負の影響、「反発反応」からは正の影響が示された。また、「肯定反応」はアパシー傾向の全側面と解離傾向に負の影響を及ぼし、「負担反応」は強迫的適応志向に正の影響を及ぼしていた。また、有意傾向ではあるが、親からの期待は解離傾向に正の影響を与えていることも示唆された。

Table 2 アパシー傾向の各側面と解離傾向を従属変数とした多変量重回帰分析

	アンヘドニア	時間拡散	強迫適応	解離得点	VIF
親からの期待全体	-.247 *	-.167	-.008	.198 †	1.783
肯定反応	-.236 **	-.207 *	-.197 *	-.249 **	1.248
反発反応	.223 *	.138	-.198 †	-.095	1.808
負担反応	.164	.114	.264 *	.113	1.905
R^2	.174 **	.099 **	.062 **	.072 **	

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

4. 考察

まず、アパシー傾向と解離傾向の関連性について、非臨床群を含む一般的な傾向としてのアパシー傾向と解離傾向の関連性が示唆されたが、その関連は強いものとは言えなかった。今回の研究で解離傾向を測定するために用いた DES-II は日常解離性体験の測定にも用いることができる尺度であるとはいえ、健忘や同一性障害など比較的重篤な症状を尋ねる項目も含まれており、一般的な心性を捉えるものである多次元アパシー傾向測定尺度との関連を検討するには不適切な部分もあったと考えられる。また、DES-II の項目は個人の行動面を測定する項目が大半を占めており、個人の心理面・性格面を測定するアパシー傾向測定尺度とは、こうした水準の違いもあったとも言える。

次に、親からの期待がアパシー傾向と解離傾向にどのように作用しているかを検討した結果、「アンヘドニア」に対しては正の方向、解離傾向に対しては負の方向の作用であることが示唆され、親からの期待が、症状的な水準では近似している部分もあるアパシーと解離の状態像を弁別する手がかりの一つになり得る概念であることが考えられた。岡野 (2007) も親からの期待に対する防衛機制として解離が発現することを指摘しており、

青年期の自我形成の不安に対する防衛としてのアパシーとはそのメカニズムが異なる可能性が考えられるだろう。むしろ、親から期待を受け理想像を投影される状態の方が、現代青年にとっては自我形成の不安が低減しアパセティックな状態から抜け出しやすくなるのではないだろうか。

また、親からの期待に対する反応の水準で見てみると、期待を肯定的に捉えている場合は、アパシー傾向においても解離傾向においてもそれらを低減させる方に作用することが明らかになった。もちろん、ネガティブな情動は無意識下へとスプリットされているという可能性もあるが、少なくとも意識的な水準で親からの期待を肯定的に捉えていることが精神的な健康を予測するという可能性が示唆されたと言える。中でも、親からの期待やそれに対する反応がアパシーの中核概念と言える「アンヘドニア」に対して最も大きく影響しており、アパシー青年特有の独特の無気力状態を予防するためにはポジティブな意味での親の期待が鍵概念となる可能性が示唆された。

さらに、親の期待に負担を感じているほど「強迫的適応志向」が増大することが明らかになり、(ネガティブな意味での) 親の期待に対してアクティブな形で「反発」するのではなくパッシブな形で「負担」を感じることが、将来的な対人関係においても相手の欲求に合わせて我慢するパターンを形成する可能性があることが考えられる。

以上のように、アパシー傾向と解離傾向は一定の関連性は見られたものの、親からの期待がどう作用しているかに着目すると、その作用は必ずしも直線的な関係ではなく、弁別可能な構成概念であることも示唆された。今後の課題としては、対象者の数を増やすための追加調査を行うことや、日常水準の質問項目に絞った解離傾向を測定する尺度を作成し検討を行うことなどが挙げられる。

文献

- 岡野憲一郎 (2007) . 解離性障害—多重人格の理解と治療 岩崎学術出版社
- 王 百慧 (2018) . DES-II 尺度で測定した日常解離性体験の体験頻度及びその体験評価について 九州大学心理学研究, 19, 51-57.
- 渡部智行 (2021) . 現代青年のアパシー傾向に関する研究 —多次元アパシー傾向測定尺度の作成— 青年心理学研究, 33, 33-41.

青年期における親子の共同的関与（Joint Media Engagement） —アプリケーションを媒介としたコミュニケーションの探索的研究—

信太寿理

（愛知学泉大学）

Joint Media Engagement in Parent-Adolescent Relationships —An Exploratory Study on App-Mediated
Communication—

Juri SHIDA

(Aichi Gakusen University)

1. 問題と目的

近年、青年はスマートフォンの所持率が急激に増加している。13 歳から 19 歳では 88.8%，20 歳から 29 歳では 91.8%の所有率である（総務省，2024）。そして、スマートフォンを通じたコミュニケーションのあり方も変化している。同居家族に対して最も多く使用したコミュニケーション方法について、「直接会って伝える」は 46.5%であり、LINE やメールなどの「メッセージ機能を主な連絡手段として用いている」割合が 32.1%にのぼる。LINE でのメッセージ機能の使用割合をみると、2014 年では 7.4%であったものが 2019 年には 22.9%，2023 年には 27.7%となっており（NTT ドコモモバイル社会研究所，2023），家族間のコミュニケーション様式も大きく変容していることがうかがえる。

このような、家族や親子が同一のメディア上で相互作用し、共に体験を共有する形態は、近年では共同的関与（Joint Media Engagement: JME）と呼ばれている（Takeuchi & Stevens, 2011）。JME とは、家族や仲間が同じメディアを一緒に使いながら対話したり、感想を伝え合ったりする協調的な関与を指し、従来の共視（covieing）の概念を発展させたものである。親子がアプリ上で投稿を共有したり、スタンプや画像で感情をやりとりすることも、この JME の一形態と捉えられる。

JME に関する先行研究は、主として幼児期や児童期を対象に、親子が一緒に番組やアプリを利用することの学習的・発達の効果を検討してきたが、青年期を対象とした研究はまだ限られている

（Koch, Barr & Sundqvist, 2025; Yu et al., 2024）。しかし、青年期においても親子がアプリ上で画像や動画、メッセージを共有し合うなど、発達段階に応じた新しい形の JME がみられると考えられる。青年期は心理的自立が進む一方で親子関係の再構築が求められる時期であり、このような JME を通じた媒介的共有経験は、親子間の心理的距離や相互理解の形成に寄与する可能性がある。

以上のことから、本研究では青年期における親子間の共同的関与（Joint Media Engagement）に着目し、アプリケーションを媒介としたコミュニケーションの実態とその心理的意義を探索的に検討する。具体的には、①青年期の親子間でどの程度アプリを用いた関与がみられるのか、②使用されるアプリや機能の種類、③アプリを媒介とした親子の関与がどのような心理的メリットをもたらすのか、について明らかにすることを目的とする。

2. 方法

- ・調査時期：2024 年 1 月
- ・調査対象者：東海地方にある大学生 1 年生と 3 年生男女 57 名（平均 19.51 歳，SD=1.04）
- ・調査内容：(1) スマートフォンのアプリを用いて親と日常的にやり取りをするのかについて尋ねた質問、(2) 親とやりとりや共有をしたり、家庭で話題になったアプリについての質問、(3) 親とアプリでやりとりをしたり、情報を共有することのメリットについての質問。なお本研究において、開示すべき利益相反はない。また筆者の勤務校に

て倫理審査を経ている。

3. 結果

本研究ではまず(1) スマートフォンのアプリを用いて親と日常的にやり取りをするのかについて尋ねた質問について分析を行ったところ、全体の84.2%が親と何らかのアプリを用いてコミュニケーションを行っているという回答した。さらに、(2) 親とやりとりや共有をしたり、家庭で話題になったりしたアプリについて尋ねた。その結果、最も多かったアプリがLINE (98.2%) となり、次いでyoutube (49.1%) であった。その次は、instagram (47.4%)、X (旧 twitter) (38.6%) という結果となった。その他には、timetree (スケジュール共有アプリ 15.8%)、google map (地図アプリ 17.5%)、spotify (音楽再生アプリ 14%)、whoo (位置情報共有アプリ 10.5%) アプリゲーム (ディズニーツムツム、PokemonGO など) などがみられた。(3) 親とアプリでやりとりをしたり、情報を共有したりすることのメリットについては、楽しい話題や情報を共有できる、共通の話題ができる、居場所や予定がわかる、自分が今好きなものを知ってもらえる、その場にいなくても話題が分かる、普段言えないことがいえる、などがあげられた。

4. 考察

本研究は探索的な分析であったが、文字情報を用いたコミュニケーションやスタンプといったLINE 上でのやりとりの多さは予想通りの結果であった一方で、YouTube のような動画を介して親子が話題を共有しているという点は興味深い知見であった。これは、単なる情報交換にとどまらず、共通のメディア体験を通じた感情の共有や相互理解を促すものであり、共同的関与 (Joint Media Engagement: JME) の観点から注目すべき結果といえる。

JME の枠組みでは、親子が同じメディアを一緒に見たり・話し合ったり・感情を共有したりする過程が、関係性の質や相互理解を深める契機になるとされている (Takeuchi & Stevens, 2011)。青

年期における親子関係は心理的自立と依存のバランスを模索する時期であり、共通の話題を共有することは、「干渉されずにつながる」形での関係維持につながる可能性がある。特に YouTube のような娯楽的メディアを通じたやりとりは、コンサマトリーのコミュニケーション (古谷・坂田, 2006) の性質を持ちながらも、JME の観点から見ると、親子が同じ対象を媒介にして感情的なつながりを再確認する媒介的共有経験として機能していると考えられる。

また、古谷・坂田 (2006) の示すように、情緒的コミュニケーションは悩みごとの相談や気持ちの理解といった自己開示や情緒的サポートを含む一方、コンサマトリーのコミュニケーションは単純なやりとりの楽しさに価値を見出す側面がある。今回の結果からは、青年期の親子が動画を介して軽やかにやりとりを楽しむことが、必ずしも浅い交流ではなく、関係維持や親和性を確認するための柔らかな JME の形態であることが示唆される。こうした JME 的な関与は、青年期特有の心理的距離を尊重しつつも、親子のつながりを再構築する新たな様式として位置づけられるだろう。

文献 (主要なもの)

- 古谷 嘉章・坂田 桐子 (2006) . 青年期における友人関係とコミュニケーションの目標志向性—行為の目標分類に基づく検討—. 教育心理学研究, 54(3), 345–355.
- NTT ドコモモバイル社会研究所 (2023) . 家族コミュニケーションに関する調査報告書 (2023 年版) . <https://www.moba-ken.jp/>
- Takeuchi, L. M., & Stevens, R. (2011). The new coviewing: Designing for learning through joint media engagement. The Joan Ganz Cooney Center at Sesame Workshop.
- Yu, J., Qi, X., & Yang, S. (2024, May). Parent-child joint media engagement within HCI: a scoping analysis of the research landscape. In Proceedings of the 2024 CHI Conference on Human Factors in Computing Systems (pp. 1-21).

社会規定的完全主義と対人依存欲求の関連 —他者信頼感の調整効果に着目して—

松崎美奈子

(早稲田大学文学研究科)

The Relationship between Socially Prescribed Perfectionism and Interpersonal Dependency Needs :

With a Focus on the Moderating Role of Interpersonal Trust

Minako MATSUZAKI

(Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University)

1. 問題と目的

過度に完全さを求めるパーソナリティや認知傾向を、完全主義と呼ぶ(大谷・桜井, 1995)。中でも過度に他者から高い基準を課されていると感じる「社会規定的完全主義」(Socially Prescribed Perfectionism: SPP)は、抑うつをはじめとする不適応的な心理状態を最も強く予測する(Flett et al., 1991)。たとえば社会的断絶モデル(Hewitt et al., 2006)は、SPP傾向が高い者が孤立感や対人関係の希薄化といった社会的断絶を経験しやすく、それらを介して抑うつや自殺念慮に至るリスクが高いことを示す。しかし、他者との関わりによって精神的な不健康に至りやすい彼らが、実際にどの程度、どのように、他者と関わる欲求を持っているのかについては十分に解明されていない。そこで本研究の目的は、SPPと対人依存欲求の関連を明らかにし、介入に繋がる視座を得ることとする。

竹澤・小玉(2004)は対人依存欲求を「是認、支持、助力、保証などの源泉として他人を利用しないし頼りにする程度」と定義している。対人依存欲求は、他者信頼感の高さや自尊感情の低さによって強まるとされる(竹澤・小玉, 2004; 寺島・小玉, 2007)。自分自身に価値を見出せない場合、自尊感情が低下し、それを補うために他者からのケアを過度に求めるといった不適応的なプロセスも論じられている(寺島・小玉, 2007)。SPP傾向が高い者は自尊感情が低い傾向にある(Flett et al., 1991)。そのため、周囲から課せられる高い期待に無理に応えようとした結果、自尊感情が低下し、他者にケアを求める欲求が強くなると予測される。しかし、この関係性は一様ではない可能性が

ある。自分は完璧でなくても、他者からケアを受けられる、受容される、と感じている(つまり他者信頼感が高い)場合には、SPP傾向が高くても過度な対人依存欲求には至らないと考えられる。

以上の背景から、本研究では以下の2つの仮説を設定した。(1)SPPは対人依存欲求と正の関連を示す。(2)他者信頼感のSPPと対人依存欲求の関係を調整する。具体的には、他者信頼感が高い場合に、SPPと対人依存欲求の正の関連が弱まる。

2. 方法

調査手続きと対象者

2024年10月、18~29歳の男女を対象に、Web上で質問紙調査を実施した。本研究では、縁故法で収集した146件と、調査会社モニターの150件を併せ、計296件を分析に使用した(年齢平均22.45歳、男性132名、女性164名)。両サンプルタイプにおいて、対象者の属性条件、質問紙内容、調査時期などは同一であった。分析モデルにサンプルタイプを共変量として投入することで、サンプリング法の違いを統制した。分析には、R 4.5.1を用いた。

本研究は、大阪大学大学院人間科学研究科教育学系研究倫理委員会の承認を得て実施した。

使用尺度

1. 日本語版多次元的完全主義尺度(大谷・桜井, 1995)の社会規定的完全主義15項目を使用した。
2. 対人依存欲求尺度(竹澤・小玉, 2004)の情緒的依存欲求10項目および道具的依存欲求10項目の計20項目を併せて対人依存欲求の変数とした。
3. 信頼感尺度(天貝, 1995)の他者信頼感8項目を使用した。

3. 結果

はじめに相関分析を行った。SPP と対人依存欲求の間には正の相関があり ($r = .27, p < .01$), SPP と他者信頼感の間には有意な相関はなかった ($r = .09, p = .14$)。対人依存欲求と他者信頼感の間には中程度の正の相関が見られた ($r = .48, p < .01$)。

次に, SPP と他者信頼感を独立変数, 対人依存欲求を従属変数とする階層的重回帰分析を実施した (Table1)。Step1 では, 共変量として年齢, 性別, サンプルタイプを投入した。Step2 では, SPP ($\beta = .19, p < .01$) と他者信頼感 ($\beta = .41, p < .01$) の有意な主効果がそれぞれ確認された。Step3 の最終モデルでは, SPP と他者信頼感において有意な交互作用が認められた ($\beta = -.12, p < .01$)。

確認された交互作用を詳細に検討するため, 年齢, 性別, およびサンプルタイプを統制した上で, 他者信頼感のレベルに応じた単純傾斜分析を行った。その結果, 他者信頼感が低い参加者 ($-1SD$) において, SPP は対人依存欲求を正に予測していた ($\beta = .30, p < .01$)。一方, 他者信頼感が高い参加者 ($+1SD$) においては, SPP と対人依存欲求の有意な関連は認められなかった ($\beta = .07, p = .24$)。

Table 1. 対人依存欲求を従属変数とする階層的重回帰分析の結果

	Step1		Step2		Step3	
	β	SE	β	SE	β	SE
1.年齢	-.07**	.02	-.06**	.02	-.05**	.02
2.性別	-.17	.10	-.18*	.09	-.14	.08
3.サンプルタイプ	-.28*	.13	-.04	.12	-.03	.12
4.SPP			.19**	.04	.18**	.04
5.他者信頼感			.41**	.05	.36**	.05
6.SPP×他者信頼感					-.12**	.03
R^2	.16**		.39**		.41**	
ΔR^2	—		.23**		.02**	

** $p < .01$, * $p < .05$

注1) ダミー変数: 性別 (男性 1, 女性 0), サンプルタイプ (調査会社モニター1, 縁故法による参加者 0)

注2) SPP と他者信頼感の変数は Z スコアに標準化して使用した。

4. 考察

本研究は, SPP と対人依存欲求の間に有意な正の関連があることを確認し, さらにこの関係が他者信頼感によって調整されることを示した。設定した2つの仮説は共に支持された。

まず SPP と対人依存欲求の間の正の関連については, 周囲からの高い期待を認知する SPP の個人が, 完璧でなければ見捨てられるというプレッシャーから, 他者を防衛的に繋ぎ止めようとする動機を強く働かせることで, 結果として対人依存欲求が顕著に高まったと解釈できる。今後は, 自尊感情や孤独感などの要因に着目し, SPP の対人依存欲求の適応性および不適応性を明らかにする。

加えて, 他者信頼感の高さが, SPP 傾向に伴って増強されるはずの対人依存欲求を有意に緩和する調整効果を持つことが示された。他者信頼感が高い場合, 完璧であることへのプレッシャーも和らぎ, 孤独や不安による対人依存欲求が抑制されると考えられる。これは, 完全主義による不適応は受容的環境によって回復できるという Greenspon (2014) の主張とも一致する。さらに, 他者信頼感の高い SPP 個人は, 他者との関わりが日常的に得られる可能性が高く, 社会的断絶モデル (Hewitt et al., 2006) で示されるような孤立や対人的不適応状態にも陥りにくいことが予想される。本研究を通して, SPP に起因する精神的不適応の予防介入における, 他者信頼感構築の重要性が示唆された。

文献

- 天貝由美子(1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響. 教育心理学研究, 43, 364-371.
- Hewitt, P. L., Flett, G. L., Sherry, S. B., & Caelian, C. (2006). Trait Perfectionism Dimensions and Suicidal Behavior. In T. E. Ellis (Ed.), *Cognition and suicide: Theory, research, and therapy*. pp.215-235.
- 大谷佳子・桜井茂男(1995). 大学生における完全主義と抑うつ傾向および絶望感の関係. 心理学研究, 66, 41-47.
- 竹澤みどり・小玉正博(2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討. 教育心理学研究, 52, 310-319.

ストレス状況におけるネガティブな感情の分化の種類と適応戦略の関係

岡村 百香¹・高橋 雄介¹

(¹京都大学 大学院教育学研究科)

Types of Negative Emotion Differentiation and Coping Strategies in Stressful Contexts

Momoka OKAMURA¹, Yusuke TAKAHASHI¹

(¹Graduate School of Education, Kyoto University)

1. 問題と目的

ネガティブな感情の分化 (Negative Emotion Differentiation; NED) とは、怒りや不安といった類似した感情を精緻に区別する能力であり、状況に応じた柔軟な感情制御を可能にすることで心理的な健康に重要な役割を果たす (Kalokerinos et al., 2019)。近年、NED には、心理的に近接した感情 (e.g., 怒りと苛立ち) を区別するカテゴリ内 NED と心理的距離の大きい感情 (e.g., 怒りと悲しみ) を区別するカテゴリ間 NED の、少なくとも 2 種類が存在することが指摘されている (Erbas et al., 2018)。Erbas et al. (2018) は、とりわけカテゴリ内 NED が心理的健康と負に相関することを報告し、これは過度に細分化されたカテゴリ内 NED は、ネガティブ感情への過剰な注意を通じて感情制御を困難にし、却って心理的健康を損なう可能性を示唆するものである。したがって、NED の種類ごとに心理的健康との関連を明らかにし、どの程度の感情分化が適応的であるのかを検討することは、心理的健康への介入を考える上で重要である。さらに、NED は安定した特性ではなく、日ごとに変動する (Erbas et al., 2018)。特に、前日のストレスが翌日の NED の低下を予測することが示されており、ストレス状況においては意図的に NED を低下させることが適応戦略となりうる可能性もある。しかしながら、このようなストレス状況における NED の個人差が、カテゴリ内 NED とカテゴリ間 NED のいずれに由来するのか、また、NED の種類によってストレス下における適応戦略が異なるかどうかについては依然として明らかではない。そこで本研究では、NED がストレス状況においてどのように変動し、カテゴリ内 NED とカテゴリ間 NED が心理的健康と異なる関連を示すかについて検討することを目的とした。

2. 方法

分析対象者と手続き クラウドソーシングサービスに登録している成人を対象にオンライン調査を実施した。参加者 626 名のうち、以下に示す質問項目のいず

れにも欠損値がなく、スクリーニング項目全てに正答した 590 名を有効回答として分析の対象とした。また、年齢の差を検討するため参加者は年齢によって若齢期 (19-35 歳; 男性 63 名, 女性 72 名, 平均年齢 30.8 歳, SD = 3.69) と壮齢期 (36-74 歳; 男性 230 名, 女性 225 名, 平均年齢 47.5 歳, SD = 8.33) という年齢群に群分けした。

調査項目と手続き 調査項目は、デモグラフィック項目 (年齢・性別)、調査で提示される感情語の辞書的意味理解を確認するスクリーニング項目 (10 項目)、ネガティブ感情 16 項目 7 件法 (Diener et al., 1995)、NED 測定課題としてネガティブ場面が記述された日本語版感情ビネット 15 場面 (田島他, 2024)、日本語版トロント・アレキシサイミア尺度 20 項目 5 件法 (小牧他, 2003)、ここ数日の間経験したストレスの指標として知覚されたストレス尺度 10 項目 5 件法 (鷺見, 2006)、適応感の指標として協調的幸福感尺度 9 項目 5 件法 (Hitokoto et al., 2014) から構成された。日本語版感情ビネットでは、1 場面ごとに 16 感情のスライダースケールが提示され、各感情をどれだけ感じたか「全く感じない」(0 点)~「非常に強く感じる」(7 点) で評定した。各ビネットと感情項目はそれぞれランダムに提示された。調査は京都大学心理学実験研究倫理審査委員会の承認を得て実施された。

3. 結果

カテゴリ間 NED およびカテゴリ内 NED と知覚されたストレス、そしてその交互作用が協調的幸福感尺度に与える影響について検討するため、NED の種類ごとに、年齢群と性別を step 1、各 NED と知覚されたストレス、ネガティブ感情のベースライン、アレキシサイミア傾向を step 2、各 NED と知覚されたストレスの交互作用項を step 3、各 NED と知覚されたストレスと年齢群を step 4 に投入した階層的重回帰分析を行った。なお、各 NED の指標として使用される ICC は通常 0 から 1 の数値を取り、負の値は信頼性が低く解釈不能

であるため(Giraudeau, 1996), ICCが負の参加者は先行研究(Kalokerinos et al., 2019)に準じて分析から除外した(それぞれ $n=256, n=10$)。まず, 協調的幸福感に対して, カテゴリ間 NED とネガティブ感情のベースラインはいずれも主効果を示さなかったが(それぞれ $\beta = -.05, p = .25, \beta = -.03, p = .53$), アレキシサイミア傾向, 知覚されたストレスは負の影響が確認された(それぞれ $\beta = -.16, p < .01, \beta = -.54, p < .01$)。カテゴリ間 NED と知覚されたストレス, カテゴリ間 NED と知覚されたストレスと年齢群の交互作用はいずれも有意でなかった(それぞれ $\beta = .02, p = .66, \beta = .03, p = .56$)。次に, カテゴリ内 NED に関しては, カテゴリ内 NED は主効果を示さなかったが($\beta = -.02, p = .53$), ネガティブ感情のベースライン, アレキシサイミア傾向, 知覚されたストレスからは負の影響が確認された(それぞれ $\beta = -.10, p < .01, \beta = -.13, p < .01, \beta = -.51, p < .01$)。また, カテゴリ内 NED と知覚されたストレス, カテゴリ内 NED と知覚されたストレスと年齢群の交互作用はいずれも有意でなかった(それぞれ $\beta = -.02, p = .52, \beta = .06, p = .05$)。

4. 考察

本研究は, ネガティブ感情の分化をカテゴリ内とカテゴリ間に区別し, それぞれが知覚されたストレスおよび心理的適応指標としての協調的幸福感とどのように関連するかを検討した。その結果, カテゴリ内とカテゴリ間いずれの NED も協調的幸福感を説明せず, また 2 次・3 次の交互作用も有意ではなかった。その一方で, アレキシサイミア傾向や知覚されたストレスが一貫して協調的幸福感の低さを説明することが示され, 感情分化そのもの以上に, 感情を言語化して把握する能力や日常的ストレスの負荷が心理的適応において中心的な役割を担うことが明らかになった。これらの結果は, NED が必ずしも一律に適応的に機能するわけではないことを示すとともに, 分化の粒度の細かさそのものを介入の直接的な目標とするよりも, アレキシサイミア傾向の改善やストレスマネジメント支援といった介入が有効である可能性を示唆している。また, Erbas et al. (2018)は, カテゴリ内 NED がネガティブ感情を過剰に精緻化し, 感情制御を却って困難にすることで心理的健康に負の影響を与えると指摘したが, 本研究ではそのような関連は認められなかった。この不一致は, ストレス状況下における NED の協調的幸福感への影響が個人や状況に応じて変動しうることを反映している可能性がある。例えば, ストレスが慢性的

か一過的吗, 感情分化の対象となる情動が社会的要因に起因するのか, あるいは個人的要因に基づくのかといった文脈的特徴が NED の機能を左右していることが考えられる。さらに, 感情には文化差が存在することから(Kitayama et al., 2000), 欧米で多く報告されてきた NED の効果は個人主義的価値観や感情表出の志向性と反映している可能性が高い一方で, 感情の精緻な区別が必ずしも社会的適応と直結しない集団主義的文脈においては異なるパターンが生じることが考えられる(Park et al., 2025)。加えて, 本研究では年齢群の違いを検討したが, カテゴリ内 NED・カテゴリ間 NED いずれにおいても, ストレスや協調的幸福感との関連の違いは確認されなかった。このことは, 感情分化の効果が青年期から壮年期にかけて大きく変化するわけではなく, むしろ感情の言語化能力や日常的なストレス水準といった要因のほうが心理的適応に強く影響することを示唆する。先行研究では加齢に伴い感情の複雑さや混合感情の経験が増加する一方, それを適切に区別する能力が発達に追いつかない可能性が指摘されている(Nook et al., 2018)。本研究で年齢群間に明確な差が認められなかった背景には, 感情分化の発達の側面が横断データでは十分に捉えられなかったためと考えられる。今後は縦断研究により NED の発達の変化とその適応的機能を精緻に追跡することが重要である。

引用文献 (主要なもののみ)

- Erbas, Y., Ceulemans, E., Blanke, E. S., Sels, L., Fischer, A., & Kuppens, P. (2018). Emotion differentiation dissected: Between-category, within-category, and integral emotion differentiation, and their relation to well-being. *Cognition and Emotion*, 33(2), 258–271.
- Erbas, Y., Ceulemans, E., Kalokerinos, E. K., Houben, M., Koval, P., Pe, M. L., & Kuppens, P. (2018). Why I don't always know what I'm feeling: The role of stress in within-person fluctuations in emotion differentiation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 115(2), 179–191.
- Kalokerinos E. K., Erbas Y., Ceulemans E., Kuppens P. (2019). Differentiate to regulate: Low negative emotion differentiation is associated with ineffective use but not selection of emotion-regulation strategies. *Psychological Science*, 30(6), 863–879.
- Park, J., Li, Y., Choi, Y., Na, J., Zhu, Y., & Martin, A. (2025). Cultural shaping of emotion differentiation: Socially engaging and disengaging emotions. *Emotion*. Advance online publication

大学生における過去自己連続性とアイデンティティの感覚の経時的関係

浅山慧^{1,2}・外山美樹¹

(¹筑波大学・²北海道教育大学)

Longitudinal Associations between Past Self-Continuity and Sense of Identity among University Students

Akira ASAYAMA^{1,2}, Miki TOYAMA¹

(¹University of Tsukuba, ²Hokkaido University of Education)

1. 問題と目的

アイデンティティ形成とは、アイデンティティの混乱から統合へと向かうプロセスであり、青年期においては特に重要な発達上の課題とされる (Erikson, 1968)。アイデンティティ形成にはいくつかの側面があるが、そのうちの一つに、時間的なつながりの感覚である連続性の構築、すなわち時間的統合がある (Syed & McLean, 2016)。時間的統合は、未来の自己に向けて過去と現在を結びつけるプロセスであるともされており、アイデンティティ形成における過去－現在の時間的統合の重要性が指摘されている (McLean & Pasupathi, 2012)。

過去－現在の連続性、すなわち過去自己連続性には、これまでの人生が一つの物語として捉えられることを根拠として理由づけられる側面 (物語性に基づく連続性) と、自己の本質的な要素の安定性を根拠として理由づけられる側面 (安定性に基づく連続性) がある (Asayama & Toyama, 2025; Chandler et al., 2003)。肯定的な自己物語の構築がその後のアイデンティティの感覚の高さと関連することを踏まえれば、物語性に基づく連続性の高さはアイデンティティの感覚の高さを予測することが想定される (Booker et al., 2024)。また、本来感や自己概念の明確性といった自己の本質に対する確信が高いほど、アイデンティティの感覚が高いことも示されており、安定性に基づく連続性の高さもアイデンティティの感覚の高さと関連する可能性がある (藤野, 2022; Pilarska, 2016)。そこで、本研究では交差遅延効果モデルを用いて、これらの経時的関係について検討した。

2. 方法

参加者と調査手続き

大学生を対象に、6ヶ月間隔で2回のweb調査を実施した。1時点目に回答した1811名のうち、2時点目にも回答した302名 (女性199名、男性101名、その他2名、 $M_{\text{age}} = 20.63$, $SD_{\text{age}} = 1.47$) を分析対象者とした。本研究は、筑波大学人間系倫理委員会の承認を得て実施された (課題番号: 筑2022-206A)。

尺度

過去自己連続性 過去自己連続性尺度 (Asayama & Toyama, 2025) を用いた。「物語性」下位尺度5項目 (e.g., これまでの自分の人生を、一筋のストーリーとして捉えることができる) と「安定性」下位尺度5項目 (e.g., 現在の自分の価値観は、昔から変わっていない) に対して、6件法で回答を求めた。

アイデンティティの感覚 エリクソン心理社会的段階目録 (第5段階) (Rosenthal et al., 1981) の邦訳12項目版 (畑野他, 2014) を用いた。「統合」下位尺度6項目 (e.g., 私は自分がどんな人間であるのかを知っている) と「混乱」下位尺度6項目 (e.g., 私は、人生をどのように生きたいのかを自分で決められない) に対して、5件法で回答を求めた。

3. 結果

過去自己連続性とアイデンティティの感覚の関係について、交差遅延効果モデルを用いて検討した (Figure 1; 飽和モデル)。過去自己連続性からの交差遅延パスについては、物語性から統合へのパス係数が正の値 ($\beta = 0.11$, $p = .028$)、そして安

定性から混乱へのパス係数が負の値 ($\beta = -0.11, p = .016$) で統計的に有意であった。また、アイデンティティの感覚からのパスについては、統合から物語性へのパス係数が正の値 ($\beta = 0.14, p = .028$) で統計的に有意であった。

4. 考察

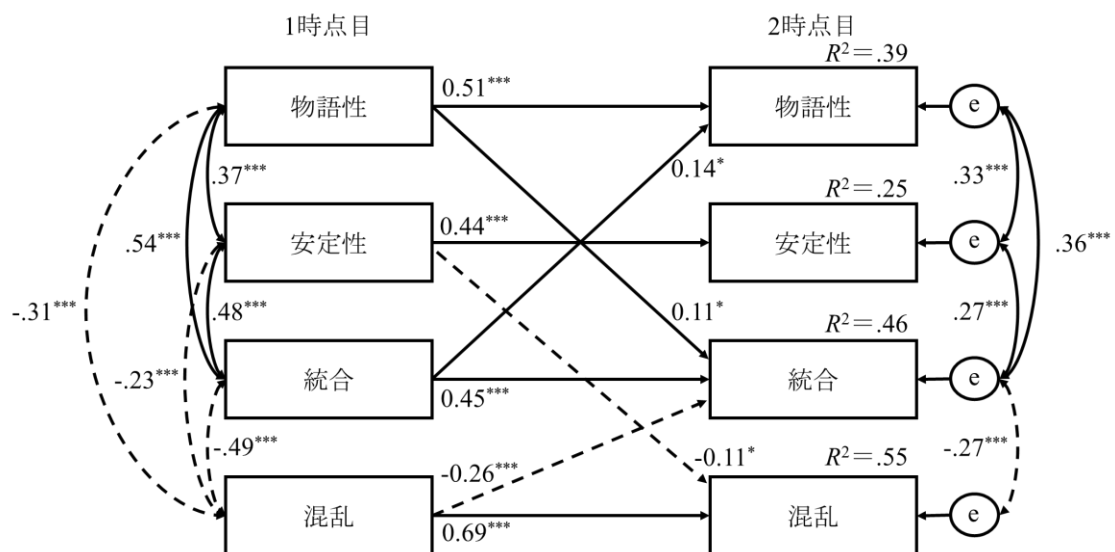
本研究の結果、過去自己連続性とアイデンティティの感覚の間に経時的関係があることが明らかになった。まず、物語性に基づく連続性が高い人ほど、様々な自己を統合しやすく (Erikson, 1968), そのために、その後の統合の感覚の高さとの関連が見られたと考えられる。さらに、逆方向の正の関連も見られ、統合の感覚が高く自己の生き方や在り方が明確である人ほど、明確な主題に沿って経験を意味づけやすく (McAdams, 2011), その後の物語性に基づく連続性が高いことが示唆された。一方で、安定性に基づく連続性が低い人ほど、その後のアイデンティティの混乱の感覚が高いことが明らかになった。自己像が不安定な人ほど反芻的思考に陥りやすく、アイデンティティの混乱の感覚が高いことが横断研究で示されており (柴田, 2023), その関係が縦断データでも支持されたといえる。

文献

- Asayama, A., & Toyama, M. (2025). Development of past self-continuity scale from narrative and essentialist perspectives. *Journal of Personality Assessment*. Advance online publication.
- Booker, J. A., Fivush, R., Greenhoot, A. F., McLean, K. C., Wainryb, C., & Pasupathi, M. (2024). Emerging adults' journeys out of the shutdown: Longitudinal narrative patterns in a college career defined by COVID-19. *Developmental Psychology*, 60(10), 1870–1884.
- Chandler, M. J., Lalonde, C. E., Sokol, B. W., & Hallett, D. (2003). Personal persistence, identity development, and suicide: A study of Native and non-Native North American adolescents. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 68(2), vii–130.
- 藤野 遼平 (2022). 現代青年における自己の多元性の分類とアイデンティティの関連 青年心理学研究, 33(2), 87–104.
- Pilarska, A. (2016). How do self-concept differentiation and self-concept clarity interrelate in predicting sense of personal identity? *Personality and Individual Differences*, 102, 85–89.

Figure 1

過去自己連続性とアイデンティティの感覚の経時的関係についての交差遅延効果モデル



注) 有意なパスのみ記載した。パス係数と共分散は全て標準化された値である。* $p < .05$, *** $p < .001$

両親及び友人に対する過剰適応と母親のアタッチメント機能および自律性支援に関する縦断的検討

風間惇希

(三重大学)

A Longitudinal Study of Over-Adaptation Towards Significant Others (Parents and Peers) and Maternal Attachment Function and Autonomy Support

Junki KAZAMA

(Mie University)

1. 問題と目的

アイデンティティをはじめ「自分をつくる」ことが求められる青年期において、「よい子」や「優等生」として生きることは、周りから称賛される生き方である一方、「内的死」や「実存的死」への道に自らを導き、挫折への可能性を幾重にも伴う生き方である、と春日(1997)は論じた。

青年期は、身体的・心理的・社会的変化が著しい発達段階とされ、それに伴い様々な心理社会的問題が生じやすい時期であるが、不適応や心理社会的問題を呈する青年や成人の中には、周囲に適応しようとするあまり、自身の欲求や気持ちを過度に抑えてしまうような「過剰適応」状態だった者がしばしば見られる。宮本(1989)は「必要以上に周囲の期待に応えようとしたり、そのために過度に自己抑制的になるなど、バランスのとれた適応を通りすぎて過剰な適応に至った様態」を「過剰適応」と位置付けた。

青年期における過剰適応問題は、その背景として自己不全感や本来感といった自己に関わる要因や、見捨てられ不安や承認欲求、学校や家庭での居場所感のなさといった対人関係に関わる要因が報告されている。McElhaney et al. (2009) は、青年期の自律性とアタッチメントを論じる中で、親や友人、恋人の「安全な避難所 safe haven」(苦痛を感じた際に迎え入れ和らげる支援)及び「安心の基地 secure base」(自律的な探索に送り出す支援)機能が感情的安定や自律性をもたらすと論じた。同じく Feeney (2004)は、「成人期における安心の輪」を提唱し、支援者の安全な避難所機能が

ストレスや苦痛を感じた際の感情的安定を、安心の基地機能が自律的な探索行動やポジティブな自己概念を促すことを提唱した。他方、自己決定理論の下位理論にあたる基本的心理欲求理論 (Ryan & Deci, 2017) においては、周囲の他者からの自律性支援的な関わりが個人の well-being につながることを主張している。

重要他者との関係の中で、青年個人による周囲への適応努力の中で抱いたストレスや苦痛が受け止められ、その後の現実場面への適応を見守り後援してくれる関係を持てており、その関係がポジティブな自己や自律性の促進、醸成に寄与する性質のものであれば、その他者への過剰適応行動は低減されるのではないかと。また、それ以外の関係における過剰適応現象にも影響するのではないかと。

本研究では、母親の「アタッチメント機能」及び「自律性支援」を想定し、両親及び友人に対する過剰適応行動やそれに伴う心理的要因(自己不全感)に対して、母親のアタッチメント機能及び自律性支援がどのように影響を及ぼすのかを縦断研究によって検証する。

2. 方法

調査対象及び手続き 中学生・高校生・大学生 (1 時点目: 399 名, 2 時点目: 296 名, 3 時点目: 248 名)を対象とし、2023 年 6 月, 10 月, 2024 年 2 月の 3 時点の縦断調査をオンライン上で実施した。今回は、後述の質問紙 (c) (d)にて、重要他者として母親を選択した 393 名 (中学生 148 名, 高校生 125 名, 大学生 120 名) を分析対象とした。

質問紙の構成 (a)両親及び友人に対する過剰適応行動：風間・平石 (2018)や石津・安保 (2008)等の尺度を参照し作成した「青年期全般用関係別過剰適応行動尺度」12 項目、(b)自己不全感：石津・安保 (2008) の過剰適応尺度のうち自己不全感を測定する尺度項目 6 項目、(c)重要他者のアタッチメント機能：山口 (2009) の愛着機能尺度 10 項目、(d)重要他者の自律性支援：肖・外山 (2020) の「日本語版欲求支援・阻害行動尺度」のうち、自律性支援行動を測定する 4 項目

3. 結果と考察

今回は、3 時点の縦断データを交差遅延効果モデルによって分析した。母親・父親・友人に対する過剰適応を区別したモデルを作成し、(a)等値制約なし、(b)等値制約あり（切片・分散を制約）、(c)等値制約あり（切片・分散・自己回帰パスを制約）、(d)等値制約あり（切片・分散・全てのパスを制約）モデルの適合度を比較した。最終的には、3 つのモデル全てにおいて最も適合度が高かった (d)のモデルを採用した (Figure 1,2,3)。

まず、過剰適応行動の対象にかかわらず、(1)自己不全感によって両親や友人に対する過剰適応行動が高まること、(2) 自信のなさや自分らしさがないといった自己への不全感、主観的に認知される母親のアタッチメント機能を減弱させること、が共通点として示唆された。過剰適応行動と自己不全感の因果関係については様々な議論があったが、今回の結果は、自己不全感が過剰適応行動に影響を及ぼすことを支持する結果であった。

続いて、関係別に見てみると、(1)母親への過剰適応行動によって主観的に認知された母親からの自律性支援が抑制されること、(2)主観的に認知された母親の自律性支援によって父親及び友人に対する過剰適応行動が低減すること、一方で(3)母親による青年の苦痛を受容し安心させてくれる関わりによって、友人への過剰適応行動が促進されること、(4)友人に対する過剰適応行動によって自己不全感が高まること、が示唆された。今回の結果から、過剰適応行動によって受け手側の関わりも変化すること、青年個人の自律的・主体的な行動

を支える母親の関わりにより、他の関係における過剰適応行動が減弱すること、苦痛を受け入れ和らげてくれる母親の存在が、友人への過剰適応を促進すること、つまり友人関係への適応努力を後援する側面もあることが考察された。

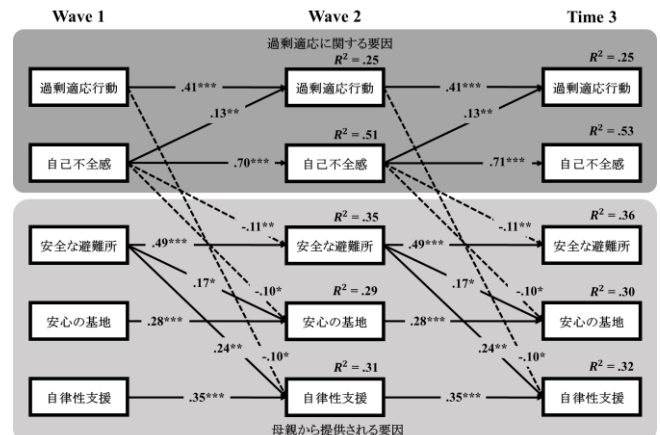


Figure 1 母親に対する過剰適応と母親のアタッチメント機能・自律性支援に関する交差遅延効果モデル
注) $\chi^2(60) = 135.745^{***}$, CFI = .973, RMSEA = .058, AIC = 285.745, BCC = 292.339
有意でないパス及び誤差項は省略した。実線は正の関連、点線は負の関連を示したパスである。
* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

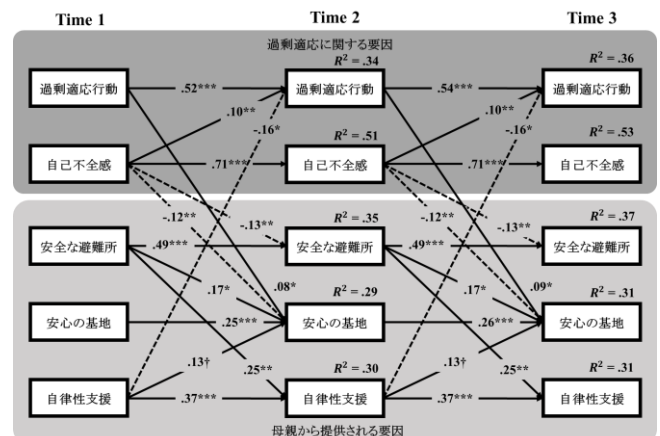


Figure 2 父親に対する過剰適応と父親のアタッチメント機能・自律性支援に関する交差遅延効果モデル
注) $\chi^2(60) = 137.259^{***}$, CFI = .973, RMSEA = .058, AIC = 287.259, BCC = 293.852
有意でないパス及び誤差項は省略した。実線は正の関連、点線は負の関連を示したパスである。
† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

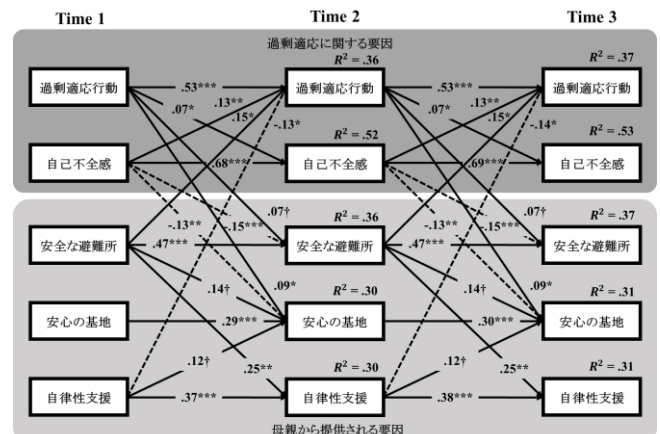


Figure 3 友人に対する過剰適応と友人のアタッチメント機能・自律性支援に関する交差遅延効果モデル
注) $\chi^2(60) = 145.505^{***}$, CFI = .971, RMSEA = .061, AIC = 295.505, BCC = 302.099
有意でないパス及び誤差項は省略した。実線は正の関連、点線は負の関連を示したパスである。
† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

歯科矯正における成人日本女性患者の心理的特徴

鈴木 光海

(東北大学大学院教育学研究科)

Psychological Characteristics of Adult Female Japanese Patients in Orthodontics

Komi Suzuki

(Graduate School of Education, Tohoku University)

1. 問題と目的

本研究の目的は、歯科矯正における成人日本女性治療患者の心理的特徴を、患者の語りから明らかにすることである。歯科矯正は、単なる医学的処置に留まらず、審美を目的とする点で、特異性をもつ。また、成人治療は児童期における歯科矯正とは異なり、患者の自己決定や意思が重視される点で心理的にも異なる特徴が想定される。

2017年からの3年間で歯科矯正における新規患者数は3倍となっており、ルッキズムおよび美容整形ブーム、歯科矯正治療方法の変化および低額化が複合的に影響しつつ、今後さらなる患者数増加が考えられる。また海外の研究においては、審美目的の治療が多いとされているが、日本ではそもそも見た目の話はタブーであり、外見修正へのためらいや、美容整形に対する偏見、歯科矯正が保険適用外とされてきた歴史的背景からも、審美目的の歯科矯正治療とは言い切れない部分がある。こうした中で歯科矯正のもつ医療性は、審美を求めることへの羞恥心を和らげる役割を果たす可能性があることも考えられる。これが日本人患者特有の治療動機や心理につながっている可能性がある。さらに、アピアランス〈問題〉と自尊心の関連は重要なテーマである。近年の日本人における自尊心の低下と美容整形・歯科矯正のブームとの関連、環境および周囲に対する患者自身の認識やライフイベントが自尊心に与える影響も考慮し、これらの関連性を多角的に検討したい。

本研究により、特に日本人女性患者特有の心理的特徴を明らかにすることで、歯科矯正における成人患者への心理的ケアや意思決定プロセスの改善に貢献することも期待される。

2. 方法

半構造化インタビューを行った。対象は就職結婚妊娠出産に伴う環境の変化や大きなライフイベントに伴い自己の変容および発達と考えられる20代から30代の女性患者10名とした。アピアランス〈問題〉とジェンダーに有意な差はない(Alex et al, 2018)ものの、社会文化的背景から、日本には未だ根強い女性観・男性観および歯への意識と性との関連、女性患者の多さ(厚生労働省, 2022)が考えられたことから、女性のみを対象に試みた。また、マウスピース型の矯正治療ではなく、ワイヤーとブラケットを用いた従来型の治療の後期にあり、一定期間の治療経験を得た者を対象とした。インタビューは1回60分～90分程度で、一人につき3回実施した。内容は、治療の動機、自己決定に関わる内容、人間関係、ライフイベントの有無と内容、歯科矯正に対する考え、医療スタッフとの関係性、治療に伴う苦痛、審美と医療についての7項目として、インタビューガイドに基づき実施された。得られる回答に応じ、さらに質問をひろげながら、語りを収集・録音した。

同時に自尊感情尺度(山本ほか, 1982)・自己肯定意識尺度(平石, 1990)・自己受容測定尺度(沢崎, 1993)を用いた質問紙調査も実施した。得られた回答を単純に得点として分析するほかに、適宜、尺度項目をそのまま使用しインタビューをひろげた。得られた逐語録とあわせ分析を行った。

なお、本研究は所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施された。研究参加は任意であり、参加者にはいつでも同意を撤回できる権利があることを十分に説明し、同意を得た。公表に際しては、個人が特定されないよう配慮を行っている。

3. 結果

表1. 患者の年齢および自尊感情・自己肯定意識・自己受容尺度得点の平均 (n=10)

	Range	Mean	SD	Min	Max
年齢	20~39	29.4	4.70	25	39
自尊感情	10~50	32.8	6.32	23	41
自己受容	4~20	15.5	2.55	11	19
自己実現的態度	7~35	22.3	4.95	14	29
充実感	8~40	30.3	5.10	19	38
自己閉鎖性・人間不信	8~40	16	5.27	10	26
自己表明・対人的積極性	7~35	24.6	2.27	22	28
批評意識・対人意識	7~35	18.5	5.13	11	27
身体的自己	8~40	25.6	6.15	14	35
精神的自己	15~75	48.6	8.66	34	58
社会的自己	7~35	26	5.83	17	33
役割的自己	3~15	10.2	2.15	7	14
全体的自己	2~10	5.9	1.20	4	8
(自己受容得点合計)	35~175	116	19.86	89	141

治療動機として、全員が健康の向上を挙げた。審美を治療動機として述べるより先に、健康や医療性についての言及があった。一方で、インタビューが進むにつれ、審美や見た目に関する動機にまつわる語りが増加していった。これは、海外における先行研究の結果とは一致しない。

動機として健康・医療面のみを挙げた1名を除き、9名が歯科矯正以外の審美にまつわる治療および外見修正を希望していた（整形済みの者も含む）。美容皮膚科（ほくろ・しみの除去、ピーリングなど）の受診経験は100%であった。

また歯科矯正治療の開始前後の数か月間において、ネガティブかつ比較的大きなライフイベントを経験した者が10名中7名であった。具体的な内容としては、家庭内不和（近親者の不貞および浮気の認知も含む）、結婚式の中止（感染症対策のため）、退職勧奨、パワーハラスメント、転職の失敗などである。これらが一時的に自尊感情および自己肯定意識を低下させたことも考えられる。

さらに治療による痛み、さまざまな苦痛も語られた一方で、それらにより治療の進行や自己効力を実感し、安心感を得ている様子も示された。

4. 考察

質問紙調査およびインタビュー調査で得られたデータの分析から以下の3つの示唆が得られた。

①自らの歯並びを問題として認識したまま一定期

間が過ぎ、自己を揺るがすようなライフイベントの前後数か月に歯科矯正を決意した自尊感情および自己肯定意識、自己受容の低群または一時低下群と、歯並びを問題として認識せず、歯科学的な健康上の理由または緊急に歯科矯正治療を必要とするという、合理的かつ明確な目的から歯科矯正を決意している非低群が存在している可能性②歯科矯正治療は医療であるという点に重きを置き美容整形とは異なると対外的にも強調することで、揺らぐ自己を堅固に保っている患者の心理的状態③治療による痛み、高額の治療費用の支払い、鏡で観察される歯列の変化という物理的変化が治療へのモチベーションや自己を高めている可能性、以上3点が成人日本女性の歯科矯正患者の心理的特徴として示唆された。

文献

- 平石賢二. (1990). 青年期における自己意識の発達に関する研究 (1). 自己肯定性次元と自己安定性次元の検討- 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学), 37, 217-234.
- Johal, A., Alyaqoobi, I., Patel, R., & Cox, S. (2015). The impact of orthodontic treatment on quality of life and self-esteem in adult patients. *European journal of orthodontics*, 37(3), 233-237.
- 仁平義明. (2003). 矯正歯科治療が持つ医療としての9つの特異性. *日本臨床矯正歯科医会雑誌* 14(2), 39-43.
- 小塩真司, 岡田涼, 茂垣まどか, 並川努, & 脇田貴文. (2014). 自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響- Rosenberg の自尊感情尺度日本語版のメタ分析 -. *教育心理学研究*, 62(4), 273-282.
- 中間玲子. (2013). 自尊感情と心理的健康との関連再考- 「恩恵享受的自己感」 の概念提起 -. *教育心理学研究*, 61(4), 374-386.
- Pabari, S., Moles, D. R., & Cunningham, S. J. (2011). Assessment of motivation and psychological characteristics of adult orthodontic patients. *American Journal of Orthodontics and Dentofacial Orthopedics*, 140(6), e263-e272.

成人期前期におけるひとりでいられる能力の検討

吉田加代子

(立正大学心理学部)

The Capacity to Be Alone in early adulthood

Kayoko YOSHIDA

(Rissho University)

1. 問題と目的

ひとりでいられる能力 (Capacity to be alone ; 以下, CBA) とは, Winnicott (1958) によって提唱された概念である。吉田 (2014) は「現実には一人の状態への不安 (孤の不安) を感じないでいれることと自律性を失い不安 (個の不安) を感じることなく現実に親密な他者といれることまたは親密な関係を維持できること」と定義して尺度を作成, CBA の違いによる孤独感や友人関係のあり方を検討している (吉田, 2023)。

ところで, Erikson (1980) は成人期前期の発達のテーマを「親密性 vs 孤立」とし, 他者と親密な関係を築くためには青年期に形成される同一性の感覚が前提となるとしており, 谷・原田 (2011) でもそれを支持する結果がえられている。CBA についても, 青年期におけるアイデンティティの形成により自他の個別性が明確になることで, 成人期前期には個の不安が低下し, CBA が高まることが推測される。しかし, これまで青年を対象とする研究が多く (野本, 2000 ; 尾花・小波蔵, 2023), 成人期前期についての研究は見当たらない。

以上のことから本研究では, 成人期前期を対象に, CBA の違いによる個別性の気づき, 孤独感, 友人関係のあり方, ひとりで過ごすことへの感じ方の差異を検討し, その様相を明らかにすることを目的とする。なお, 本研究では成人期前期を 25～34 歳とし, さらに青年期後期と区別するため宗田・岡本 (2023) を参考に, 何らかの職に就いている又は既婚者とする。

2. 方法

調査の概要 : 2025 年 3 月にクラウドソーシングサービス (クラウドワークス) を通じて, 25～34 歳

の社会人を対象とするアンケート調査の協力者を募集, Google フォームで作成された調査票への回答を求め, 299 名の回答が得られた。なお, 倫理的配慮として, 研究の目的, 協力の自由, 個人情報保護などについて文章で説明し, 同意を得た。

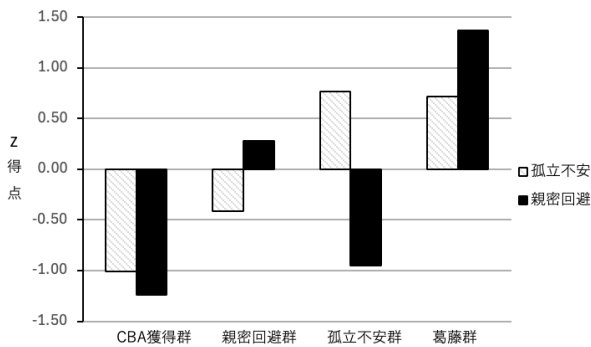
調査内容 : ①基礎項目 : 年齢, 性別, 就労状況, 婚姻状況 ②CBA について : 吉田 (2023) の「親密さの不安」「孤立への不安」から成るひとりでいることへの不安尺度 22 項目版 (22 項目, 7 件法)。原家族以外で, 最も親密な人を思い浮かべて各項目に回答するよう求めた。③友人関係について : 大谷 (2009) の友人関係における切替尺度から自己・対象切替それぞれ 3 項目を選定 (6 項目, 7 件法)。④個別性の気づき : 落合 (1983) の個別性の気づきに関する項目 (LSO-E) (6 項目, 5 件法) ⑤孤独感 : Igarashi (2019) の The Japanese version of the three-item loneliness scale の邦訳版 (3 項目, 3 件法) ⑥ひとりで過ごすことへの感じ方 : 独りの空間及び周囲に他者がいる空間で, ひとりで過ごすことに対する抵抗感を尋ねる項目を独自に作成 (4 項目, 6 件法)

3. 結果

分析対象者 : 回答に不備があるものを除き, 本研究における成人期前期の定義に基づいて 289 名 (男性 116 名, 女性 171 名, その他 2 名) を分析対象とした (平均年齢=30.53, $SD=2.61$)。婚姻状況は未婚 133 名, 既婚 156 名であった。就労状況は, 常勤 197 名, 非常勤 58 名, 家事専業 22 名, 自営業・フリーランス 10 名, その他 2 名であった。

尺度の分析 : α 係数が自己切替, LSO-E で低い値となったが, 一部項目を削除したところ $\alpha=.632 \sim .911$ となり, 十分ではないもののある程度以内

Figure1 各群の孤立不安・親密回避の得点



的一貫性が確認された。

CBAの類型化：「親密さの回避」「孤立への不安」得点を用いてクラスター分析（Ward法）を行い、デンドログラムより4クラスターに分類可能と判断した。各クラスターの特徴から、第1クラスターをCBA獲得群（32名：11%）、第2クラスターを親密回避群（138名：48%）、第3クラスターを孤立不安群（70名：24%）、第4クラスターを葛藤群（49名：17%）と命名した（Figure1）。

成人期前期におけるCBAの様相：CBA4群を独立変数、各指標を従属変数とする一要因分散分析を行なった（Table1）。個別性の気づきで有意差がみられ（ $F(3,285)=9.279, p<.001$ ）、多重比較の結果、孤立不安群に比べて親密回避群・葛藤群の方が高かった。友人関係における切替は、自己切替（ $F(3,285)=3.184, p=.024$ ）と対象切替（ $F(3,285)=8.503, p<.001$ ）のいずれも有意差がみられ、自己切替はCBA獲得群に比べて葛藤群が、対象切替はCBA獲得群に比べて他3群が切替を行っていた。孤独感（ $F(3,285)=15.507, p<.001$ ）でも有意差がみられ、多重比較の結果、CBA獲得群・孤立

不安群に比べて親密不安群・葛藤群がより孤独を感じていた。ひとりで過ごすことへの感じ方は全てで有意差がみられ（自室 $F(3,272)=10.216, p<.001$ ；職場空き時間 $F(3,268)=5.410, p=.001$ ；職場昼食 $F(3,272)=7.949, p<.001$ ；街中飲食店 $F(3,274)=5.786, p=.001$ ）、独りの空間でも他者がいる状況でも、他3群に比べて葛藤群が抵抗を強く感じていた。

4. 考察

成人期前期において、孤の不安も個の不安も低いCBA獲得群は、他群に比べて人間の個性の気づきが中程度でありながら、孤独感が低く、友人関係における自己や対象の切替をしない傾向が示された。しかし、高校生・大学生を対象に同様の調査を実施した吉田（2023）では差がみられていた自己切替や孤独感において、孤立不安群や親密回避群との間に差がみられなかった。さらに、統計的な検定を行うことができなかったものの、親密回避群の割合の増加、「孤立への不安」「親密さの回避」得点が上昇したこと等、成人期前期には不安が緩和するという予想とは異なる結果となった。畑野他（2020）、富井・小塩（2025）でも青年期後期から成人期にかけて孤独感や混乱の感覚が高まることが示されており、青年データとの比較や成人期前期の発達の多様性を踏まえたさらなる検討が望まれる。

文献

Winnicott, D. W. (1958). The Capacity to be Alone. *International Journal of Psychoanalysis*, 39, pp.416-420.

Table 1 CBA4群の各尺度の得点及び一要因分散分析の結果

	CBA獲得群		CBA未獲得						全体		F	p	η^2	多重比較
	M	SD	孤立不安群		葛藤群		親密回避群		M	SD				
ひとりでいること	22.44	4.44	41.03	9.17	40.51	7.84	28.70	8.02	33.00	10.47	69.972	.000	.42	獲得<親<葛<孤
への不安	19.66	4.88	23.51	6.15	54.02	5.57	39.67	7.57	35.98	13.17	278.571	.000	.75	孤<獲得<葛<親
個性の気づき※1	17.53	4.51	16.47	4.17	19.18	3.43	19.23	3.63	18.37	4.00	9.279	.000	.09	孤<親<葛
友人関係における	7.78	3.11	8.53	2.94	9.59	2.24	8.75	2.55	8.73	2.70	3.184	.024	.03	獲得<葛
切替志向	8.88	3.59	10.94	3.76	12.78	3.68	11.49	3.22	11.28	3.61	8.503	.000	.08	獲得<3群, 孤<葛
孤独感	4.22	1.54	4.89	1.72	6.39	1.69	5.86	1.73	5.53	1.83	15.506	.000	.14	獲得<孤<葛<親
ひとりになること	1.89	1.48	2.02	1.26	3.29	1.54	2.08	1.47			10.216	.000	.10	
への抵抗感※2	2.07	1.46	3.22	1.49	2.28	1.45	2.35	1.45			5.410	.001	.06	3群<葛
	2.17	1.58	2.39	1.56	3.53	1.43	2.42	1.51			7.949	.000	.08	
	2.30	1.37	2.60	1.42	3.33	1.24	2.47	1.30			5.785	.001	.06	

※1 落合（1983）と異なり、「いいえ」（1点）～「はい」（5点）で得点化

※2 「日常生活で、そうした機会や時間がない」を除き、1～5点で得点化

他者の経験から学ぶ態度を測定する試み —尺度作成の初期検討—

溝口 侑¹

(¹ 関西大学)

Exploring the Measurement of Attitudes Toward Learning from Others' Experiences: A Pilot Study on Scale Development

Yu MIZOGUCHI¹

(¹Kansai University)

1. 問題と目的

ライフコースや価値観の多様化の進む現代社会において、若者は自らの責任で将来のキャリアをデザインすることが求められている(熊代, 2012)。一方で、これから社会に出ていく若者にとっては、様々な生き方を知った上で自らの生きる軸を定めることが重要である(児美川, 2013)。人は他者の行動を観察し、モデリングを通して示範事例からルールを抽出し、新しい行動を学習するとされている(Bandura, 1971, 原野・福島訳, 2020)。このように、個別の活動や選択のような具体的な行動に対して、他者の経験を知ることは有用であると考えられる。また、キャリア選択のように機会に限られ、繰り返し行うことが困難な課題については、自らの達成経験を効力感の源泉とすることは難しく、先輩などの経験を聞くといった代理的经验が有効な方法と考えられている(浦上, 1996)。しかし、キャリアデザインにおいては、自らの将来の目標や価値観に照らし合わせて、他者の経験を自分のキャリアにどのように活かすかを考える必要がある。にもかかわらず、このような他者の経験の活用については十分に研究されているとは言い難い。

同様に、経験学習の研究においても、直接経験を対象とする研究が多く、間接(他者)経験からの学びについては十分に検討されていない。数少ない間接経験に焦点を当てた研究においても、課題への取り組み方(藤村, 2015)や、自発的な学習行動(長谷川・三沢, 2024)といった具体的な行動に関する検討が中心であり、キャリアデザイン

のような抽象度の高い領域における研究は見られない。

キャリアデザインにおいて他者の経験を学び、活かすことを促すためには、どのような態度が重要であるかを明らかにし、そのような態度を育むためのプログラムを設計する必要がある。そこで本研究では、キャリア教育の実践に貢献することを目指して、大学生がキャリアデザインにおいて他者の経験から学ぶ態度を測定する尺度の試案を作成する。

2. 方法

調査対象 私立A大学の主に初年次生を対象とする共通教養科目 2 クラスの履修者を対象とした。最終授業回の最後に質問紙を配布し回答を依頼した。回答した41名(1年生: 29名; 2年生: 12名)を分析対象とした。

調査項目 a. 他者の経験から学ぶ態度を捉えるために、木村ほか(2011)の経験学習尺度を参考に、経験学習サイクル(Colb, 1984)の1プロセスにつき4項目ずつ作成した。本研究では他者経験からの学びを授業のテーマとして扱ったため、「今後もうまくなれると思うか」という形で尋ねた(作成した項目は表1を参照)。5件法。

b. 境遇活用スキル(浦上ほか, 2017)の6つの下位尺度について、それぞれ3項目ずつ抽出して使用した。7件法。

倫理的配慮 調査に先立って、個人が特定できる形で結果を公表することはないこと、成績には影響しないことなどを説明した。

表 1 他者の経験から学ぶ態度尺度の因子分析の結果

	平均値	標準偏差	F1	F2	β
c ○○がふだんから取り組んでいることや習慣が、どのような成果につながっているのか仮説を立てること	3.98	0.96	0.82	-0.04	0.80
d ○○が大切にしている考え方や態度を自分に当てはめて実践してみること	4.59	0.55	0.77	0.00	0.77
c ○○の成果や失敗に共通する要素を見出すこと	4.17	0.89	0.76	-0.16	0.70
c ○○の行動や発言の背後にある考え方や価値感を抽出すること	4.44	0.84	0.75	-0.15	0.68
c ○○が成果を出すために取り組んでいることから、他の場面にも応用できる気づきを得ること	4.37	0.66	0.71	0.03	0.72
d ○○から得たヒントをもとにチャレンジをすること	4.39	0.67	0.68	0.14	0.74
b ○○の行動を多様な視点から捉え直すこと	4.15	0.82	0.55	-0.01	0.53
b ○○の1つ1つの行動や発言にどんな気持ちがあるのかを考えること	4.51	0.64	0.53	0.10	0.57
d ○○をみながら、自分の日常の行動や態度、考え方を意識して変えること	4.59	0.71	0.52	0.17	0.59
a ○○が失敗や困難を克服するエピソードを聴いたり読んだりすること	4.60	0.63	-0.05	1.00	1.00
a ○○が新しいことに挑戦する様子を目にしたり聴いたりすること	4.63	0.58	0.01	0.77	0.76
a ○○の発言やインタビュー内容を聴いたり読んだりすること	4.56	0.71	-0.13	0.66	0.61
a ○○の様々な活動や成果に注目すること	4.61	0.54	0.12	0.54	0.57
削除項目					
b ○○の成果に関する情報を集めて分析すること	4.24	0.89			
b ○○の成功や良い面だけでなく、失敗やよくない面についても知ろうとすること	4.60	0.71			
d ○○から自分の状況にも応用できることを見つけてやってみること	4.41	0.63			

注1：冒頭のアルファベットは事前に想定した因子を表す。a.他者経験の観察, b.背景や状況の探索, c.教訓の抽出, d.能動的な実践

注2：削除項目は因子負荷量が.40未満、または2つの因子に.30以上負荷した項目である。

3. 結果と考察

表 1 に各項目の基本統計量をまとめた。1 項目を除いた 15 項目で天井効果が確認されたが、試案であるため、そのまま作成した 16 項目で因子分析を行った。平行分析と MAP 基準を参考に、解釈可能性を考慮して 2 因子解を採用した。最終的な探索的・確認的因子分析の結果を表 1 に示した。想定された経験学習の 4 プロセスには分かれず、〈他者経験の観察〉と、それ以外の 3 つ（背景や状況の探索、教訓の抽出、能動的な実践）がまとまった〈観察後の行動〉の 2 因子構造となった。

次に、他者の経験から学ぶ態度尺度と境遇活用スキル尺度の下位尺度間の相関係数を算出した（表 2）。その結果、〈他者経験の観察〉はどのスキルとも有意な相関がみられず、一方で〈観察後の行動〉では興味探索、継続、変化の 3 つのスキルと有意な相関がみられた。

4. 考察

ほぼすべての項目で天井効果があったが、これは授業が「他者の行動や考え方を自分のライフデザインにどのように活かすことができるのか」を

テーマとする授業で調査を行ったためと考えられる。他者とその経験をどのように観察・調査し、自己にあてはめるのかという学びの後だったために「うまくやれる」と回答した学生が多くなった可能性がある。また今回は、どのくらいうまくできそうかという形で尋ねたが、態度という観点では、ふだんからどの程度そのような態度を取っているかという形での測定を行う必要もある。

次に、因子構造については、参考にした木村ほか（2011）の尺度を再分析した研究でも、第 1 プロセスとそれ以外の 2 因子構造が得られていることから（池尻ほか，2021），観察後の 3 プロセスを弁別することは難しい可能性も考えられる。

最後に境遇活用スキルとの相関については、興味を持とうとするから行動を起こし、自らを変えようとする意志があったから他者の経験からの学びを実践できたのではないかと考えられる。

* 本研究は JSPS 科研費（22K02725 及び 25K06358）の助成を受けた。

主な文献

- 浦上昌則・高綱睦美・杉本英晴・矢崎裕美子（2017）. Planned Happenstance 理論を背景とした境遇活用スキルの測定 アカデミア人文・自然科学編，（14），49-64.
- 木村充・舘野泰一・関根雅泰・中原淳（2011）. 職場における経験学習尺度の開発の試み 日本教育工学会研究報告集，2011(4)，147-152.

表 2 基本統計量と相関係数

	平均値	標準偏差	α 係数	他者経験の観察	観察後の行動
他者経験の観察	4.59	0.50	.82		
観察後の行動	4.35	0.54	.88	.33 *	
興味探索スキル	5.87	0.71	.60	.24	.47 ***
継続スキル	5.15	1.22	.83	-.04	.44 ***
変化スキル	5.57	0.84	.70	.18	.58 ***
楽観スキル	5.59	0.87	.64	.07	.18
開始スキル	5.68	0.94	.74	-.01	.29
紐帯スキル	5.29	1.06	.64	.14	.05

注：* $p < .05$, *** $p < .001$

Time-Efficient Viewing (TEV)と時間的展望との関連

三田遥真¹・小塩真司²

(¹早稲田大学大学院文学研究科・²早稲田大学文学学術院)

The Relationship between Time-Efficient Viewing (TEV) and Time Perspective

Haruma MITA¹, Atsushi OSHIO²

(¹Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University,

²Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University)

1. 問題と目的

近年、タイムパフォーマンスという言葉がよく使用されるようになった。タイムパフォーマンス(タイパ)とは、時間効率や時間対効果のことであり、費用対効果を表すコストパフォーマンスをもじった言葉である(小野他, 2024)。例えば、自動化によって効率よく短時間で業務をこなしたり、動画を倍速で視聴したりする行動が、タイパの追及行動にあてはまる。

タイパを追及する行動には好ましい側面がある一方で、問題も生じている。日本経済新聞(2023)によると、「ファスト映画」と呼ばれる動画を動画投稿サイト(YouTube)に投稿した男性が、大手映画製作会社13社に計5億円の損害賠償を請求された。「ファスト映画」とは映画の内容を10分ほどの動画にまとめたものであり、「ファスト映画」を視聴すると手軽に映画の概要を知ることができる。要するに、「ファスト映画」は、映画の視聴にタイパを求める人々を対象にした動画コンテンツであるといえる。したがって、一見すると好ましいと思われるタイパ行動にも、「ファスト映画」のような問題が生じている。

タイパを追及する動画の視聴行動と他のパーソナリティおよび行動との関連を検討することは一定の学術的意義があると思われるが、現在タイパを求める視聴に関する心理学的研究は見られない。したがって、本研究では、タイパを追及する視聴行動をTime-Efficient Viewing (TEV)、タイパを追及しない視聴行動をImmersive Viewing (IV)と定義し、TEVおよびIVと、よりマクロな時間に対する態度である時間的展望との関連の傾向を

検討することを目的とする。

2. 方法

調査時期および調査対象者 2025年7月に、アイブリッジ株式会社が提供するFreeasyを用いて調査を行った。最終的な分析対象は日本在住の18歳から29歳の男女242名(男性113名, $M_{age}=25.38$, $SD=2.97$)であった。回答内容は学術的調査にのみ使用すること、回答内容を研究者以外が閲覧しないこと、回答中断や同意の撤回ができることなどを明記し、回答への同意をもって倫理的配慮とした。

Table 1: TEV-IV行動リスト

あなたが動画(テレビ番組、映画、YouTubeの動画など)を視聴するときに、以下の項目の行動をどのくらい行いますか。「全くしない」から「いつもする」までの間で、もっとも当てはまるものを選択してください。

- 1 自分で操作することができるのであれば、動画の速度を上げて視聴する。
- 2 他の作業ができるのであれば、作業をしながら動画を視聴する。
- 3 同時に複数の動画を視聴する。
- 4 自分で操作することができるのであれば、スキップして動画の一部分だけを視聴する。
- 5 動画の内容や評価などの情報をあらかじめ確認してから視聴する。
- 6 オリジナルの動画を短く編集したダイジェスト動画を視聴する。
- 7 動画の速度を変えられるとしても、通常ので速度で視聴する。
- 8 他の作業ができるとしても、作業をせずに動画を視聴する。
- 9 複数の動画を同時に視聴するのではなく、1つの動画を視聴する。
- 10 動画をスキップすることができるとしても、スキップせずに最初から最後まで視聴する。
- 11 動画の内容や評価などの情報をあらかじめ確認せずに視聴する。
- 12 オリジナルの動画を短く編集したダイジェスト動画ではなく、オリジナルの動画自体を視聴する。

注) TEV = 1 + 2 + 3 + 4 + 5 + 6

IV = 7 + 8 + 9 + 10 + 11 + 12

使用尺度 TEV および IV 傾向を測定するために、TEV-IV 行動リストを作成した (Table 1)。稲田 (2022) および川窪 (2025) が挙げている行動を参考に、TEV を倍速視聴、ながら視聴、マルチ視聴、部分視聴、内容スクリーニング、ダイジェスト視聴の 6 種類として、6 項目の TEV 項目を作成した。また、TEV 項目を反転させて 6 項目の IV 項目を作成した。「全くしない」から「いつもする」までの 6 件法で回答を募り、TEV 項目の合計を TEV 得点、IV 項目の合計を IV 得点とした。また、時間的展望を測定する尺度として、日本語版 青年時間尺度-時間的態度 (ATI-TA-J; Adolescent Time Inventory-Time Attitude-Japanese: Chishima et al., 2019) を用いた。先行研究 (Chishima et al., 2019) と同様に、ATI-TA-J の下位尺度の平均値をそれぞれの得点とした。

3. 結果

TEV 得点と IV 得点のヒストグラムを確認したところ、目立った床効果および天井効果は確認されなかった。ATI-TA-J のそれぞれの下位尺度の信頼性係数を算出したところ、本研究での使用に耐えうると判断された ($\alpha = .83 - .90$, $\omega = .85 - .92$)。TEV および IV と、ATI-TA-J のそれぞれの下位尺度とで相関分析を行った。結果を Table 2 に示す。

TEV と IV との間に相関は見られなかった ($r = -.05$, $p = .0478$)。TEV と未来肯定、未来否定、現在否定、過去否定との間に正の相関が見られ

Table 2: TEV および IV と ATAS-J との相関 ($N = 242$)

	<i>M</i>	<i>SD</i>	TEV	IV
TEV	18.51	4.78	—	-.05
IV	22.59	5.17	-.05	—
ATAS-J				
未来肯定	2.99	0.92	.22 **	.35 **
未来否定	3.21	0.84	.23 **	.00
現在肯定	3.11	0.92	.15 *	.25 **
現在否定	3.24	0.92	.23 **	.02
過去肯定	3.12	0.85	.11	.34 **
過去否定	3.29	0.81	.22 **	.07

注1) ** $p < .01$, * $p < .05$

注2) TEV: Time-Efficient Viewing, IV: Immersive Viewing

た。また、IV と未来肯定、現在肯定、過去肯定との間に正の相関が見られた。

4. 考察

TEV は、全ての時間区分での否定的展望の高さと関連があることが示された。また、IV は、全ての時間区分での肯定的展望の高さと関連があることが示された。TEV を行う理由の例として、稲田 (2022) は、コンテンツを消費するものだととらえて目的の情報以外を無駄だと判断する傾向を挙げている。本来娯楽として生み出されたコンテンツを消費物としてとらえる行動やそのような環境に身を置くことが、人生の多くの要素を否定することにつながり、その結果として自身を取り巻く時間を否定的にとらえることに結びついているのかもしれない。また、TEV と未来肯定との間に正の関連が見られたことから、現在および過去に対する否定的なとらえ方が TEV を特徴づける要素だという可能性が示唆された。

今後の展望として、時間的展望や TEV、IV、アイデンティティ形成、自己形成を青少年の発達に紐づけて包括的にとらえるモデルを構築することが考えられる。石井 (2018) は、否定的展望が、広く選択肢を思案することやアイデンティティを形成することを妨げたり、反芻的探求を促進したりすることを示したように、アイデンティティの達成に時間的展望は必要だとされている (都築, 1993)。加えて、稲田 (2022) が個性化を TEV の要因の一つとして挙げたように、自己形成は TEV の傾向と関連していると考えられる。さらに、溝上 (2016) は自己形成とアイデンティティ形成を時間的展望が媒介していることを明らかにした。したがって、これらを包括的にとらえたモデルを作成することが、青少年の発達に対する TEV という新しい視点からの切り口となると考えられる。

主要引用文献

稲田 豊史 (2022). 映画を早送りで観る人たち——ファスト映画・ネタバレ——コンテンツ消費の現在形—— 光文社

青年期後期から成人期初期における Big Five パーソナリティ特性と健康習慣の関連

松木太郎¹・山岡香織²・田中秀樹¹

(¹ 広島国際大学・² 広島国際大学大学院健康科学研究科)

Big Five Personality Traits and Health Behaviors in the Transition From Late Adolescence to Early Adulthood

Taro MATSUKI¹, Kaori YAMAOKA², Hideki TANAKA¹

(¹Hiroshima International University ²Graduate School of Health and Wellness Sciences, Hiroshima International University)

1. 問題と目的

青年期後期から成人期初期は、健康行動が確立される重要な発達段階であり、その後の健康状態に長期的な影響を及ぼす時期である。健康行動を規定する要因として挙げられるのが、Big Five パーソナリティ特性である。特に、勤勉性は健康を促進する様々な行動との関連が指摘されている一方で (Gartland et al., 2020)、神経症傾向は不健康な食習慣や睡眠習慣などに関連することが報告されている (Guerreiro et al., 2024; Tokarek et al., 2023)。しかしながら、青年期後期から成人期初期において、Big Five パーソナリティ特性が、包括的な健康習慣を介して健康と関連しているのかについては、十分な知見が蓄積されていない。そこで本研究では、ブレスローが提唱した7つの健康習慣を取り上げ、パーソナリティ特性から健康習慣を経由して主観的健康度に至る経路を実証的に検討することを目的とする。

調査方法・調査参加者：本調査は2023年7月、A県B市の住民基本台帳から20歳以上の住民を年齢・性別で層化し、無作為抽出した対象者に質問票を郵送した。返送者のうち、性別と年齢が明記され、質問票の回答で「20代」を選択した330名を解析対象とした。本研究は著者の倫理審査委員会にて承認を得た (RIN19-022)。

測定項目：

1. Big Five パーソナリティ特性：日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) (小塩他, 2012) を使用した。外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性の5因子から成る。「全く違うと思う (1点)」から「強くそう思う (7点)」までの7件法。各2項目の10項目。

2. 健康習慣：以下、すべて1項目。①過去1か月の睡眠時間 (「全く足りなかった (1点)」から「十分だった (4点)」の4件法)、②喫煙習慣 (「吸わない/やめた (0点)」, 「吸って

Table 1. 各変数の相関分析結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
1 性別	—															
2 同居人の有無	-.06	—														
3 労働時間	-.03	.02	—													
4 外向性	.11	-.08	-.06	—												
5 協調性	-.02	-.09	.05	-.07	—											
6 勤勉性	.02	.04	.05	.11	.21	—										
7 神経症傾向	.20	-.04	-.10	-.08	-.29	-.27	—									
8 開放性	-.12	.00	-.03	.36	-.03	.15	-.02	—								
9 睡眠時間	.05	.02	.05	.04	.13	.12	-.29	-.04	—							
10 喫煙習慣	-.24	.07	-.05	.11	.05	.06	-.18	.03	-.04	—						
11 適正体重の維持	.14	-.10	.06	.02	.06	.12	-.14	-.03	.17	-.01	—					
12 飲酒量	-.16	.09	.01	.13	.06	.08	-.07	.09	-.03	.18	-.01	—				
13 運動頻度	-.13	-.03	.01	.05	.05	.14	-.06	.10	.16	.01	-.03	.14	—			
14 朝食の習慣	.08	-.02	.01	-.11	-.05	.06	.05	.02	.00	-.26	.00	-.12	.09	—		
15 栄養バランス	-.06	.06	.05	.05	.10	.16	-.11	.05	.12	-.11	.14	.03	.15	.22	—	
16 主観的健康度	.05	.06	.07	.11	.17	.03	-.22	.12	.28	-.05	.18	.06	.14	.11	.15	—
平均値		0.22	0.52	7.52	10.44	7.18	8.70	7.96	3.20	0.14	0.82	4.87	2.21	3.15	2.59	3.42
標準偏差		0.42	0.50	2.96	2.20	2.65	2.71	2.54	0.75	0.35	0.38	5.61	2.71	1.20	1.16	0.65

2. 方法

る(1点)」の2件法)、③適正体重の維持(「BMIが18.5未満または25以上(0点)」、「BMIが18.5以上25未満(1点)」の2件法)、④1週間あたりの飲酒量(1週間あたりの飲酒頻度(「飲まない(0点)」から「毎日飲む(4点)」の4件法)と1日あたりの飲酒量(「1合未満(1点)」から「5合以上(6点)」の6件法)の積を算出。得点範囲は0-24点。)、⑤1週間あたりの運動頻度(「運動していない(0点)」から「ほぼ毎日(7点)」の8件法。⑥朝食の習慣(「ほとんど食べない(週に0~1日食べる)(1点)」から「ほぼ毎日食べる(週に6~7日食べる)(4点)」の4件法)、⑦栄養バランス(主食・主菜・副菜を3つそろえて食べる(「ほとんどない(1点)」から「ほとんど毎日(4点)」の4件法)。

3. 共変量: 性別(男性 = 0、女性 = 1)、同居人の有無(一人暮らしではない = 0、一人暮らし = 1)、労働時間(週平均労働時間40時間未満 = 0、40時間以上 = 1)。

4. 主観的健康度: 「健康でない(1点)」から「健康である(4点)」の4件法。

3. 結果

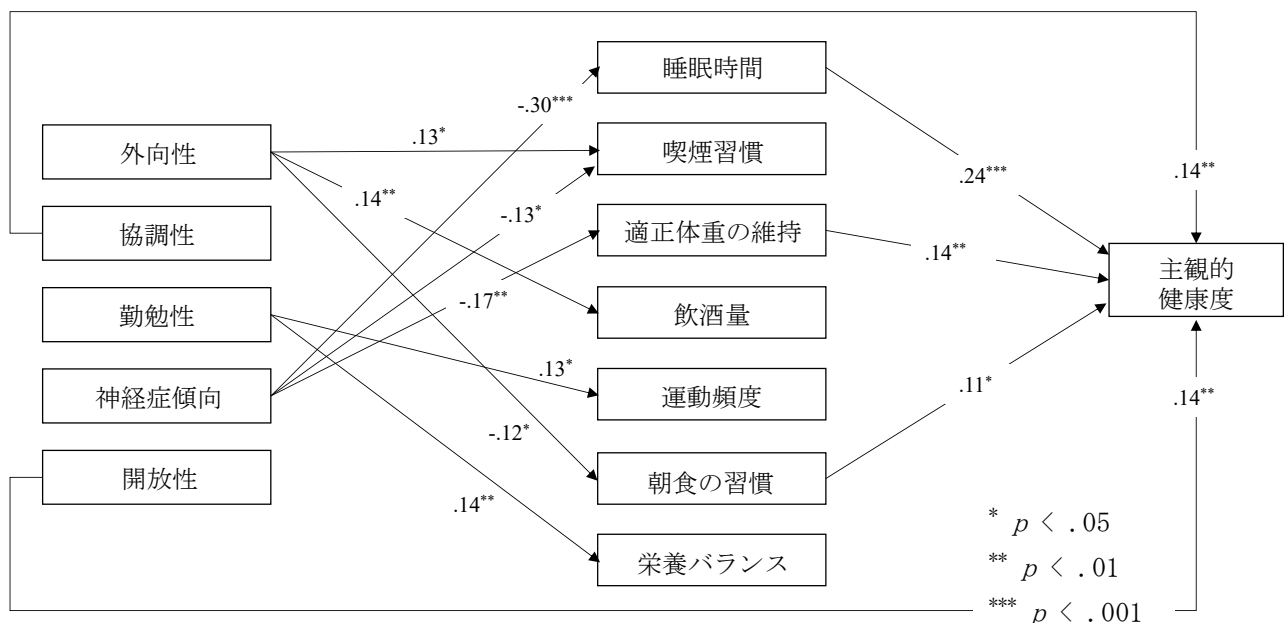
各変数の相関分析結果を示し(Table 1)、パス解析を行った(Figure 1)。

パス解析の結果、モデル適合度の指標は、 $\chi^2(70) = 86.19, p = .097, CFI = .955, TLI = .933, RMSEA = .027$ (90%CI [.000, .044]), SRMR = .046 であり、良好な適合度を示した。外向性は喫煙および飲酒と正の関連を示し、朝食の習慣と負の関連を示した。勤勉性は運動頻度と栄養バランスと正の関連を示した。神経症傾向は睡眠時間、喫煙習慣、適正体重の維持と負の関連を示した。協調性と開放性は主観的健康度と直接関連し、いずれも正の関連を示した。睡眠時間、適正体重の維持、朝食の習慣が主観的健康度と正の関連を示した。

4. 考察

外向性の一側面である刺激追求は飲酒量と関連することから(Lui et al., 2022)、本研究において、外向性は飲酒および喫煙と正と関連を示した可能性が考えられる。勤勉性は健康行動の促進要因の一つとされるが(Gartland et al., 2020)、特に食事や運動に関する健康行動が実践されやすい可能性が示された。一方、神経症傾向は自己制御の低さなどが要因となり、健康行動と負の関連を示すことが報告されているが(Sirois & Hirsch, 2015)、本研究では特に睡眠時間の不足を介して主観的健康度と負の関連を示すことが示唆された。

Figure 1. パス解析結果



日本青年心理学会第33回大会 ハラスメント防止のための基本方針

日本青年心理学会第33回大会準備委員会および大会運営改革検討WGは、本方針を大会運営の基本方針とし、すべての参加者に周知します。

1. 趣旨

本大会は、多様な立場・専門・世代の研究者が集い、対話を通して新しい知を創造する場です。私たちは、すべての参加者が安心して発表・討論・交流できる環境を確保することを重視します。

2. 本大会におけるハラスメント防止のための基本的立場

- (1)すべての参加者の人格と尊厳を尊重します。
- (2)性別・年齢・国籍・職位・障がい・性的指向・価値観・研究分野など、いかなる違いによる差別・排除・侮辱的言動を認めず、すべての参加者に対してそのような行為を行わないよう呼びかけます。
- (3)研究の発展に欠かせない自由な意見交換と建設的な批判的対話を尊重します。ただし、個人攻撃や威圧・嘲笑・排除的態度となる場合は、学問の自由の名の下でも容認しません。

3. 対象となる行為とその範囲

- (1)「ハラスメント」には、セクシュアル、パワー、アカデミック、マタニティ／パタニティ・ハラスメント(出産・育児に関するハラスメント)など、身体的、精神的、社会的に人格を侵害する行為を含みます。
- (2)対面だけでなく、オンライン上での発言ややり取りを含みます。
- (3)発表、議論、懇親会、SNS上の発言など、大会に関連するすべての場面を含みます。

4. 発言と議論における留意点

本大会では、多様な参加者が集い、自由な意見交換を通じた学術的対話が行われます。発言や議論に際しては、以下の点にご留意ください。

- 自由な議論は、参加者が安心して発言・参加できる環境の中でこそ成立するものであり、相互の尊重に基づいて行われる必要があります。
- 発表者や発言者に対し、属性・立場・経験等を揶揄・軽視するような発言は控えてください。
- 批判的な視点を提示する際にも、対話的な理解を促す表現を心がけ、対人攻撃とならないようご配慮ください。
- 発言の意図と受け取り手の感覚が一致しない場合もあることをふまえ、他者を意図せず傷つける可能性があることを常に念頭に置いてください。

5. 相談先

この基本方針に反する言動があった場合は、以下の二名の会員までご相談ください。

連絡先メールアドレスが必要な場合は、大会受付までお問い合わせください。

- ・日本青年心理学会事務局：池田幸恭
- ・日本青年心理学会 大会担当常任理事：藤井恭子

研究は、他者との対話を通して進化する営みです。本大会が、立場や背景を超えて安心して学び合い、互いの探究を尊重しあう場となることを願い、ここに本方針を掲げます。

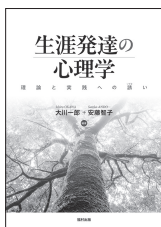


恋愛と結婚の心理学

恋愛心理学研究の現在地
高坂康雅 著

■A 5判／並製／244頁 ◎定価 2,750円

近年の研究成果をもとに『恋愛心理学特論』を大幅改訂。刷新された構成とデータで迫る異性恋愛の“今”。



生涯発達の心理学

理論と実践への誘い
大川一郎・安藤智子 編著

■A 5判／並製／300頁 ◎定価 3,080円

生涯発達心理学の基礎から高度な知識まで網羅。2色刷、豊富な図表、コラムと読書案内で教科書にも参考書にも。



トラウマ センシティブ スクール

安心して学べるやさしい学校づくりの理論と実践
岩切昌宏・瀧野場三 監修
内海千種・中村有吾・石橋正浩 編

■四六判／並製／258頁 ◎定価 2,640円

教職員がトラウマや逆境の小児期体験に関する理解を深め、児童生徒が安全に過ごせる環境づくりの理論と実践。

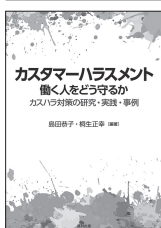


新・脳から始めるこころの理解

心理学・脳科学による心の見方
安部博史 編著

■A 5判／並製／266頁 ◎定価 3,080円

大学生や臨床現場の担当者向け、心理学・脳科学の知見からAIやネット依存まで網羅した「脳」の入門書。



カスタマーハラスメント 働く人をどう守るか

カスハラ対策の研究・実践・事例
島田恭子・桐生正幸 編著

■A 5判／並製／248頁 ◎定価 3,300円

カスハラの最新研究成果・事例を基に、企業や組織の現場で使える対策を示す実務者・研究者向けガイド。



欺瞞と嘘発見の科学入門

クリス・N・H・ストリート 著
太幅直也・佐藤 拓・村井潤一郎・田口恵也 訳

■A 5判／並製／322頁 ◎定価 5,940円

嘘に関する古典的および最新の心理学研究と、嘘検知を理解するための理論的アプローチについて論じる。

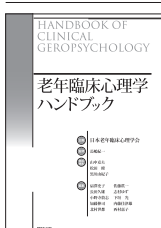


おもちゃ de セラピー

子どもの心理臨床におけるおもちゃとゲームの使い方
丹 明彦 編著

■A 5判／並製／242頁 ◎定価 2,970円

プレイセラピーにおけるおもちゃやゲーム、人形、ボール、将棋等の治療的意義を探究。事例も豊富に紹介。



老年臨床心理学ハンドブック

日本老年臨床心理学会 企画 長嶋紀一 監修
山中克夫・松田 修・黒川由紀子 統括編集
扇澤史子・長田久雄・小野寺敦志・加藤伸司・北村世都・佐藤眞一・志村ゆず・下垣 光・内藤佳津雄・西村嘉子 編集
■B 5判／上製／672頁 ◎定価 30,800円

日本の超高齢社会におけるあらゆる重要概念を第一線で活躍する66名の専門家／臨床家が分かりやすく解説。

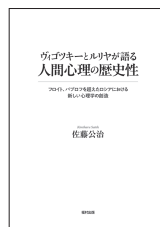


環境移行期の時間的展望の発達における個人差

児童期・青年期における3つの縦断調査データの分析
都筑 学 著

■A 5判／並製／122頁 ◎定価 3,300円

子どもの発達に大きく影響する環境移行期における時間的展望の個人差を、3つの縦断調査から明らかにする。



ヴィゴツキーとルリヤが語る人間心理の歴史性

フロイト、パブロフを超えたロシアにおける新しい心理学の創造
佐藤公治 著

■A 5判／並製／218頁 ◎定価 3,300円

フロイト、パブロフ、ピアジェを超えて、人間の精神とその発達を歴史的視点から捉える新しい心理学の創造。

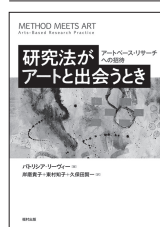


プロセス・ファシリテーション

人と人、人と社会がつながって育つ、人間関係づくり体験学習プログラム
林 芳孝 著

■A 5判／並製／236頁 ◎定価 2,970円

人間関係づくりを楽しく実践的に学べる、ファシリテーションのための16の体験学習プログラムを紹介する。



研究法がアートと出会うとき

アートベース・リサーチへの招待
パトリシア・リーヴィー 著
岸 磨貴子・東村知子・久保田賢一 訳

■A 5判／並製／396頁 ◎定価 6,930円

アートベース・リサーチは学術論文の限界を超え、研究を社会にひらく。その実践法を豊富な事例を交え解説。



新・消費者理解のための心理学

永野光朗・秋山 学 編著
(第2版)

■A 5判／並製／304頁 ◎定価 2,970円

消費者行動の心理学的・経済学的側面を解明し、今日のマーケティング戦略に役立つ知識を提供する。



誰にも言えない汗の悩み

多汗症のための心理学的・医学的サポート
藤後悦子・山極和佳 編著
NPO法人多汗症サポートグループ 協力

■A 5判／並製／208頁 ◎定価 2,200円

汗で困っている人必読！ 汗の悩みの数々を紹介し、心理学・医学の専門家が多汗の対処法をアドバイスする。



心理臨床における「見立て」

こころの支援にむけて見立ての本質的意味を探究する
高橋靖恵 監修
西 見奈子 編
■A 5判／上製／164頁 ◎定価 2,970円

いかにしてクライアントのこころの核心を見立てて支援に結び付けるか。その本質的意味を探究する。



新版 ロールシャッハ法解説

名大法マニュアル
名古屋ロールシャッハ研究会 編

■B 5判／並製／178頁 ◎定価 3,190円

名大法の実施から分析・解釈までの基礎的な方法と、理解しやすく詳細な実践例も収載した必携のテキスト。



福村出版

〒104-0045 東京都中央区築地4-12-2

TEL 03-6278-8508 FAX 03-6278-8323

<https://www.fukumura.co.jp> ◎定価は税込み価格です。

日本青年心理学会 第 33 回大会

大会準備委員会

委員長 佐藤有耕(筑波大学)
事務局長 藤井恭子(関西学院大学)
千島雄太(筑波大学)
池田幸恭(和洋女子大学)
高坂康雅(和光大学)
齊藤誠一(大阪親愛学院大学)
下村英雄(労働政策研究・研修機構)
宇井美代子(玉川大学)
矢野康介(筑波大学)
渡辺伸子(東北公益文科大学)

日本青年心理学会・大会運営改革検討 WG

藤井恭子(関西学院大学・大会担当常任理事)
溝口 侑(関西大学・原稿編集担当)
茂垣まどか(帝京大学短期大学・大会会計担当)

日本青年心理学会第 33 回大会発表論文集

2025 年 11 月 13 日発行

オンライン版のみ

発行者 日本青年心理学会第 33 回大会準備委員会
e-mail:jsyap33sy@gmail.com
日本青年心理学会 大会運営改革検討 WG
e-mail:jsyap.conference@gmail.com